
Trigger Point

群青 坊哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Trigger Point

【Z-TRIGGER】

Z4818T

【作者名】

群青 坊哉

【あらすじ】

竜伝説が眠る地に住む御子柴惣一は地元高校に通う一年生。彼が竜駒巫覗の少女と出会った時、伝説は再び目覚め、日常は非日常へ遷移する…………俺。一体これからどうなるんだ？

恐らく何一つ不自由なく生きている人間は、自分の死といつものへの関心が薄い。

必ず最後には訪れる刻なのに、家族、親戚、近所、テレビ、インターネット……”死”というものがそこらかしこに溢れているこの世界で、警戒するどころか恐ろしく無防備に行動する。生と隣り合わせである”死”を、驚く程他人事に捕らえている。

それが、恐怖のあまり無意識に避けていたためなのか、与えられた生を謳歌すべく死という概念に囚われないよう行動している結果なのかは判らない。

それでも”死”というものに触れた時、ようやく人はうすらぼんやりと己の死について考えをめぐらせる。自分の死とはこんなものだろうと、希望にも似た想像をする。ほつくり逝きたい。家族に見守られて老衰。でもあまり長くは生きたくないな。エトセトラ……。しかし、いざその場面に直面してしまった御子柴惣一は、自身を襲うあまりの光景に現実である事を拒否しようとした。

勿論、”死”というものが、予告もなしに訪れる理不尽なものであるという理解はあった。一見頑丈そうに見えるこの肉体も、病気や交通事故、通り魔など、日々テレビが伝えるような不幸に見舞われる事で驚く程あっけなく壊れ、死に至るのだろうという事も想像していた。しかし、今置かれている状況は素直に”死”を受け止めるには、なんというか……あまりにも非現実的だった。

なんかこう……ゲームなんかで見るような大剣が、背中から自分の胸を貫通してたりしているわけだ。

「…………どういうこと?」

間抜けな言葉が思わず漏れた。あ、喋れるんだ。これってやつぱ

夢？「ぐぐぐぐぐ」と心臓は早鐘のように煩く鳴るのに、頭はぐこかぼうっとしている。思考が鈍っている。痛みも感じない……つて事は、これやばいんじゃね？ 焦りに似た感情が胸の奥で疼いている。

それでも網膜は一寸も余所へ逸らすことなく律儀に、胸から生えた銀に光る剣先を映し続けていた。あたかも、いい加減に現実として受け止める、と言わんばかりに。

じわじわと痛覚が疼き出した。あ、やっぱやばい、やっぱいつて。早く、早くなんとかしないと絶対死ぬ。でも、なんとかって……？ 回らない頭で惣一はそれでも状況を把握しようとする。わからなまま死んだらきっと気持ち悪い。つまりはこれ、夢なの？ 現実なの？ 思考が追いつかない。誰でもいい、誰か、俺の質問に答えてくれ

「じつこいつとも何も、田にじた世界が全てだ」

背後からハキハキとした高い声がかかった。
距離は恐らく一メートルも離れていない。なに、そんなに傍にいるんなら助けてくれよ。惣一は振り返ろうとした。しかし、体は金縛りにあつたように動いてくれない。

「現実を受け止める。おまえはもう、終わる」

声に応じるようにぐぐぐと、一際大きく心臓が踊つて、直後、全身をバラバラに裂かれるような痛みが惣一を襲つた。頭の中でチカラと鳴る警告の赤。同時にすうっと意識が遠のいた。

……んで。結局なんで、こんなことになっちゃったんだ？

ぼつんと浮かんだ素朴な疑問に、僅かに踏みとどまつた意識は今日一日を大急ぎで記憶から検索する。ああ、これが走馬灯つてやつかな。惣一はほんやりと思つた。

朝。たとえ一秒たりとも無駄に出来ない忙しい時間帯に、しかし御子柴家の両親は、盛大に別れを惜しんでいた。

「だから離れる！ 遅刻するだら！」

「だつて、だつて……、今日でそつちやんとお別れかと思つと私……！」

「そだぞ惣一！ 惣一は悲しくないのかい？ 泣いてはくれないのかい？ なんて薄情な息子だら、父さんおまえをそんな子に育てた覚えは無いぞ！？」

「たかだか一週間、海外旅行で家離れるだけだらが！」

「やつぱりそつちやんも一緒に……！」

「学校なんか休んで……！」

「だから週末試験があるんだつて……何度も言わせるな！」

首周りにぶらさがる両親を引きずつて惣一はなんとか玄関に足を運んだ。靴を履くと泣いている両親を順に引っ張がす。

「とにかく！ せつかく福引で当たった一等ペア旅行券だろ？ 僕は大丈夫だから楽しんでこなこと。抽選券くれた飯沼にも悪いじゃん」「だつて私、心配なんだもんそつちやんが……！」

「心配はありがたく受け取つとく。だから行つてこい。つうか、高校生が留守番一つ出来ないでどうするつて話。父さん俺をそんなヤワな子に育てた覚えは無いだろ？ 遅刻するようなだらしの無い子供に育てた覚えは無いんだろ？」

「そだけど……でも僕達は……！」

「てな訳で！ 僕学校行つてきます！ 土産期待してるからー！」

「そつちやん……いかないで…」

「そつちー！ そつちーいーーー！」

両親の絶叫の中扉を開けると、門前に集まっていた近所の住人の目を避けるようにして俯き、惣一は全速力で家から離れる。途中振り返つて両親が追いかけていない事を確認すると、盛大な溜息を吐いた。

「……………エリの世界名作劇場だよ……………」

親父達、このこと知つたら……泣くだらうな。死ぬ程。目に見えて……ああ、段々頭痛がしてきた……。

「おはよっ。御子柴君」

頭上から降つてきた優しい音。

窓から差し込む柔らかな朝の光に照らされたふわふわの栗色の髪。凛とした細面が、ふわりと微笑む。

「ああ、はよ……飯沼」

週明け月曜、少し早めのバスに乗ると会える丘上のお嬢学校の女生徒。

他愛の無い会話の合間に覗く横顔は、ようやく見慣れてきた惣一でさえも、はっと息を呑む程整っている。

大きな強い瞳が、視線に気づいて惣一を見た。

「…………私は、以前から御子柴君の事知つてたんだけどな」

飯沼……あの時、前から俺のこと知つてたような事言つてた……？ もしかして……いやいや、相手はあの飯沼だぞ？ そんなんはずないだろ……うん。そつだ、でも……気になるよなあ……」れつて、未練てやつ？

「うはよー。月曜恒例、棒立ちちちやん

「また何ばさつとしてんだよ惣一！」

悪友ども。毎日見る印場高の校門。校舎。級友。帰り道……走馬灯どころか、今日一日を頭に浮かべた惣一の意識は、消えるびしるか徐々に覚醒していく。

……そうだ。学校帰り。今々。古いタバコ屋の前の交差点で俺は、いきなり突っ込んできた車に轢かれたんだった。

「…………い

そして、背中から大剣で突き刺されて意識が戻つた。

「痛いつつてんだよ…………」

前後が通じない。

意識を失っている一瞬で、一体何が起こつた……？

「…………馬鹿な」

驚愕の高音が背中から 己を貫いている剣を通して惣一の意識に直接響く。

「おまえ。中に入つてまだ、意識を保つていられるのか？」
「……何わけのわからない事を……」

「状況がわからないのか？」

「状況？」

言われて惣一は、先ほどまで自身を苦しめていた激痛が収まっている事に気づく。恐る恐る、視点を自身の胸に下ろした。
先ほどまで、確かにこの胸から突き出していた剣先が……なくなっている。慌てて胸を撫で下ろした。傷どころか、出血すらない。うそだろ。両の掌を呆然と見下ろして、数秒。惣一は新たな異変に気づいた。

正面に、自分を覗き込んでいる、大きな一つの黒目がある。

「……うわー」

慌てて飛びのいた。尻餅をついて初めて違和感に気づいた。ぺたぺたと、地面、側面、天井を両の手で確かめる。惣一は透明な球状の物体の中に居た。いつの間に。

「な、なんだよこれ……ー?」

かすれた情けない声が喉から出た。わけのわからない事ばかりで思考が追いつかない。惣一の頭は視覚、触覚、それから聴覚から与えられた情報を整理する作業でてんやわんやだ。早く現状把握、現状把握……。

「おまえが居るのは、一守の水晶球の中だ」

さつき聞いた音と同じ声が球体の中に響いた。

ひょっとしてこの大きな目の主が話している……？

「こちもり? すいしょうつきゅう? ……?」

呟くよつと声を上げると、大きな目は頷くよつと瞬きをした。

「水晶球は御靈を一時的に保管する巫覡具だ」

「……よくわからないんだけど。つていうか、あんたが『デカイんじやなくて、これ……、ひょっとして俺が小さくなってる?』

「まあ、わうだな。おまえは一時的に私の式になつていいという事だ」

「シキ?」

「式守といつ」

「シキガミ……つて……」

聞いたことのある単語だ。様々な情報が行き交いパンク寸前の頭を何とか宥めて、惣一は記憶を探る。確かホラー映画とか、そういうの……。

「おまえはびつやけり比較的冷静な状態を保つていいようだが、……突発的な死によつて志半ばで命を絶たれた御靈は死の直後、状況が解らずに暴走するものなのだ」

「……死つて。……俺、死んだのか?」

「やはり記憶が混乱しているようだな。ほら、そこを見てみろ。水晶球に入った今なら冷静に見れるはず」

言つて、でかい二つの目はいなくなつた。代わりにどこかで見たよつた風景が飛び込んでくる。

いつも通る交差点のそこは事故現場だつた。一台の乗用車が角のタバコ屋に突つ込んでいる。少し離れた位置に人盛り。時折隙間から見えるのは、大量の血に染まつた見覚えのあるブレザーと男子生徒

「もしかしなくても、あれは、俺……なんすか？」

引き攣った表情になつてゐるのが自分でもわかる。球体に両手をついて食い入るよつに見ていた惣一の頭上から、やはり冷静な高音が降ってきた。

「つい数分前の事だ。車が突っ込んできて信号待ちをしていたおまえを轢いた。おまえの体は数メートル離れたあの位置にかつとんで……即死だ」

「…………」

「記憶にあるような、ないような……。覚えているのは帰り道までと、それから、身体を襲つた強烈な痛みだけだ。そしてあの……大剣。

「…………一つわからないんだけど」

「なんだ」

「…………俺、交通事故で死んだんだよな？」

「ああ。私の目の前で吹つ飛んでいった」

「なんで剣が貫通してたわけ？　俺今そこら辺りの記憶がないんだけど」

「刺したのは私だ」

「…………！？」

惣一は声を振り返つた。見上げた先には女の子の姿があつた。肩までのストレートの黒髪と、大きなつり目が特徴的なまだあどけない少女の顔。……やつぱり異様に巨大だが。

黒い無地の着物に身を包んだ少女の瞳は、惣一の身体を囲んで大騒ぎしている人々を見ていた。

「言つたはずだ。御靈は死の直後、混乱して暴走する。故に私はその場面に遭遇した場合、御靈を先ず水晶球に入れ、状況を説明した後で昇天させるようにしている。おまえが見た剣は『龍角』。自分よりも高い靈力を持つ御靈を水晶球に取り込むために私が用いている龍駒だ」

「……よつするに。俺、この後、成仏させられるわけ？」

「順当に行けばそつなる」

惣一の言葉に視線を戻した少女は、無表情のまま、こくりと首を上下に動かした。

「！？ 馬鹿な、俺、まだ生きてるじゃん、成仏つて……俺本当に死んじやうじやん！」

「話を聞いていたか？ 既におまえは死んでいて、今のおまえの状態は御靈……ようするに幽靈だ。死の後に昇天だ。一緒にたにするな」

「一緒にのことだろ！ 昇天つて、昇天したら、俺こつして話す事もできなくなるんだろ！？」

「存在自体が無くなる」

「いやだああああああ！ ここからだせーーー！」

絶望の声を打ち消すように腹の底から叫んで球体を力任せにバンバン叩いた。が、柔らかくて硬い……ここにやくのような感触の透明な壁は、惣一の拳をその都度優しく包み込んで 破損するどころか嬲一つ入らない。

真顔でその様子を見続ける少女。

「こいつなつてしまつから、水晶球に入れた。以上が事故後ここまで

の経緯だ。理解出来たか」

「出来んわーー！」

即答に、僅かに困った表情を示す少女。

「……厳密に言えば、ここから出す事は可能だ」

「！ なら早く……！」

黒目はそこで惣一を真っ直ぐに見た。強い眼差しに貫かれて、言いかけた言葉を思わず飲み込む。

「しかしおまえの肉体は壊れている。この水晶球以外、どこにも戻る場所はない」

「…………壊れてるって…………」

「精神体 おまえの今の状態の事だが にダメージが無からうが、壊れた体には入れないという事だ。どんなに靈力が高い者であろうと、どんな術を使って肉体を復元したとしても、どうしたって一度切れた命糸を癒着させる事は出来ない。それが”死”というものだ」

「…………死」

「御靈のまま現界を彷徨うと、惡靈に取り込まれたり、場所や生人に固執してその身が惡靈と化したりする。そうなつてしまつたら昇天も叶わなくなってしまう」

「…………そういうの、なんか……ホラーとかで聞いた気もするけど……靈能力者とか、陰陽師とか、そういうのだろ？」

「精通しているのなら話が早い」

「え？」

「おまえに害を加えるつもりはないのだ」

黒瞳から険が取れた。

「私はおまえを救つたためにここにいる。一緒に来い」

「…………救うつて」

「無論、昇天させる事だ」

それって……あんまり救われないような…………。思つたが惣一は口にしなかつた。目の前の瞳が、あまりにも優しかつたからだ。きっと、こいつの言つている事は本心だ。このわけの解らない喪服女は、本気で俺のためになると思つて言つてている。

俺……死んじまつたのか……。惣一は自身の両手を見る。全く実感がない。記憶が無いからしようがないのかもしれないが、それにしたつて現実味がない。今、球体に閉じ込められている事もだ。心のどこかでまだ、これは現実ではないと思つてている。世界が自分を騙しているような、次の瞬間ではっと田が覚めて、なんだ夢かとホッと胸を撫で下ろしている自分が見える。説明をしてくれたこの少女が信じられないわけではない。自身が死んだという事実がどうしたつて受け入れられないのだ。

「…………俺は」

言いかけたその時、人だかりから大きなざわめきが聞こえた。

「おい！ しつかりしろ！！」

「わかるか！？」

「どうしたんだろう……なんかあつたのかな」

黒目を見上げるが、喪服女の横顔にも疑問の色が見て取れる。その瞬間、一際良く通る男の声がした。

「救急車まだか！？ まだ、生きている！ 息があるぞ！」

答えるよつに聞こえてきた救急車のサイレン。けたたましい音に

徐々に搔き消されて「ごめんなさい。

「…………え？」

「…………え？」

二人は同じ方向を見て、呆然と立ちすくんだ。

「これはこれは……大変な事になりましたね」

遠くで回る救急車の赤いランプが点滅するように辺りを照らす中、飯沼一華は背後に忍び寄った人物に振り返った。

と、風が吹き一華の長い髪を攫つた。目を細めた隙に左手をとられる。自身を拘束した者をしかし一華は澄んだ目で射た。

「…………相変わらず、貴女の瞳は意識を奪いますね。さて。こうしてお目にかかるのは何度目でしょう。直接言葉を交わすのははじめてのことだと記憶していますが」

「どういう意味？」

「なにがですか？」

「さつきの言葉と、それからこの手。貴方がこんな所に居る事も「意味する」とは一つだと思つますが」

「…………」

「導きと。監視ですね。竜駒巫覟として当然の働きかと」

「…………そう。私と同じと言つつもりなの」

「違いますか」

「ええ。勘違いです。貴方だけの。……無理もないけれど」

「へえ。やけに含みのある言い方ですね。思つたとおりだ、貴女と居ると退屈しない」

一華は諦めたように小さく息を吐いた。その困った表情を黒い長髪の男は楽しげに眺めている。

「楽しみだな。これからは貴女の色々な顔が見れる」

「一つだけ、いいかしら」

「なんなりと。竜玉」

「貴方の言う『監視』を続けるつもりならそろそろ手を離した方がいいと思うの。すゞく目立つてゐるから。私達

「これは失礼」

大げさな素振りで両手を揚げて一華の細い手首を離す。

頭上から男に向けられていた殺気が薄れた。

やれやれと肩を竦めてから、男は改めて一華と、彼女の視線の先を視界に入れる。

「護衛はともかく、彼らは気づきませんよ。それどころではなさそうですし」

「そうね。……でも、もつ」

黒い少女は、医療スタッフが行き交う廊下の白い壁に腕を組んで凭れていた。背は百五十センチもないだろう。色白の肌によく映える漆黒の髪を頸より上のラインで切りそろえた日本人形のような姿の少女だ。身を包んでいる黒い無地の着物が一層浮いて、先ほどから奇異の視線の一斉放射を浴び続けている。

呆然と病室からドアを通りぬけて出てきた惣一は、少女の姿を認めると浮いたままゆっくりと近づく。

少女は通り過ぎる人々の視線を物ともせず、ただ目を閉じたままていた。……いや、よく見るとその頬を一筋の汗が伝っている。さすがにこの立派な居心地悪いだろうな。ぼんやりと思いながら正面に立つと惣一は力の無い声で少女に訴えた。

「……なあ。体に入ろうとしてもこのままなんだけど。すかすかっと通り抜けちゃうんだけど。戻れないんだけど」「すまない」

即座に謝罪の言葉を返される。え、俺謝られた？ どうこう」と？ 未だ事態に脳の処理が追いつかず、青ざめた無の表情のままでいる惣一の目前に、少女は自身の左手首に着けている水晶の腕輪を突きつけた。

田の焦点が合い、惣一の脳が物体を認識するまでたっぷり数秒の沈黙を要した。

「ナニ」「」

物がわからないわけじゃない。どうして自分が今ここで数珠を突きつけられなきゃならんのか、意味がさっぱり解らない。

疑問符を一杯に並べた情けない表情の発する問いに、しかし黒い少女は事務的に淡々と答えた。

「おまえが先ほじまで入つていた水晶球だ」

「そか。俺さつきまでこん中入つてたんだすげえなあ。……で？」

「どゆ事？」

体に戻るにはどーすりやいいの？」

惣一の力ない視線を、黒の大きなつり目はよつやく正面から受けた。

「……これに一度入つてしまつと、成仏するまで出る事は叶わない」「出られないつて……出れてるじやん」

惣一は自身の身体を指した。半透明で後ろの景色が透けてしまつている。少女曰く、これは『幽体』と呼ばれる状態なのだそうだが、惣一に言わせればまるで幽霊だ。

「……」に来る前にも述べたとおり、一時的に水晶球から出す事は可能だ。そもそもこれは元々靈を使役する為の一守の巫覡具であつて

「じゃなくて、そんなこと訊いてないつづうか……、成仏つて？」

「……おまえの命糸は既に水晶球に癒着している」

「生きてるのに？ こつから出られないわけ？ 俺どうなるの？」

「…………成仏してみるか？」

「死ぬじゃん……」

「…………すまない」

僅かに汗を浮かべながら頃垂れる少女に惣一は地団駄を踏んだ。

「謝るのはいいから、なんか出る方法！ 入れたんだから出す事くらいできるだろ、訳ないよな！？ とにかくいますぐ何か方法プリーズ！」

「勿論、調べる。今から一守に戻る。戻つたらすぐだ。だが恐らく

……

「…………おそらく…………？」

「前例がない」

見渡せば、敷き詰められた真新しい青畳が数十畳。それ以外に家具等、生活感を漂わせる物質は何一つ存在しない。そんなただただ広いだけの座敷の中心に、白袴を着た小さな爺さんが座布団の上でのちょこんと胡坐を描いている。

皺だらけの顔の前で大きく広げた扇から大きな一つのつり目を覗かせてしばらく、自分と向かい合つようにして正座する少女と、その横に座る半透明の惣一の姿を見上げていたかと思うと、あっけらかんとそう言い放つた。

またしても茫然自失の惣一と、頬に一筋の汗を流す少女。

「靈力ゼロの人間を水晶から出す方法なんぞ、知ラン」

意味ありげな視線で少女を見た後、軽い口調でふいっと横を向く。足を崩して座る惣一の横で小さな背筋をぴんと伸ばして座つていた少女は、ピクリと僅かな反応を見せるとな怪訝な声を上げた。

「靈力ゼロ…………だつて？」

「なんチャ。お主^{おんし}そんな事もわからんのか。日々の修行は一体何の

為にやつてある。状況に囚われぬ意志と判断力、それに物事に動じぬ強靭な精神力を養えとお主にはあれほど言つておつたのに毎日やつてもそれじゃなんの意味もないヂヤろ」「…………」

少女の頭上に不可視の大岩がみしつと落ちてきたように惣一は感じた。

「今回の事だつてそうヂヤ。如何なる状況、如何なる理由があるうと生人を水晶球に取り込むなど前代未聞。竜角で殴つ叩切るなぞ言語道断ヂヤ。常日頃から言つておつたはず。お主は竜角に頼り過ぎとる。竜駒巫覗といえど、執着しすぎなのヂヤ」「…………」

少女の小さな頭がさらりと落しんと落ちる。

あ、大岩! 発目。横目で、声なき声で呟く惣一。

「今一度集中して小僧を見てみんかい。外身を覆つている靈力は半端ないが、内は殻ヂヤ。如何に生人時に靈力が高からうと、水晶球に命糸を癒着させたが最後、球に吸い取られるのがオチヂヤらうから、現時点で靈力がゼロなのは言つまでもない事ヂヤが……」

「…………」「…………ま、仮にも竜駒巫覗の名を持つ口で答えを導き解決するんヂヤな」

最後の大岩を少女の頭に落とすと爺さんは扇をピシャリと畳み、老体とは思えぬ軽快なフットワークで立ち上がると愉快なステップで座敷を出て行つた。

畳の匂いのするただつぴろい和の空間に残された少女と惣一。

少女は不自然な程に頭を垂れて数十分、固まつたまま動こうとし

なかつた。

「…………あんせあ」

無言に困り果てて、正座したままの少女に惣一は声を掛ける。……が、無反応だ。

「この口。どうみたって小学生くらいだもんな。怒られて落ち込んでいるのかな。今度は惣一の頬に一筋の汗が伝つた。参つたな。自分は一人っ子だ。子供のお守なんてやつたことない。

「…………なあ。このまま居てもラチあかないし。済んじやつた事は仕方ないしれ……とりあえず行動しない？」

言いながら、少女の前に回つて様子を伺う。
辞儀でもするかのように頭を垂れた少女の顔は……意外な事に無表情だった。

「…………『とりあえず』？」

顔を上げると同時に、大きな黒瞳が惣一を刺す。
てつきつ泣いているかと思つていた惣一は思わずびくつと肩を鳴らした。

「…………あ、ああ、そつ。『とりあえず』。…………それにわ、腹減つてるんじゃないか？ もつ飯時過ぎてるんじゃない？」

室内には畳と壁と障子、それから和を匂わせる照明があるだけで時計の一つもない。ないのだが、病院を出た時点で辺りはすっかり夕闇に染まっていた。晩飯の時間は既に過ぎてはいる頃だらう。
惣一の言葉に怪訝そうな表情を返す少女。

「夕餉をとつている場合では……」

「だから『とりあえず』って事です。あ、ほり。腹は減つては戦は出来ぬって言ひじやん。聞いたことない?」

「…………ある

せりと揺れる黒髪。素直にうべつと頷く少女の様子に「だろ?」と笑んでみせる。

「こんな何にもないところで塞ぎこんでるよつはよつほどこい。留まつてたらどんな綺麗な水だつて淀むだ。いい事ないって」「…………塞がる……こんでいると言つか。私が」「あれ、違つの?」

惣一の驚きの表情にて、少女はぱつが悪そつに視線を逸らした。

「…………違つとも。今後について考え方を巡らせていたといふだ

「へえ……そつ

半田で空返事をしてやる。強がりを。可愛げのないガキは特に嫌いだ……。

「…………先ほどから氣になつてたが、私はおまえと同じ歳だ。ガキではない」

視線を落としたまま、少女は告げた。声色に若干不機嫌な色が混ざつてゐる。

「へ」

……同じ歳だつて？ 惣一は改めて少女を見た。小柄な体型にあどけない顔立ち。見たところラングセルを背負つて小学校で給食食べ……が似合つそつた容姿だ。最低でも中学生……、

「同じ歳だと言つて……。今年で十七。学校に通つていればおまえと同学年になる」

「つむ。全然見えね……。つづつか。もしかして。俺の考え……。読んでたり、……。する？」

「水晶球に入った時点で、おまえは生人であろうと私の式という立場にある。式の思考を把握する事はそれを使役する者の義務だ。尤も、読んでいるといつよつは……。球を通してなんとなく伝わるという程度だが」

「つづわーあい……」

惣一の頭から血の気が引いた。サイアクだ。さらに問題が増えた。思春期男子の頭の中が女子に駄々漏れ 垂れ流し状態……だと……！？

読まればしなくてもこれは……。一大事だ。場合によつては……地獄……？ 汗が濁流のよつて落ちる。

「妙な事考えないよつてしなきや……か」

無表情のままぼんやりと広く少女。心なしか表情筋が嫌な感じに歪んでいる気がする。

「読んでるだろ！？ 絶対に読んでるだろ俺の心！？」

「む。私は嘘は言わない。おまえがわかりやすいだけだ。……ふむ。別に記憶を漁らなくとも、球に入つてからこれまで、おまえが妙な考えとやらを抱いた事はないと思つたが。……しかし、『妙な』とは一体どのようなものなのだ？」

「早くここからだせーーー！」

大きな満月が闇の降りた街を照らしていた。まるで海底に沈んでしまったかのような静けさと、小さな光が無数に広がる宙の圧倒的な存在感。吹きつける清流が生む澄んだ空気に包まれた世界。こんななりになつても風を感じる事は出来るんだな。惣一は空に寝転がつて自分の透けた掌越しに月を仰いでいた。ふいに、風を切る音がした。

下からだ。惣一は視点を移した。遙か眼下に、暗い森に囲まれた一守家のシルエットが小さく見える。惣一が住んでいる印場市の隣、同県白羽市にある白蛇神社の境内に建てられた古めかしい平屋造りの屋敷だ。その立派な庭園で少女が大剣を振っていた。

昼間俺を刺した剣か。惣一はゆっくりと地に降りる。

「すげえな、そんな大きな剣振り回して。重たくないの？」

少女は強い光を帯びた瞳でただ一心に前を見据えている。身の丈以上の刃を静かに振り上げて、一瞬静止した後、宙を袈裟懸けに斬る。

飛び散る汗とともに短い黒髪が一定のリズムで広がる。夜闇を裂く剣先が、月明かりを受けて鈍く光っていた。

「その剣。どしたの」

めげずに横から質問を続ける惣一。混乱して後回しにしていた疑問と好奇心が頭の中で一気に膨れ上がつていた。

少女は一、二、三、剣を振った後でようやく「どうしたとは？」と素つ気なく返した。正面を見据えたままリズムを崩すことなく剣を振り続けている。

「持たないでしょ。ふつー。剣なんて。そもそもそんなもん振り回

してたら銃刀法違反で捕まるし」

「これは剣ではない。『竜駒』だ」

「りゅーくつて、なに」

「竜駒とは竜駒巫覗が使役する神具。主に銃刀の形をした物が多いが、その類ではない」

「よくわかんないんだけど」

「……。何しに来た」

「身の振り方話し合おうと思つて。いつまでもこのままじゃいられないし」

「今後の方針か」

「方法探すのが先決だろ？ それか、何か考えがあるのかなって」

「ない」

「……そつきつぱり言わないでくれる。結構堪えるから」

「これから一守の書物庫を探るつもりだ」

「もう日付変わるぜ？」

「私の力は夜の方が高まる。探し物は夜の方がいい。精神統一のために竜角を扱つていた」

「りゅーかく？」

「この竜駒を示す名だ」

「要するに、その剣の名前な訳ね。……で？ 統一して、何かわかるの？」

「わからぬ」

「……だよなあ」

言つて、惣一は月夜を仰いだ。前途多難、どころではない。先行き真つ暗。光も見えない。お袋泣き喚く、だらづな。親父にクラスの連中に、それから……飯沼一華。

「せめて、無事だつて事を云ふる手段を考えんとなあ……」

溜息混じりに言葉を吐く。

少女は剣を振る手を休めると、一守はじめて惣一の姿を視界に入れた。

「周りを優先させるのだな」

「優先……つづりか、なんつづりか。現に俺はびんびんしてんし、今は問題ないだろ。まずはそつからでしょ」

「……おまえ、名前

「な?」

「私の名前一守晶。おまえの事は、なんと呼べばいい

ああ、名前の名、ね……。

本当に、解りづらいといふか、こんな口調の固い女子、見た事がない。この喋り口調はまるで厳格な親父、……そう、あのテレビで頻繁に見る某携帯会社のコマーシャルに出てこる白い犬のようだ。……一守は、田じやなくて黒いけども。

「……どうした。腹でも痛むのか?」

発症した笑いの発作をなんとか抑えようと身を屈めていると、怪訝そうに首を傾げて近寄る黒いお父さん……じゃなかつた。一守。

「悪い、なんでも……つていうか、名前だつたな」

身を起すと惣一は改めて少女 晶に向き直つた。

「俺は御子柴。御子柴惣一」

よろしく、と右手を差し出す。

晶は不思議そうな顔でしばらく差し出された手を見ていたが、ふむ、と一言。竜角の柄を握つていない方の手でその手を握つた。

彼女の手は異様に小さくて細くて温かくて……少し汗ばんでいた。

「ではミコシバと。困るのであれば直接伝えればいい。先ほども言った通り、現時点ではミコシバを水晶球から出す方法はわからない。方法を調べるのにいつまでかかるかも正直わからない。しかしその間ずっと幽体のまま、というのも何かと不便だろう」

「つていうと……本当の体には戻れなくても、他の体なんかに入る事が出来るとか？」

幽靈が人の体を乗つ取る、なんて内容の漫画を思い出して訊いてみたが、晶はまた怪訝そうな顔で首を傾げた。

「他の体、といふと……一時的でよければ、可能なのは五体満足な死体くらいだが。……入りたいのか？」

大きな黒瞳が真顔で問う。

「んな訳ないだろ！……その、思いついて、言つてみただけだよ

……

……ンな事、マジで出来るんだ。ここで頷いたら本当に誰ともつかぬ死体の中に入れられそうで怖い。想像して、惣一の背筋をぞーっと悪寒が伝つた。

「それならいいのだが。命糸を死体に仮癒着せせるより、幽体を実体化させる方が手つ取り早いからな

ほつとしたような様子の晶の言葉に、惣一の耳がダンボになる。幽体を、実体化させるだつて……？

幽体つてのは、この幽靈みたいな体の事で、それを実体化つてことはつまつ……。

「出来るのー？」

田を見開いて一気に詰め寄る惣一にも動じず、無表情のまま晶はその顔を見返す。

「可能だ。だがこの方法には危険が伴う。精神が殻を持たずには表に出る訳だから、傷を負えば精神そのものに傷を受ける事になる。それでも……」

「かまわない、かまわない。かまわないから、今すぐ実体にしてくれ！ 数日後には親が旅行から帰つてくるんだ！」

「今実体化してどうする。帰宅するつもりか」

「あ……ああ、そうだな。このままここにいたつてしまふがないし、家には帰りたい」

「ならば、少し待て。私にも準備がある」

「うわすげ。どーなつてんの？」

ぐるりと回れ右をして、屋敷の縁側に足を進めた。
慌てて惣一はその後を追つ。

「じゅんびつて何？ じつたいかの準備？」

「式の実体化には私の靈力が要るだけだ。瞬く間に終わる」

「じゃあ、なんの」

「何つて……おまえの家に滞在する準備に決まつてこらだらつ」

「…………は？」

時を止めた惣一に、晶は足を止めて振り返つた。

「必然だ。互いの距離を半径十メートル以内に保つ。それ以上は私の靈力が届かない」

「……よく状況呑みこめないんだけ。それってつまりさ。折角体もらつても、おまえと距離離れると……」

「幽体に戻る」

一瞬の間の後。

「解決してねえ。これ、わざぱり解決になつてねえ」

「…………すまない」

地に突つ伏した惣一の姿に、しおげつと頭を下げる晶の姿が、月明かりに照らされていた。

結局、惣一は家に帰らず、晶の水晶の中で一晩を過ごすことになつた。

問い合わせてみれば、晶は惣一を実体化をすると常に靈力を消費し続ける状態になると云つ。

「…………あかられ。早く言おうよやうこいつ」とは、「

「そうじつこととは？」

「消費し続けるってそれ、疲れることなんだろ？」

「それはミコシバには関係の無いこと……」

「あるの。寝覚めが悪いつづか、落ち着かないつづか……とにかくあるの」

「……………そうか。すまない」

「謝つてばつかだな……」

「……………すまない」

「うなんだよな……一守つて奴、会つたばかりの俺に頭を下げてばつかなんだ。」

よつぽどこの事態……つまり俺に対し、気に病んでるんだろう。まあこんなことになつて迷惑じやないつて言えば嘘になるけど、でも……。

今日一日見てきた晶の顔が過ぎる。小学生のような顔立ちで、しかしその眼差しは……なんといつか、懸命だ。

その仕草には女子特有の可愛らしさだと甘えなどは欠片も無く、生真面目にきびきびと動く。顔立ちのせいかもしれないが、どこか違和感があるといつか……無理をしている風に見えてしまつ。

殻もなく剥き出し状態の幽体で外をウロウロしては危険だといつ理由で無理矢理強制送還された水晶球の中。仰向けに寝転んでいるため、自然、晶の顔が視界に入る。惣一の存在を特に意識する事なく、薄明かりの下、ぴしっとした姿勢で小さな木製の机に向かい、黙々と文献を読みふけつていた。見れば正座をしている。この一定規のようなきつちりかつきりの真面目っぷりは地なのだろうけど……なんとなく危うい印象なんだよな。ほつとけないつづか。眺めながら、いつしか惣一は瞼を閉じていた。それにしても。自然、ため息が口から漏れていた。

事故を始めに、神社に住んでる本物の霊能力者に大きな剣で刺されて。

死んだと思ったら実は生きてて。

今じや体は病院で、心は水晶の中。

今日だけで不思議なことが起こりすぎた。

日常から非日常へ。スイッチが切り替わるよつて世界は激変し、一気に雪崩れ込んだ。

まだ、この状況が夢なのではないかと、心のどこかで疑っている自分がいる。それとも何かおかしなフラグでも踏んだのだろうか。記憶を漁つて過去を振り返るが差し当たつて覚えがない。

……俺。一体これからどうなるんだ？

漠然とした不安を頭に君臨させたまま、惣一の意識は徐々に眠りに落ちていった。

「ぶわ……！？ 冷て！」

水晶の中。いきなり頭上から降つてきた冷水に惣一は飛び起きた。

「…………＝コシバ？ 起きていたのか」

「起こされたんだよ！ それも、いきなり水ぶつかれて！ 風邪でもひいたらどうする…………つて。…………あれ？」

水を払おうと体に手をやつて、違和感に惣一は首をひねった。昨日から着ている制服のシャツが……全然濡れていらない。

「んあ？」

全身くまなく触つてみる。が、手のひらが濡ることはない。ていうか、どこも濡れていない。

「水など、＝コシバにかけた覚えはないが

晶の声に惣一は顔を上げた。

世の中は驚くほどに暗かった。というか、まだ夜中である。水晶自身がほのかに発光している事に惣一はこの時初めて気づいた。闇の中、白の薄い着物に身を包んだ晶がこちらをみていた。大きな目にかかる睫毛は水に濡れ、切りそろえた黒髪からは水滴が滴り落ちている。

「つて、おま……何してんの！？ 濡れてんじやん！」

慌てて球を飛び出す。宙に浮いて初めて状況を把握できた。ここは……恐らく、洞窟の中。小学生の時に修学旅行で行つた鍾乳洞を彷彿とさせる場だった。

洞窟の突き当たりには池……と呼ぶには大きすぎる湖が、端から端まで広がつている。突き当たりと言つても、厳密に言えれば洞窟はさらに深く続いているようだが、人が通れぬ程に穴が小さく、暗所である事も手伝つて、今居るこの場からは奥を覗く事すら叶わない。しかし恐らく最奥まで水に浸かつている事だろう。天井から伝う水滴が溜まつて出来たのだろうか。

晶はその湖の中心に立ち、腰まで水に浸かつている。古い木桶を手にしたまま、不思議そうに黒瞳を瞬かせて惣一を眺めていた。頭だけではない。全身びしょ濡れだ。

遠くに見える洞窟の入口からは、じつといつ音とともに冬の冷風が容赦なく吹きつけて、晶の真っ直ぐな黒髪と、湖の手前に置いてある蠅燭の炎とを揺らし続けていた。見るからに寒そうというか、痛々しい濡れ鼠の少女にぎょっとした惣一は慌てて飛び寄つた。

「大丈夫かよ！？」すぐに家に戻つて温めないと風邪ひくぞ！
やあ……！」

少女の細い肩を掴み、抱きかかえようとした。しかし、その手はすかつと、あつけなく擦り抜ける。

「？ 何をそんなに取り乱している？」

血相を変えて慌てふためく惣一の姿を怪訝かつて見上げる晶。ん？ 何、俺、変な事言つてる？ 田と田が間近でガツチリ合い、惣一は一瞬口ごもつた。

「な、何をつて……つづりか、おまえだおまえ！ おまえこそ何し

てんだよ…？ 『んなと』りで水に浸かって、正氣の沙汰とは思えない！』

剣幕に押されて、晶の表情にも僅かな動搖が生じた。

「何つて……その、沐浴だが」

「も……ぐもぐ～？」

聞き慣れない言葉に惣一は眉尻を思い切り下げる。惣一の表情を晶は不思議そうに眺めた。

「そうだ。私は毎朝六時きっかりに神社の裏手にあるこの田池で沐浴し、穢れを落としている」

底が見えるほどに澄んだ冷水の中を、裸足で平然と移動する晶。惣一は固まつたまま、呆気にとられたように小さな背中を眺めていた。確かに寒がっている様子はないが……。

「…………日課…………つてのか？ これが？」

「日課とこいつか、義務と言った方がよいが……まあそんなどうだ

水から上がるとき、蠟燭の横に置いてあつた籠の中のタオルを手にして体を拭く。小さな足が真っ赤になつていて痛々しい。

「…………その、寒くない訳？」

「寒いに決まつているだろ！」

「…ならやんなきやいいじゃん！ 『んなの絶対病氣になつて！」

「そういう訳にもいかない。これは私の義務だ」

「義務つて……病氣になつてまでやんなきやならないのか？」

「私はここ数年、床に伏せたことはない。……が、このままいくとミコシバの言う通り、すぐ不味い気がする」

「だろー？ だつたら……！」

「だから、早急にここから出て行つてもらいたい。ミコシバ

「…………な、なんでだよ、俺、これでも心配して言つてんだぜ

？ それを……」

「…………着替えたいのだが」

「…………！」

「…………早く言えりてのー！」

猛ダッシュ（？）で洞窟の入口横にへたり込んでから、明け始めた紫空の下、惣一はやつとの思いでそう吐き捨てた。

「先程はすまなかつた」

声がして、惣一は勢いよく顔を上げた。怒っているような困っているような情けない表情で、それでも大きく口を開けた。考えが及ばなかつた自分も間抜けだが、大事な事を言わないこいつも相当の馬鹿だ。一言もの申さなければならないと思っていた。が、視界に入つた晶の姿に、惣一は完全に凍り付いてしまつた。

「…………」

黒のローファーに白いソックス、リボンタイのセーラー服の上からブカブカのニットカーディガンを羽織つた晶がそこに立つていた。

「…………や、やはり変か」

惣一の表情に、動搖した様子の晶。

「…………いや…………これまで着物っぽいのしか見てなかつたから、普通の格好してるのが意外だつただけ…………つつか、全つ然見えないけど俺と同じ歳か。制服着て当たり前なんだよな…………しかし、うちの学校の制服だつたから…………余計…………」

後頭部を掻きながらフリーズした頭を徐々に解凍していく。そうだよな、黒い着物つてのがインパクト強すぎつていうか、異様だつたんだ。あんなの着た女子なんて見た事ないからな。そこまで考えてから、惣一の頭は再起動を果たした。…………ウチノ制服？

「……つうか、まさか同じ学校だったのか！？」

「私は生まれてこの方、学校という場に通つた事はない」

なぜかむすっとした表情で晶はぴしゃりと言つてのけた。

「……は？」

「この服は、富司が揃えてくれたのだ」

「はあ？」

「解放する手段が判明するまでの間、実体化させ、これまでじおりの生活を送る事をミコシバは要求し、私は承諾した」

「あ、ああ……昨日の話か」

「昨日も話した事だが、ミコシバを実態化させ続けるには距離が重要だ。私の力では最大でせいぜい半径十メートル内が限度。私は方法が判るまでの間ミコシバと行動を共にせねばならない」

「確かにそう言つてたな。……で？」

「今朝方沐浴の前にそのまま富司に報告した。その際、嬉々として渡されたのがこの服だ」

「……なんで」

「学校へ潜入するのに私の格好では目立つ、と」

「じゃなくて。なんでその富司つて奴が女子の制服持つてんだよ……しかもピンポイントでうちの学校のつて所に、そこはかとなく危険な香りが漂つてんだけど……」

「危険な香りだと？ 富司が危険だと言うのか？」

「……意味違うと思う。おまえが言つてる危険と、俺の言つてるキケン」

「よくわからないのだが」

晶が困った顔で惣一を見上げる。惣一も困った顔で晶から手を背けた。

「とにかく。富司の事は私には判らない。計り知れない人だ。朝餉の時に直接問うてみたらどうだ」

「断じて私物ではない。こんなこともあるうかと、弟子その一に用意させたのヂヤ」

数十畳あるただつぴろい和室の中央に長方形の木製テーブル……
といふが、細長いぢやぶ台。床の間の方を背に胡坐をかいていた小さな爺は、湯気だつ味噌汁を片手にひょうひょうと言つてのけた。

「つて、あんただつたのか……富司つての」

縁側に近い座布団の上に浮いていた惣一がジト皿を向けると、持つていた異様に長い……まるで菜箸のよつた箸をぐるりと器用に回して、箸先をびしつと惣一に向ける爺。

「あんたヂヤない、一守一徹ヂヤ。超有能な巫覗であるこの儂を差し置いて誰が白蛇神社の富司を勤めるといつのヂヤ」

「知らんけど。いなけど。つつうかまだ、他の誰にも会つてないけど。てか、もしかして、こんだけ大きな屋敷に住んでるの、じーさんとおまえと、二人だけつて言つ?..」

隣でびしつと正座している制服姿の晶を見る。彼女は既に皿の上の豆腐料理をきれいに平らげ、幸福そうにお茶を啜つてゐる所だつた。

問われて、僅かに不機嫌そうな顔つきで湯飲みを置くと、宙に浮かぶ惣一を見上げる。

「……一守以外にも、世話をしてくれる人が数人出入りしている」「ああ、それなら確かに昨夜から何人か目にしてる。巫女さんだろ？」

「馬鹿かお主。見てわからんのか。ありや巫女じゃないわい」「え？ だつて、白衣に赤い袴着て……」

「たわけめ。ありや、こすふれヂヤ」

「……こ、す……？」

「巫女とコスプレ巫女ちゃんの区別もつかんとは。お主も修行が足りんのあ」

「してないつつ修行なんて……」

かかつと笑う一徹の顔をジト目で睨む惣一。
つつうかさせてるのか。コスプレを。神社の富司つつうか、爺が若い子に強要？ それっていいのか！？

「強要はしていいようだが。皆嬉々として袖を通しているが」

さらに頭の痛くなるような発言が隣から聞こえてくる。……そつか、読んだか俺の心を。ジト目をそちらに向けると晶は臆面も無く惣一を見返し、口を開いた。

「なんだ、知らないのかこすふれ。富司の話では巷で流行しているらしいぞ」

「いや、巷つていうか」

何この素つ頓狂な言葉。こいつは一体どんだけ世間知らずなんだろ。さつき学校に行つた事がないとかなんとか言ってたけど……そつこえば、こんなに広い家の中、まだ一台もテレビの姿を見ていな。……ひょっとして、テレビを置いていない……とか？

「なんチャ。若造のくせに流行も知らんのか。儂の行きつけの店じや、どこのどーちゃんもやつてあるぞい」

「ふざけんな変態爺、どーせ店は店でもいかがわし……！」

瞬間、飛んでくる扇。惣一の額に激痛が走った。

「でーーー。」

な、なんで……？　俺、今、半透明なのに……。つづつか痛みどんだけ。惣一の足元にコトコトと落ちる扇。その重音に、しわがれた声が重なった。

「ハハハおひへれど〜」

「へそ……あのHロジジ一人をおひょくりやがつて……大体どうして透明の時に扇子が当たるんだよ……」

ズキズキと痛む額を押さえながら晶と一人、学校へ向かう。

晶に実体化させてもらつた惣一。今は普通の人間で歩いている。が、どうにも歩きづらい。多分、月面で歩行するところな感じではないだろうか。本物の体でない為か異様に軽い。半透明時のような宙に浮く程のものでは無いが、それでも、この場でジャンプすれば軽く目の前の電信柱のテッペンまで到達するのではなかろうか。

「富司だからな」

せつせと隣を歩く制服姿の小さな晶が、前方を見ながら素つ氣無く答えた。

「富司だから、で片付けられる事かよ」

「富司の靈力は凄まじい。私など足元にも及ばない。一瞬で鉄扇に靈力を通し幽体に影響を与える物へと変質させる事位造作もないだろ」

「うう」

「鉄……扇……？」

「ああ。鉄扇だ」

「どうりで。『扇子が当たつた』にしちゃとんでもないと思つた……」

「ああ。とんでもなかつた」

「…………ひょとしなくても、伝わつたのか。痛み」

無言で前方を見つめ歩みを進める晶の額に、横から手を伸ばす惣

一。真つ直ぐに切り揃えられた黒い前髪を搔き揚げると成る程、真っ白な額の一部が真つ赤になっていた。

日にした直後、惣一に罪悪感にも似た感情が湧き上がった。失念していた。感情が伝わるのなら、痛みも伝わるはずだ。

「……な、なにを……して……！」

声に表情を見遣ると、前髪を搔き揚げられた晶がわなわなと体を震わせていた。あ。耳まで赤くなってる。それにしてもこいつ、色白いよな。

「悪い。知らなかつた。傷を受けたら一守にダイレクトに伝わるんだ」

晶から離れる。と、前髪を素早く整えた晶が、未だ赤く染まる顔に普段の無表情を作つて口を開いた。

「だいれくと、というわけではない。//コシバが傷を負つた所で私は腫れ上がる程度だろ?」

「そうなの?」

「ああ。そういう術をかけているからな」

ふうん。怪我をしないのなら、そんなに気にする必要ないのかな。でも痛みはちゃんと伝わつているようだから……。

そこまで考えて、惣一ははたつと立ち止まつた。

「……と、そうだ。病院寄つてかなきや」

「病院? 何故だ」

「鞄そつちだし。大体登校ラッシュ時におまえと肩並べて学校なんか行つたら相当目立つし。なにより病院^{あつち}の状況が気になるし。さす

がに家族の一人も連絡付かないとか、学校に連絡されちまうだろ。

制服でどこの高校かはモロバレだらうしだ

「自宅には誰もいないのか」

「言つたと思うけど、今両親とも旅行してて、俺は一人っ子。まあ、

都合よかつたけどな。居たら居たで今頃大騒ぎだつて」

「……そんなものか」

「そんなもんだろ？ あのじーさんだつて凄まじいそうじやん

「そりか？」

「おまえって一人娘なんだろ。俺と同じように事故に遭つたらあの「スプレジーさんだつて血相変えて騒ぐと思うだ」

「…………そうだな。私がおまえと同じように事故に遭つたら……

考えるに、富司の場合」

「うん？」

「目が合つた瞬間に、不甲斐無い、ヒ。ヒビめをさしてくるだらう

「………… そうなの」

「ああ。兄が家を離れた時もそつだつた」

「……兄。お兄さんがいたの？」

「そうだ。数年前までは」

「数年前までつて？」

「兄が家を出て行つた後、富司が、あれは最早他人。兄とするなと」

「そりや確かに。凄まじいな……」

病院にて、患者の双子の兄と名乗つた惣一は、当然のように病室に案内される。

昨日同様、集中治療室のベッドに寝かされていた自分。

なんでも外傷は軽いらしく、これから精密検査を受けた後、異常がみられなければ一般病棟に移されるそうだ。意識もすぐに回復するだらうと説明された。

(んな訳ねーし。意識、外、出歩いてマスから)

話を聞きながら皮肉に笑うと、一度だけ晶がチラツとこちらを見上げた。

その後、保管されていた鞄を受け取つて、晶と二人、高校に辿りついた頃には、時計はすでに十一時をまわっていた。

当然授業中である。

「御子柴！ おまえ……大丈夫だつたのか！？」

教室に入るなり教師の大声と、クラスメート達の好奇の視線を浴びせられ、大きく仰け反る惣一。

「な、なんすかそのリアクションは……」

「こっちのセリフだ！ 当直の先生が病院からの電話に出られてな。昨夜はずつと担任の海道先生が付き添つっていたそうじゃないか」

……遅かつたらしい。

そりやあそだよな。惣一は小さく舌打つ。昨夜は色々有り過ぎて頭が働かなかつたのだ。

「……つと、自分が起きた時には先生いなかつたんで、知りませんでした。……海道先生て、今どこいます？」

「ああ、一旦こっちに顔を出してから、また病院に戻ると言つておられたが」

げ。今病院に行かれちゃ困る。
あつちには”体”が寝ているのだ。御子柴惣一が一人存在している事がバレてしまつではないか。

「職員室つすね。顔出します」

「ん、あ、ああ……しかし、本当に大丈夫なのか御子柴」「ぴんぴんしますつて」

職員室にて散々泣き喚く海棠を宥めた後、教室に戻ろうとして、ふと時計を視界に入れる。

時刻は十一時半。登校してからまだ三十分も経っていないなかつた。ふいに晶の無表情が頭を過ぎつた。

そういうえば一守の奴、屋上で待つと言つてたつけ。真冬の屋上。寒くない訳が無い。

方向転換。職員室から一番近い、中庭の自販機に足を進める。そこで惣一は、自販機横のベンチに腰掛けてオレンジジュースを飲む級友の姿を発見した。

「あれ？ 水戸？」

声をかけると、ベンチの背に凭れかかつたまま、気だるげに惣一を見上げて「うーす」と片手を上げる。

水戸光國。 惣一とは中学からずっと同じクラスで、いわば腐れ縁だ。さらさらの茶髪に高身長。整つてはいるがどちらかと言えば女性で、声も男にしては高い。背が伸びる前 中学までは、私服で居ると頻繁に女子と間違えられ声をかけられらしい。

女子にはウケがいい……といふか、高校に入つてからは実際にモテてる。

「昨日は大変だつたみたいだなー」「ちやん

どか気だるそういうものの光國の声に苦笑を浮かべる惣一。

いりしてダチとくつちやべつてるとなんだか、昨日の事が全部夢

だつたみたいだ。

「まあな。つていうか、なんでこんなトコに居るんだよ!」老公
「見て解んだろ。俺つちはサボリ。おまえ程じやないけど、昨日は
バタバタしてたからタルくてさー。んで? //「わやんこや、びつ
たの」

「俺は……まあ、俺もサボリかな」

自販機のボタンを押し、缶コーヒーのホットを二つ落とす。
捨い上げるのを見て水戸が笑つた。

「ひでーな。俺つちが飲めないの知つててそれ?
安心しろ。てめえのじやねえから」

意外そつに瞳を見開く水戸。

「お仲間がいる訳?」

「まな。ンじやそういう訳で」

「へえ~今日は訊かないんだ? 飯沼一華嬢、マル秘情報ー」

踵を返しスタスターと校舎に向かう物一元、懷から取り出した手帳
をヒラヒラさせる水戸。

「あるぞ~とひときの新情報」

……まったく、なんでこんな女みたいなきれーな面した奴が、我
が校始まって以来のド変態達が集つたと言われる新聞部改め、アイ
ドル発掘し隊の部長なんだろう。

光國が度々「この紋所が目に入らぬかー」と氣だるげに男子生徒
に掲げているあの手帳は、アイドル発掘し隊の発行する『美少女図

鑑（県内版）』の……いわばネタ手帳である。
足を止めてぐぬぬ……と唸る惣一。

「…………」

しばしの葛藤の末、惣一は苦笑いを浮かべつつ光國を振り返った。

「今度聞かせて。水戸光國」「老公様」

「うえ。折角ミリちゃん驚かせようと思つて仕込んだネタなのによ……付を合に悪いんでやんの」

ふてくされたような顔で缶ジュースを一気飲みする水戸に謝る仕草をしつつ校舎に入る惣一。

その様子を横田で見つつ、光國はぼそりと呟いた。

「……ネタばらしの時期。どう考へてももう過ぎてゐと御つんだけどなー、お嬢」

「だから、本気で大丈夫だつて。声聞けばわかるだろ? リターン帰国なんてする必要なし! 安心して。うん……うん。それじゃ」

ホットコーヒー一缶を腕に抱え、うんざりした顔で携帯を切る。「つたくあの馬鹿親、……毎度毎度しつこいつつの」声に驚いた顔でこちらを見た晶、屋上の真ん中にポツンと一人、立っていた。

「どうした。じゅぎょうではないのか」

「抜けてきたつづうか。義務果たしてきたつづうか、サボリつづうか。このままここに居たつて誰も文句言われない状況が完成してゐ

「ふむ。では何しに来た」

「なにしこって……ほら。どうかなつて様子見に」

缶コーヒーで両手が塞がつていたので、顎で晶を指す。

キヨトンと突つ立つている晶に近寄つてコーヒーを一缶半渡すと、無表情で大きく首を傾げた晶は頭を元の位置に戻しつつ口を開いた。

「校舎全域に私の力が届くよう数箇所に陣を設置した所だ。実体化に支障はない」

「じゃなくて。寒くないかなとか思つて…………愚問だつたな。こりや寒い」

晴れた屋上。時刻は午前十一時半を回つた頃だ。

口差しは強いが北風は凄まじく、容赦なく吹き付けてくる。

黒髪を四方八方に乱された晶はしかし、気持ちよさそうに瞳を閉じた。

「風が気持ちいい」

「いや寒いつて。ただでさえおまえ寒々しい格好してるつてのに」

言つて惣一は手にしていた缶コーヒーを開け、口を付ける。

それを見た晶も、見よが見まねで缶のプルタブを開けて恐る恐る口を付けた。

一瞬顔を顰めた後、ふむ、と頷いてグビグビと喉を鳴らす事、數十秒。

……え、まさかの一気飲み？ 惣一が啞然とその様子を見守ると、腰に片手を当て、ビーッやう飲み干したらしき晶がふはーっと息を吐いた。

「温まつた。礼を言ひ」

「……そりやビーカー。もつちょ、この女子らしくチビチビ飲んでくれる」と、まだまだ防寒として役立つたはずなんだけれど

「しかし、独特的風味の茶だった……」

「コーヒーだから。それ、コーヒー」

「そうか、こーひーといふのかこの茶は

「だから、茶じゃないつてソレ」

缶を掲げて書かれた英字を指し示す。

キヨトンと晶は、手にしていた空の缶に視点を落とした。数秒後大きく首を傾げる。……やうやく、「学校に通つた事はない」んだつけ。読めんのか。英語。

「しつかし、温まつたつつても。この後もこのままここに突つ立つてる気だろ？ さすがに寒くね？」

「しかし、用意された衣服はこれだけだった。ミコシバの視覚にビ redeだけ寒々しく訴えようが、こればかりは慣れてもうしかない」「だから、俺はいいから。……そのマフラーだけで防寒になるの？」「まふらー？」

「それ。首に巻いてるじゃん」

首に巻きつけた暖かそうな茶色のマフラーを指す。登校時には気づかなかつたが、鞄の中に入れてあつたのだろうか。

「これはマフラーなどではない。イタチ守だ」

怒りられて、今度は惣一がキヨトンとする番だつた。

「…………いたち、のかみ？」

「今ミコシバと同じ事象だ」

「……俺と同じ……つて事は、ひょつとして実体化つてやつ？」 イ

タチの幽霊なの？ それ

「違う。イタチ守は動物精霊だ。式をお願いしている」

「シキ？ そういうばっちょくちょく聞くけど……それって結局なんなんだ？」

晶は僅かに眉を動かし、考えるような仕種をしてから、

「すまない。正式には式守しきがみと呼ぶ」

と、告げた。途端に惣一の目が大きく輝いた。

「しきがみつて、式神か！ すげー本格的に陰陽師だな」

「一守は陰陽師ではない」

「でも、神社の神主の家だろ？」

「神主が皆陰陽師という訳ではない。一守は巫覗を名乗る」

「ふげきつて……訊くけど、陰陽師とは違うの？」

「ああ。血と道具、陣を用い、式守を身に降ろし使役する」

「それって陰陽師じやん」

「陰陽師とは異なる。彼らは言霊と術を生成し、式神と易を操る。巫覗にはない力だ」

「似たようなもんだと思うけど……」

「違う。そもそも彼らの式と巫覗の式は違うのだ。彼らは己の靈力を用いて式式神を使役する。巫覗は、元々は神招ぎ 神界・靈界・自然界の超物理的な存在を己の身に降ろすのみの存在。使役するには巫覗具を用いて自我を制御する事が必要となる」

「超物理的な存在つて……俺もかよ。俺を数珠に入れたのも使役するつもりだったのか」

「悪いが。私は動物精霊専門だ」

「専門つて……そんなんあるの？」

惣一に問われ、途端に顔を赤くした晶は軽く咳払いをした。目を瞑り気難しそうな表情を作る。

「おまえの場合、目的は使役ではなく昇天だ。経験上、死直後の混乱状態にある靈に状況説明は困難だ。私は一目数珠に入れ靈を鎮めてから行つ事にしている」

「俺が生きてるって解らなかつたの？」

「…………すまない」

「いや、責めてるわけじやなくて、普通に疑問。一守つて格好から何から、漫画で見るような本格的な靈能力者だし。實際そんな力あるのに、なんで解らなかつたのかなつて」

「言い訳はしない」

「だから。責めてるんじやないつて。理由が知りたいだけ。何、おまえドジっ子？」

むつとした顔で惣一を見上げる晶。

「おまえの場合は例外だ。おまえは幽体に靈力を纏つっていた。だから、てつきり死んだものと」

徐々に声が小さくなり、視線が足元に下がる。そんな黒目の動きを惣一はキヨトンと見ていた。

「れいりょく？ 俺にもあるのか？」

「ああ。今も目に見えるくらいいに」

惣一は目を丸くする。

「嘘だろ。俺不思議体験なんて生まれてこの方、した事も見た事も聞いた事もないんだけど」

惣一の言葉に、晶の黒瞳に動搖の色が灯る。

「……そんなはずはない」

「俺が嘘ついてどうすんだよ」

「…………それはおかしい」

「おかしい」

「通常生靈は靈力を纏わない。それをおまえは纏っていた。さぞや力の強い者なのだろうと思つたのだが……」

不自然に言葉を切る晶。不思議に思つた惣一は晶の横顔を覗きこむ。幼さの残る顔立ちに厳しい表情。大きなつり目がちの黒眼は鋭く遠方を射ていた。

「…………何事？」

「力を感じる」

瞬間、晶が地を蹴つた。

「え？」

晶の持つていた缶が惣一の足元に落ちる音が響いたその時には、小さな体は屋上の端へ移動を果たしていた。

「なんつづ速さだあいつ……飛んでるんじゃないのか！？」

慌てて惣一が後を追う。勝手が違う体で、走るのに手間取つた。

「…………なんだあれは」

晶は屋上の手すりの前に立ち、身構えていた。
風に靡く黒髪が晶の表情を隠している。

「どうしたの急に！？」

惣一が横に並び、晶と同じように視線を下に投げる。

晶の視線の先 校門の傍に、聖武女学院の制服姿の女が一人、長い茶髪を靡かせていた。

顔はここからでは見えないが……彼女の方も、なんとなくこちらを見ているような気がする。

「あれは……」

「知っているのかミコシバ」

「知ってるつづか……」の辺じや有名だよ。高台に建つてゐる金持ち女子高の制服。だけど……」

なんでこんな時間に印場高に居るんだ？。しかもあの姿つてもしかして……惣一の呟きを、しかし晶は聞いていなかつた。

「信じられん。何故今まで判らなかつたのか

「何が」

「ここまで接近を許すとは、私と同じ力……いや、それ以上だ。まさか彼女が持つてゐるとは……」

「は？」

「……行くぞミコシバ」

「行くつて……おい、危ないだろ！ 手すり越えるな

「問題無い。むさび守を喚ぶ

「は？ む、ムササビがどこ……つておいい！？」

晶が屋上から飛び降りた。ミコシバの手を引いて。

「ひ、うわ…………！？」

惣一の手から落ちた缶の音が、誰も居ない屋上に響いた。

冬空の澄んだ青が視界いっぱいに広がる。

惣一と共に落下しながら、晶が空いている方の手で、印を三つ結ぶ。瞬間、眩い光を帯びた数珠を翳した。

「わわわわわわ！」

静かな咳きと共に、暴力的な風が 重力が相殺される。恐る恐る惣一は目を開いた。

「…………、…………いや」

風に乗っている。

不思議で心許無い感覚に惣一は思わず中空でしりもちを付いた。幽体時、宙に浮いていた状態とはまた異なる。まるで不可視の空飛ぶ絨毯に乗っているかのような感覚だった。

ゆづくつと地に下りる晶。惣一はそのままぺたりと地に尻を着けた。

「…………すげ…………まじに陰陽師」

「だから、陰陽師ではない」

声に見上ると、晶はこいつのまに出したのか龍角を構え、対峙していた。

晶の身の丈以上の刃が日^ヒの光を受けて輝く。

「まさか、おまえが既に竜玉を継承していたとは……しかし、飯沼ならなんの不思議もない」

「…………いい、ぬま……？」

聞き慣れた名に、惣一はさらに視線を奥へ。

剣先の方向に、柔らかそうな茶色の長い髪。

晶と対峙していた華奢な体の女が一人、柔らかな笑みを浮かべて立っていた。

「答える。何用だ、飯沼一華」

「私は……会いに来たの。貴方達に」

長いのに重力を感じさせないふわふわの髪。高い腰に、すらりと伸びた細い手足。儂げな雰囲気に、整った細面。その人並み外れた美しさから、県内で彼女を知らぬ男子学生はいないと言わしめる程の有名人物。

週一數十分、偶然を裝つて会つてゐる惣一が密かに（？）憧れている女子高生、飯沼一華がそこに居た。

月曜の朝、バスの中でしか顔を合わせた事がない女の子。それが印場高校の校庭に存在している事に、惣一は非現実を感じていた。

「会いに、だと？」飯沼が、一守に、か？

険悪な空氣にはつと我に返つた惣一は、たまらず対峙する一人の少女の間に割つて入る。

「ま、待つた。何がなんだかさっぱりわかんないんだけど、とにかく待つた。つーか、知り合い？」一守と、飯沼つて

惣一の言葉に、少し困った顔をする一華。

「御子柴君、おはよう。事故に遭つたんですつて？ 大丈夫？」

「いや、そんなことはどうでもよくつて……つづうか、なんでそのこと知つてんの？」

昨日の夕方だ。事故現場に偶然通りかかる以外、他校の生徒である一華に知る術はないだろう。

「なんであつて」

きょとんと一華の大きな目が惣一を見上げた。

「いや……だからその、学校は山の上で飯沼は寮生で門限も厳しいから平日は街に出れないって、いつだつたかバスで零してただろ？だから、どうして知つてたのかなって、そゆこと……」

目が合つた瞬間、心臓が飛び跳ねて、じどりもどりになる。惣一は視線を逸らしつつ、『ごによごによごによ……』。

「飯沼の竜駒巫覗だ。何を知つていても不思議ではない」

晶が不機嫌に口を挟む。声に視点を戻すといつの間に回りこんだのか自分の前に居て、剣先を一華の胸に突きつけているではないか。「だからそんなこと言われても俺にはさっぱり意味わからん……つづつかおまえだおまえ。なんて物騒なもん掲げてんだよ、銃刀法違反で捕まるぞ！」

慌てて一華を庇う様に立つ惣一。僅かに剣先を下ろした晶がむつとした顔でそれに返した。

「昨夜も言つたはず。これは竜駒だ。違反ではない」

「立派にお繩だつて。つていうか、なんでそんなに敵意むき出しこしてんだよ？ わけがわからん」

「敵意ではない。私は飯沼を監視する者だ」

「かんしつて……なんだよそりゃあ。大体監視て、剣片手にやる事か？」

「彼女は私を上回る力を持つていて。それ相応の心持で対峙せねば不意を突かれる」

口をあんぐり開ける。え？ って事は、飯沼も、おんみょいぢ…
…？

「だから、陰陽師ではないと言つてこるの？」

晶の声を無視して一華を振り返れば、こんな状況だと呪つのに彼女は微笑んだままだ。

「……えつと。とりあえず移動しようか」

一華は、晶と惣一の顔を交互に視界に入れるとなんとも居心地悪そうに口を開いた。

「え？」

「……移動だと？ 話はここでも出来る。白昼堂々と一守の前に姿を見せるなど、何を考えているか。先ずはそれに答えてからだ」

惣一の脇から顔を出し、一華に再び剣先を突きつける晶。

「ええ。答えてもいいのだけれど……」

一華は校舎を見上げた。

惣一と晶もそれに倣う。

校舎の窓から全校生徒が自分達を奇異な目で見下ろしていた。

「……」めんなさい。少し恥ずかしいの

「…………異議なし」

「…………」

印場高校の横、校舎に沿つて真つ直ぐ伸びる細道を進むと、やつているのかどうか判別できない程古びた小さな食堂が姿を見せた。ぼろぼろの庇の上に、黒墨で「大衆食堂 ジャンボ」と書かれた古い看板がかけられているのだが、面した道路の幅が狭い為、正面から見ると庇が邪魔して店名がわからない。入口の引き戸の木枠にかけられた『準備中』板が、かんかんと風に揺れていた。

「おばちゃんちーっす」

ガラガラと、惣一が無遠慮にガラス戸を開け放つた。

「ちょっと、表の看板見なかつたのかい！ まだ準備中…………つて、ミコじやないか！ 久しぶりに顔を見せたと思ったら…………何やつてんだい、まだ学校だろ」

暗い店内から怒鳴り声とともに「どすどす」と響き渡る足音。やがて異様に背の高いおばちゃんが惣一の前に立ちはだかった。
百八十センチはあるかも……な身長。体格が良く、肌は黒い。見ての通りの黒人だが、黒い巻き剛毛を後ろでひつづめ、白い割烹着を纏つた昭和スタイルを見事に着こなしている。

「早く学校にお戻り！ 不良に出す飯はないよ！」

太い腕がにゅっと伸びて、惣一の両肩を掴むぐるりと回れ右させた。

「そんな事言わないで……ちょっと訳ありでさつ 頼むよおばちゃん

ぐいぐいと店の外に押し出されながらなるのをいや壁に手をかけてなんとか抵抗する。

「訳ありだあ？ そんな言い訳がまかり通る程おばちやんは寛大じやないよ」

「行きつけの店とはここか。// ロシバ」

「趣のあるこいお店ね」

攻防に気がつかないのか、惣一の腕の下を潜つて暢氣に店に足を踏み入れる一人の少女の姿を見たおばちやん。

「あらあら」

先ほどどの勢いばかりや。田を丸くして惣一の首根っこを掴むと自身に弓を寄せた。

「こつて……」

首を傾げる少女一人を横田ひそひそと惣一に耳打ちする。

「あんなキレイな子とかわいらしげ子連れて……昼間つから何してんだい全くー 修羅場ならよそ行つておやりよー」

「はあ！？ 何勘違いしてるんだよ、そんなんじゃないつてー」

「訳ありつて言つたじゃないか」

「違う違う誤解誤解。とにかく。訳ありだけど、そういうんじゃない。だから下貸してよ。外で立ち話じゃ田立つんだ」

「そりやあ。ねえ……こんな時間にあんな子達と立ち話じゃ、田立つてしょうがないだろうけど……」

「だろ？ 頼むつておばちやん、今日だけ！」

「//」の『今日だけ』は聞き飽きた……けど、まあ、しょーがないねえ……。 今日だけだよつ

「わっすがおばちゃん」

溜息交じりの「今日だけだよ」は、おばちゃんの口癖だ。惣一はパンチを繰り出す。おばちゃんは弱りきった顔で受け止める。「うつし」惣一は一人を振り返つた。

「交渉成立。」

言つや否や一人に背を向けて店の奥へと進む。

苦々しい表情で、しかし好奇心で満たされた目を向けてくるおばちゃんを横目に、晶と一華は惣一の背を追い、狭い通路を歩いた。

店内の通路の突き当たりは「といれ」と書かれた木札が下がる古い扉だった。惣一は右折し、地下に降りる暗い階段へ向かう。数段降りて突き当たりに現れた木の扉を開けると六畳の座敷があつた。小さな玄関で靴を脱ぎつつ、ざらざらした壁を探り、探し当てた電気のスイッチを入れて「座つて」と促す。

女子一人が中を覗き込んだ。中央にちやぶ台。奥に簡易なキッチン。壁には小さな食器棚と、錆びたロッカーが三つ並んでいる。部屋の角に十四インチのテレビが置いてあつた。

「……御子柴君、いじつて？」

「秘密基地」

「ひみつきぢだと？ では//コシバも先ほどの女性もどこかの結社の一員なのか！？」

食器棚から出した湯のみを吟味していた手をそのままに、大袈裟に驚く晶をはあつて顔で振り返る惣一。晶の表情から冗談を口にした訳ではない事を悟ると溜息を一つ。惣一はちやぶ台に置いた急須に茶葉を入れつつ口を開く。

「じゃないって。ここは『じゃんぼ』の従業員用休憩室。俺ら子供ん時によくここで遊んでたんだよ。探偵、いじつとか？ ほら、あれとか」

傍らの電気ポットに手を伸ばしながら、顎でロッカー横に置いてある段ボール箱を差した。中を覗き込むと、こまごましたオモチャが「じちやじちや」に入っている。ロボット。バッヂ。おもちゃの腕時計、子供用システム手帳。縄跳び、手錠、お札……。丸まつた古い

画用紙を晶が広げると、大小様々、よれよれのクレヨンの字で書かれた『探偵団規則』なるものが現れる。

「ふむ……」

途端難しい表情になつて黙々と読みはじめる晶。本当変な奴だなあ。惣一は苦笑しつつ、晶の分のお茶を湯飲みに注いでちやぶ台の上に置いておく。

「素敵ね。私もよく作って遊んだわ。秘密基地。こんなに立派な所ではないけれど」

惣一から湯飲みを受け取る一華。

「飯沼も？　イメージないなあ……」

「そう？」

「家で読書とか。じつちかうつうとイングアイメージ……つて、ごめん。悪い意味じゃなくて」

ぐすくすと笑う一華。

「そうね。読書は好き。けどお家、弟と妹がいたからなかなか読めなくて。今は弟も妹も大きくなっちゃつたし、寮生活だから空き時間に好きなだけ読めるけれど……おかしいかな。少し、寂しいの」

楽しげな表情には弟や妹への愛情を感じる。

一華の笑い顔を眺めていると、惣一の脳裏に何か過ぎつて、その表情を強張らせた。

「どうかした？」

「ん、なんでもない」

「ここに、一緒に飯沼と居たことがあるような……って、そんなわけないよな。飯沼の事知ったのって、高校入ってからだし。自分の様子を神妙な面持ちで見つめる一華に、しかし惣一は気づいていない。

「ふむ、ふむ。……では先ほど会った大柄の女性が探偵団のボスなのだな」

何事かを呟いて、ぐびっと茶を飲み干す晶。「うまい」晶は目を輝かせて湯飲みを覗き込んだ。

「当然だつて。茶葉集めはおばちゃんの趣味。全国から取り寄せてるらしい……って、ここ的事はいいからな」

晶から画用紙を取り上げ丸めてダンボールに放り込むと、惣一は一人に向き直つた。

「ここでなら大丈夫だろ。話の続きをよひせ」

言い放つてから、しまつたと惣一は慌てて付け加えた。先ほどまで子供のように目を丸くして室内を観察していた晶の目に敵意が戻つたのだ。

「こんな狭い室内であんなでつかい剣を出されてはたまらない。

「一守、頼むからチャンバラは抜き! おばちゃん今度こそ大騒ぎだつて。ここ追い出されたら行くトコない。俺達制服だし、最悪補導されちまう」

「…………だが……」

「御子柴君。一守さんが私を警戒するのは仕方のない事なの」

一華が晶を庇つゝ口を挟んだ。

「仕方のない」とつて……そんなら飯沼と一守はすつと前から顔を合わせればこんな警察沙汰を繰り返してきたの？」

惣一の言葉に、一人して首を横に振る。

「いじえ」

「会合以外で顔を合わせたのはこれが初めてだ」

「……会合？」

「やうだ。だからこそ警戒せずにはいられない」

「……話ついていくてないんだけビ。会合つてなんの？」

惣一に訊かれて、晶は一華を睨みながら沈黙する。警戒しつつ、なんと答えてよいのやら言葉を探しているようだつた。

「昨日我が家に案内しただりつ。一守は、白羽市にある白蛇神社の神主をやつてこる」

「あ？ ああ……それが？」

「飯沼はあの辺り一帯の地主だ」

「聖学に通つている訳だな。つまり会合つてのは……町内会的な集まりのことと言つてゐるのか」

惣一の視線を受けて、一華が苦笑した。

「うんまあ……時代錯誤のつまらない家なのだけど……とにかくね。『町内会』の後で飯沼家と一守家の会合があるの。私と一守さんはそこで何度も顔を合わせた事があるだけ。それも、本当に数回しか

ないの」

「じゃあ直接話したのは」「ええ。今日がはじめて」

「お互に刺激し合つ事がわかつてゐるから、用がある時は皆が揃つ公式の場で発言するようにして、普段は接触しないよつにしていのだけれど」と、一華が付け加えた所で晶の目が光つた。

「ならば答へてもらおつ。白昼堂々と一守の前に姿を見せたのは、どうこうつもりだつたのだ。飯沼」「

「はじめに言つた通りよ。私は単純に、貴方達に会いにきたの」「

「理由を訊いている」

「昨日、貴女のお兄さんに会いました」

「…………？」

訊かれてさうと口にした一華の言葉に、晶の様子が一変した。空氣の変化に驚いて惣一は黒髪の隙間から横顔を覗く。青白く、その表情は恐怖にも似た何かで歪んでゐる。

「事が動き始めてゐると言つて。私も立場上接觸せざるを得なくなりました」

「立場だと？」

「氣づいてゐるはず。私も貴女と同じ、龍駒を使役する巫覡だとう事」

「……飯沼が持つ龍駒の神力は通常時の龍角を上回る。龍角以上の神力を放つ龍駒は唯一つ。龍玉だけだ」

「ええ。貴女が察してゐる通り。私の持つ龍駒は『龍玉』です」

「正体を晒してまで『龍玉』が動かなければならぬ程の事態だと？」

「……ご家族から、何も聞いていないの？」

「どういう事だ？」

訪れる沈黙。

問い合わせるような晶の眼差しに、しかし一華は口元に片手を持つてきて何やら考え込んでいる。

「……いいか？ 結局、竜駒つてのはなんなんだ？ 一守が大きな剣のことを竜駒つて呼んでたけど、そういう武器の事？」

惣一の声が重い空気を裂いた。

「竜駒とはこの地に伝わる伝説の再現」「伝説う？」

間の抜けた顔で首を傾げる惣一。一華がそちらに向き直り、晶の言葉に付け加える。

「竜伝説って聞いたことはないかしら。印場と、それから白羽。この二つの土地は特に竜の神力による影響が強く出ていて、実際に空間の性質が乱れていいるの。だから神力の扱いに長けている一守家にお願いして、管理、調整してもらっているのだけど。昔話もあるでしょう？」

「昔話？ そんなの初めて聞いたけど

「印場には確かに……印場沼の、身を裂かれた黒い竜の話が伝わっているはずなのだけれど。聞いたことない？」

「さっぱり

「これを見ろ!!」コシバ

晶がダンボールから取り出したのは、まろまろの県内地図だ。

ああそれ確か、探偵団っぽい物をみんなで持ち寄りつつになつた時に、老公が家から持つてきた……、

「印場と白羽。両土地を塗り潰してみろ」

地図をちやがぶ台にバンと広げ、田の前に鉛筆を突きつけられる。渋々受け取り、言われるがままに塗り潰していく惣一。

徐々に、晶の言わんとしている事が見えてきた。

「……………竜か」

印場と白羽を塗り潰してはっきりと浮き上がる竜の形。

「もう一匹、四一匹潛んでいろ」

晶が指したのは 印場と白羽、その近辺の町村にかかる県最大の湖沼、印場沼である。

沼の形も、言われてみれば確かに竜に見えなくもない。

「印場沼は、かつて白羽市にある浮之島を住処としていた白き竜が暴走し洪水を引き起こした時に出来た湖沼だと伝えられている。

おまけに、印場市にも身を裂かれた黒き竜の伝説が伝わっている。つまり、太古、この辺りには白と黒、一一体の竜神が存在したのだ」

「…………けどさ。これって見ようによっちゃ、なんにでも見れるじやん。蛇とかさ。それに竜だのなんだのって……単なる昔話だろ?」

「竜の存在を裏付ける存在がある」

「それって?」

「一つは竜駒。そして、飯沼だ」

「…………竜駒ってのはともかく、飯沼がどうしたんだよ?」

「飯沼は、白き竜と人の子の末裔。半神族だ」

「はんしんぞく?」

晶の眞面目な言葉に苦笑する惣一。

「つてそんな、御伽噺みたいな話……」

同意を得ようと「なあ？」と一華を見遣ると、晶同様、彼女も真顔を崩さない。

「…………うそつしょ

表情を引きつらせたまま固まる惣一。

「一守が管理する白蛇神社には白き竜が祀られている。その子孫たる飯沼家には百年周期で強大な神力を持つ者が生まれる」

「それが……飯沼だつてのか？」

「飯沼一華と、彼女の弟妹 飯沼修一、飯沼輪花は、この辺り一帯の土地の管理を任せている一守の監視対象だ。そして」「

晶は自分の左手首 数珠の腕輪を惣一に見せる。内、青色に染まっている玉を指した。

「竜駒。これは、白き竜とはまた別の、黒き竜の体から創られた神具だと言われている」

「…………」

「竜の体から創られた竜を守る為の神具を使う事を許された巫覡竜駒巫覡は竜を守る為に在る」

太古。

寺の僧から法華経を聴いた黒き竜は、その恩に報いるため、日照りに困る人間の為に雨を降らせた。

けれども日照りは神による人への天罰であった。

竜は神の怒りに触れ、雨を降らせて七日目の朝、身を七つに分断されて地に落下した

「竜駒とは、分断され地に落ちた竜の体より創られた神具。竜駒巫覗とは、竜駒を継承し使役する者。人を救つた尊い竜を復活させ、空へ還す為に存在する」

「そんなの、信じられるかよ……」

「事実だ」

惣一の弱りきつた顔を横目に茶を啜つた後、きっぱりと言い放つ

晶。

「おまえも竜角を見ただろう。あれが現存しているという事はそういうことだ」

「…………見たっちゃ見たけど…………。なら、飯沼もあんな大きな剣を持つてるってのか？」

チラつと一華に視線をやる。

お茶を啜つていた一華は、湯飲みを手にしたまま、ふるふると首を振つた。

「竜駒の形は一つ一つ違うわ」

「竜駒は七種類存在していると言われている」

「七種類も？」

「そうだ。黒き竜の逆鱗を用いて創られた『竜玉』、角から創られた『竜角』。他にも、翼、眼、牙、爪、尾、それぞれから創られた竜駒総てを揃えた時に竜は復活し天へ還ると言われている」

「なら集めればいい…………つづうか、これまで集められなかつたのが疑問なんだけど。たかだか七種類だろ？ しかも県内。一守みたいな靈能力者が持つてるつてなると、大分絞られるんじゃないのか？」

「どの一族も手放す気がないのだ」

「…………は？」

「竜を復活させた巫覡は、竜と同等の力を手にすると言われている。故に竜駒を自身の手で集めたいと考える者も少なくない」

「争いになるつて事か」

「嘆かわしい事だがな。それが現状だ。一守としては、いち早く竜を天へ還したい。他の巫覡と協力してもよいのだが、変な輩に竜と同等の力を持たれても厄介な訳だ」

言ひながら、晶は一華を睨んだ。

なるほど。一守にとつて、『半神族』らしい飯沼は『変な輩』の代表なのか。

でも、『半神族』つてのが本当なら飯沼は既に竜つてのと同等の力を手にしているんじや……？

「その上、さらに力を蓄えよみつものなら最早適つ者などこの世に存在しなくなるだろ？」「

つて。しけつと読むなよ人の頭を……。ジト目で睨むが晶はさて気にしていないようだ。真顔で説明を続ける。

「下手に動くと『己』の竜駒を奪われてしまう。竜駒の神力は計り知れない。どの一族がどの竜駒を持ち、その竜駒がどんな神力を持つているのか。把握するまでは互いに動けない。長きに渡つて不条理な均衡状態が続いているのが現状だ」

「だからおまえ、いきなり目の前に姿を見せた飯沼を警戒してたんだな。『竜角』が狙われてると思つた訳だ」

「私は…………一守さんの言つとおり、竜駒『竜玉』を所持しています。だけど……今回は忠告をする為に来ただけなの」

「忠告とは、兄の事だけか」

「それもあるのだけれど……御子柴君が今、幽体のままではいるのは、一守さんの力が関係しているのでしょう」「どうしてそれを……」

思わず声を上げてしまつてから、はたつと気づいた。飯沼が、一守と同じ陰陽師じゃなくて、ふげき？ だつて事は、俺が通常の状態じゃないつて事くらい、わかつて当たり前、つて事……？ 惣一の困惑の視線を受け、一瞬、寂しげな表情を返す一華。

「それは、竜玉の力か」

刺す様な声に晶に向き直ると、一華は神妙に頷いた。

「御子柴君に早く元の体に戻つて欲しいの」「なぜ、飯沼がミコシバの事を気にする？」「危険だから」

終始変わらぬ穏やかな一華の表情に、僅かに責めるような、懇願するような色の混じつた視線を受けて、晶は少しの驚きを覚えながら思索する。

「…………兄か」

「貴女のお兄さん、近い内 恩らぐ貴女の靈力が最も弱まる時に貴女に接触してくると思う。……この意味、わかる？」

「…………ああ」

「」のままじや御子柴君は巻き込まれてしまつ。それを避けたいの

「…………」

「接触つて……。そもそも、都合が悪い口を狙つて来るつづらんなら、先にこっちから会いに行けばいいだけだろ。居場所、把握していないのか？ 確か、数年前に家を出たつて言つてたつけ？」

「……兄は今まで、修行の旅に出て行方がしれなかつた
「しゅぎょうのたびつて」

時代錯誤も甚だしい。引き攣つた表情を返す惣一。しかし晶は難
しい顔をして視線を落としていた。

「そ、それにしたつてさ。兄貴が妹に会いに来るのを危険つて言つ
のはどうだう。だつて兄弟だろ？ 本氣で妹を襲うはずがない……」

……

「……竜を復活させた巫観は、竜と同等の力を手にすると言われて
いる」「…………まさか。そんな事で実の家族と争つなんて……」

惣一の乾いた笑いに賛同する者はいない。

「私が貴方達に会いにきたのは、忠告と、御子柴君の事をお願いを
するため。ともなけば」

一華は一皿置いて、澄んだ瞳で晶を それから惣一を射た。

「断言する。死は避けられない」と

「ボスに頼みにいく」

一華の言葉の後、しばらくの間口を噤んで俯いていた晶が顔を上げると同時に発言。すぐつとその場に立つた。

「ボスつて……、…………おばちゃんの事か……」

意味深な発言の登場人物の正体を訊こうとして思いとどまつた惣一。先程まで『探偵団規則』を熱心に読んでいた晶の姿を思い浮かべて溜息を吐いた。

「……で？ 頼みについて、一体何を」

「電話を借りたい。至急、富司に確かめたい件がある」

チラリと晶の大きなつり目は一華を見た。
そういえばと、惣一は思い出す。

『……ご家族から、何も聞いていないの？』

自分が竜駒について彼女達に問う前。一華は晶にこう尋ねていた。竜駒という不思議な武器を狙っているらしい、行方の知れぬ兄の事を尋ねる気なかもしれない。

「電話なら、別におばちゃん頼らなくていい。
よかつたらこれを使って」

各々ポケットや鞄を漁り、同時に晶に携帯電話を差し出す惣一と

一華。思わず顔を見合わせてしまつた。

「……これは？」

田前にある一色の携帯を交互に見比べると、真顔のまま首を傾げる晶。

「……って、まさかおまえ、携帯も知らないってんだじゃ……」

思いつきつ顔を歪めた惣一に対し、きょとんと、真っ直ぐな目を向ける。

見つめ（睨み）合ひ事、数秒。

「……そのまさかなんだな、悪かった

やがてガックリと肩を落としあきらめたように呟くと、惣一は気を取り直して携帯の使い方を晶に説明した。

ふむふむと隣で懸命に聞き入る晶。彼女が一、二質問した後で、「あれ？」といつ変な声を惣一が発した。

「圈外になつてら

「圈外とは？」と訊き返す晶の声を遮つて一華の柔らかい声が惣一の耳に届く。

「地下だからかしら」

振り返ると、一華は手にしていた白い携帯を惣一に見せる。彼女の携帯の画面にも圈外と表示されていた。

「//「シバ。圈外とは？」

再度説明を促す晶の不機嫌そうな顔に向き直る惣一。電波の届かぬらしきの場では使用出来ない事を説明に付け加えると、

「では一時席を外す。//「シバは//」」少し待て」

晶は惣一の携帯を手に、きびきびと歩いて靴を履き、その場を出て行つた。

「携帯も知らないなんて。つとに変な奴」

見えなくなつた小さな背中//と悪態吐くと、一華が隣でくすぐすと笑つた。

「仲がいいのね」

「……そんな事もないけど。一守とは昨日会つたばっかだし」

「ええ、そう聞いたわ。だけど、彼女と御子柴君つてなんというか……まるで兄妹みたい」

楽しげな一華の様子に、弱りきつた表情で後頭部を搔く惣一。

惣一が初めて晶に会つたのは昨日の夕方の事だが、思えばお互最初から初対面という感じはなかつた。こんなにも長い間、一人の女子と行動を共にした事も、惣一にとつては初めての経験だ。

「……特殊な状況だから……かも。一守も変な奴だし」

話し方男っぽいだろ? と同意を求めれば、一華は苦笑する。

「一守さんの事。ちゃんと女の子扱いしてるわよ、御子柴君」

「え？」

一華に言われて、どことなく後ろめたい感じを受けた。

言われて思い返してみる。飯沼の前で俺、そんな行動とったつな？ えつと……。

「一守さんも貴方の事、信頼してこりみつだじ」

思惑を巡らせて、途中で一華が、なんだか異様に胸のぞわつく事を言った。

「信頼つて……だから俺、一守と会つたのは昨日が初めてで……」

「それじゃ、すごい事よ。私と話しているのを見て、気づかなかつた？ 一守さん、すぐ警戒心が強いの。ヒトにはあまり、心を許してくれないの」

「…………そりや飯沼と一守は、なんというか……あれだろ？ さつきの話……竜駒巫覗つてやつ？ それだつて特殊な状況下なんだからさ」

「そうね」と、じこか寂しげに微笑む一華。視界に入れて、さらには一の胸がざわついた。焦燥感が一気に押し寄せ、何かを言わなくひやと自身を急かした。

「じつちかつつうと、飯沼の方が付き合つて長いや、俺

言われた一華は不思議そうな表情で、真意を問つみつて惣一を見返した。

何変な事、言つてゐるんだうつ俺。思ひながらも口が止まらない。今までは届かない気がして、前のめりになつて彼女に訴えた。

「仲がいいつづくなら、俺は…………！」

一華の表情は、どんなのだって好きだ。

例えば今、少し緊張の走ったその顔も、ちょっと前の不思議そうな顔も。楽しげに笑う表情も、凛とした面差しも。さつきの一瞬垣間見た寂しげな笑顔でさえ、綺麗だと見とれてしまった。だけど、あの顔はさせてはいけないと思つた。させたくなかつた。

「俺は、飯沼のが」

今まで一番近い距離に居る一華。発した言葉に、自分を映す大きな瞳が揺らぐ。それだけで、どうにかなつてしまいそうな衝動。惣一は、ぐつと堪える。

「……御子柴君、私」

目前の唇が、何かを言いかけて薄く開かれたところで、

「ミロシバ。せっかく借りたのだが、このケータイとやら、壊れていた」

ばたんと音が響いたかと思うと、無遠慮でふてぶてしい晶の声が飛び込んできて二人の心臓を大きく刺激した。

特に惣一は、気づけば一華から数メートル離れた場所に着地していた。

「え、あ、こ、壊てるだつて！？ そ、そんな訳ないじゃないかあ？」

異様に引きつった顔。燃えるように熱い頬。胸を突き破るほど激

しく脈打つ心臓。語尾がエナリ君になってしまっている事を冷静に観察し、ああ俺やべえマジ格好悪いと心の奥底で突つ伏す惣一。

惣一や一華の様子に大きく首を傾げながらも、晶は靴を脱ぐなり真つ直ぐに惣一の下へやってきて、メタルブラックの携帯電話をずっと目前に突きつけた。

「言われた通り、上で電話をかけたのだが、繋がらない」

「そ、そんなはずは……店内が圏外になつてるとか？」

「この敷地内がケンガイになる事はないそうだ。壊れているのではないかとは、ボスが発した言葉だ」

「そんなんばかな」

惣一が怪訝そうな声を上げた時には、平静を取り戻していた一華が晶の元に駆け寄り、真顔で携帯電話を見下ろしていた。

次いで、むつり顔の晶と、いまだ情けない表情を浮かべる惣一の目を直視する。

「外に出ましょ！」

「おや。あんたたち。やつと学校に戻るのかい」

「どうぞひと一緒に戻ると食欲をそそる香りが胃を刺激すると同時に、おばちゃんの野太い声が耳を劈いた」

「ああ。ありがとーおばちゃん」

「ありがとー」れこました

「世話になつた、ボス。礼を盡つ」

口を開くと、三者三様にペコリと頭を下げる。おばちゃんは満足そうに笑みを浮かべて返した。

「またいつでも。今度はゆくつ食べに来ておこどー」

「時に、飯沼。これまでずっと配を探つていたのだが一向に感知できぬ。おまえ、いつものつねに護衛はどうした」

店を出るなり一華を振り返る怪訝そうな黒い瞳。さよととして惣一も一華を見た。

「「えい？ 護衛なんて連れてるのか？ 飯沼」

「え、ええ……護衛とこつよつは、お田付け役のよつな感じなのだけど」

大袈裟だと苦笑を返す一華。むつとした様子の晶が惣一に答える。

「飯沼本家の要人には一人ずつ護衛が付く」

「それって、一守の事？ 監視してるって言つてたよな」

「一守の役目は監視であつて護衛ではない。飯沼の護衛は確か……」

「出歩く事を伝えていないし、今は学校じやないかしり」

「竜玉を持つ者が、無用心な……」

「『めんなさい』」

背の低い晶の睨みに、素直に頭を下げる一華。

なんとなく空気が重い事を感じた惣一は努めて明るい声を発する。

「護衛が学校なんて行つてゐるの？ 護衛育成学校なんてのがあるわけ？」

「ううん。普通の公立学校よ。学業を疎かにしてはいけないって、父様が」

「へえ……」

学校で勉強してゐる護衛……？ 一体どんな奴なんだろう。断然興味がわいてきた。学校通つてるつて事は、俺等と同じ年位か年下か……まさか俺等の学校に居るんじゃないだろうな。

「……つていうかさ。なんか異常に暖かくない？ 店に入る前とは大違ひだ」

木枯らしの吹く季節。日差しの弱さはここ最近のものと変わらないのに、何故か寒さをまるで感じない。ああ、そうか。冷たい北風が止んでいるんだと思い至つた時に、晶の鋭い声が飛んだ。

「ミコシバ、水晶に入れ」

「は？ なんだよいきなり……」

「私は飯沼 もとい、竜玉を護衛せねばならない。おまえが居ては足手まといの何者でもない」

「……おまえが飯沼を護るのか？」

あんなに嫌つていたのに。惣一がマジマジと晶の顔を見ると、自分とて不本意だと言わんばかりの表情を返す。

「竜玉を護る事は本来、竜駒巫覡共通の使命。何よりも最優先される。竜玉なくして竜復活は成り立たない。竜玉は竜駒であると同時に護るべき最大の宝だ」

「そうなの……」

惣一の視線に、一華は居心地悪そうに苦笑した。

「竜玉は、再光臨する時に竜が田印とする竜駒らしいの。他の竜駒を呼び寄せる性質も持つらしいし」

「て、それって大変じゃないか……」

それが真実なら竜玉は、竜の復活を願う者や竜駒を狙う者にとって真っ先に手に入れておきたい竜駒という事になる。

つまり一華は四六時中、晶のような不思議な力を持つ者に狙われていても可笑しくはない訳だ。護衛が要るつてのはそういう事か……

…。

「竜玉を持つ輩は余程の事のない限りは自ら正体を明かさない。白き竜の末裔である飯沼が竜玉を所持している事は周知の事実ではあるが、個人の特定までは出来ない。故に飯沼の要人や本家屋敷には、国の主導する心霊対策機関から派遣された陰陽師の精銳が付く。護衛は常に要人と共に在る事を義務付けられているはずなのだが……まあ、あ奴ならばやりかねない」

腕を組み語る晶は、言葉尻と共に盛大なため息を吐いた。……へえ。一守もこんな顔するんだ。惣一は一華の護衛とやらに興味を抱いた。

「一守も知ってる奴なのか?」

「会合で会っている。あ奴が飯沼の護衛となる以前にも共に修行した事がある。腕がいいのは認めるが、性格に難がある」

「……あ、そうなんだ」

一守に「性格に難あり」と称される護衛で……。考えている事がわかつたのか、晶の厳しい黒瞳が惣一を一瞥した。

「とにかくミコシバは早く水晶へ。空気が妙だ」

「けど、狙われている飯沼は野ざらしだる? 惟だけ隠れるわけにはいかない」

「自覚しろ。おまえが居ると足手まといだ

「ひつでえ」

冷たく言い放つ晶に口を尖らせると、一華が間に立つた。

「一守さん大丈夫。御子柴君は私が護るから」

それ、俺が言いたかったセリフ……。情けない顔の惣一の前で、厳しい顔つきの晶が開口するより早く、

「それに御子柴君は……」

神妙な面持ちをして言いよどんだ一華が、突如、厳しい顔つきで辺りを見回した。

「……御子柴君！」

ほとんど同時に、晶が龍角を出すのが見えて、は？ と眉間に皺を寄せた惣一の首に何かが絡みついた。

冷たい感触にぎくつとした時には、嫌に悪臭を放つ骨ばったソレは猛烈な力で首を締め上げてきた。

瞬間、息が止まる。

「…………つ は…………」

首が潰れると思った時に唐突に開放され、惣一はその場に崩れて激しく咳き込んだ。まだ息が出来ない。

「大丈夫！？」

駆け寄った一華が背中を摩る。彼女を安心させたくて声を上げようとして、惣一はさらに咳き込んだ。

「無理しちゃだめ」

触れられた背中から、清涼な空気が流れ込んでくる。マイナスイオンでこんな感じかな。惣一は落ち着くまで潤んだ視界で地を睨みながらこんな事を感じていた。

「…………るい、飯沼、もう大丈夫だから。てか、一体何が…………」

僅かに身を起こす。振り返った惣一が目にした物はまさしくゲームの世界のそれだった。

「……なんだあつや……」

小さな黒髪の少女が銀に光る刃を振り回して、ゾンビの群れをばつたばつたとなぎ倒している。

なんて現実味のない光景なんだらつ。唖然としながらも、惣一は晶の動きに目を釘付けられた。

「わからないの。御子柴君が襲われて、振り返った時には死靈で溢れてた」

手前のゾンビを大きな青白い刃で一刀両断。その横で、小さな体に今にも襲い掛かるうとしていたゾンビを返し刃で一閃。覆い被さるように倒れてくる体を豪快に蹴倒す。

「しりょうひ……あのゾンビの群れの事?」

仰向けに倒れた腐つた肉塊が消失してゆくのを見届けることなく、迫るゾンビを袈裟懸けに切る。短い黒髪が舞い、振り向きたまに背後にいたゾンビを一閃した。

「わかつてるのは、いつの間にか空間が完全に閉ざされていった事と、そのために氣の流れが滞っているという事」

あんなに大きな刃を、まるで舞うように軽やかに操る晶の姿から目が放せない。……そういえば、最初に龍角に刺された時も、ゲームのような、という感じを覚えたつて。惣一が暢気にそんな事を思つほど、晶の動きは軽やかで、圧倒的だつた。

が、如何せん数が数。死靈の数は無限のよつに増える。狭い道幅を埋め尽くし、消された死靈の隙間を埋めよつと前へ前へ単純な前进を続ける。

晶はその群れの中に単身突っ込んで、やがてその舞も見えなくなった。

「つて、なんでアイツ自分から……！」

惣一は晶の後を追おうと立ち上がりかけ、後ろから制服の裾を引つ張られる。

「一守さん！」

一華はいつになく強い瞳で戦況を見守っていた。

「……手を出すな！ 護りに集中しろ！」

鋭い高音が群れの中心から聞こえてきたかと思えば、宙から降りる雷のような蒼白い閃光。

瞬間、轟音と共に視界全てが真っ白になった。

「……なんだ！？」

目に痛い程膨大な光量。惣一は両腕で視界を遮りながら、一華を庇つよう前に出る。

「……一守！？ 大丈夫なのか！？」

「もう終わつた」

驚くほど近くで晶の声がして、は？ と腕を下ろした。

未だ余韻が残る視界。瞬きを繰り返してから徐々に回復してきた視力で改めてその光景を捉える。今の衝撃を受けたためか、道をふさいでいた死靈は全て消失し視界は意外な程に開けていた。小さな

石ころのサイズの肉塊が転々と落ちる細道を、竜角を従えた晶が大股でこちらに向かつて歩いてくる。

「……つて、おまえ……！」

平然と歩いてくる晶の姿に、なんと声をかけてよいかわからない惣一。口をパクパクさせる。晶はそんな惣一の様子を怪訝そうに見上げながら隣で足を止めた。

よく見ると、平然としているようで、確かに戦いの後が見られた。所々破れた生地。裂かれたスカートの裾。白い制服が飛び散った肉塊で汚れている。頬、手、足、露出した肌には大小さまざまに引っかき傷があちらこちらに見られた。

「一守……大丈夫か？」

「問題ない」

「一守さん」

一華が小走りに近づくと、晶は露骨に顔を歪ませた。

「化膿するから」

問答無用。不快オーラを受け流して、一華は血の滲む晶の頬にそつと片手で触れる。

「飯沼？ 何して……」

一華の翳した手から、白い光が漏れるのが見てとれて、惣一は息を呑んだ。

その間ほんの数秒。一華が触れた傷は完治していた。傷など、はじめからなかつたかのように。

「……治癒能力って奴……？」

むすつと氣難しい表情を浮かべる晶の手を取り、手を翳す一華。その背中に声をかけると、

「竜玉が否定したものは全て消える」

晶が代弁した。

「……きえる?」

馬鹿みたいに、鸚鵡返しに問いかける。

「」の空間は異常だ。密閉され空気は淀んだ上、呪で汚染される。本来なら息をするのも難しい程だ。先程まで、私は呼吸をなるべく控えていた

「俺、なんともないけど

「言つただろう。竜玉 飯沼一華が否定したのだ」

「」

惣一の視線に気づいたのか、一華がそちらを緩く振り返った。やはり寂しげな笑顔を見せた。

「理解できたでしょ。一守さんが、私を警戒する理由

「……まあ。さつき飯沼が俺を止めた理由も解つたよ」

息が出来ない空間に、策なしに飛び込もうとしてたんだな、俺。そのまま突っ走っていたら訳もわからぬ息苦しさにへたり込んだ上、ゾンビどもにやられて無駄死に……もとい、阿呆丸出しだった訳だ。

礼を言つと、「いいの」と、一華が首を振つた。

「御子柴君、知らなかつたんだし。それにあの状況では、御子柴君が一守さんを心配して飛び出すのも当然といつが……無理もないもの」

「なんだそれは」

「田を丸くする畠。

「ゾンビの中に突つ込んでつた一守を助けに行こうとしたんだよ……」

ばつが悪そうに惣一が答えると、畠は世にも呆れ返つた田を向けて、つかつかと田前に立ち、息を大きく吸い、たっぷりと間をとつて、

「…………馬鹿だらう//」シバは

力のない目で惣一を見上げつつ、力いっぱい罵つた。

「はあ？ なんだよその言い草は！ 折角人が心配して……」「そんなものはいらない」

強い瞳できつぱりとやう告げられては返す言葉もない。惣一がぐつと言い詰まつたといひでござるにひしゃりと言つてのける。

「言つたはずだ。足手まといだと」

「そりや、何も出来なかつたかもしけないけどさ、一人よりは一人の方が心強いだろ普通……！」

「それは助けに来る者にもよる」

「馬鹿にすんな！俺だって男だぞ！？おまけに今は半分幽霊だから体が軽いし。単純に腕力だっておまえよりは数倍強い……！」

「では聞くが。幽体が実体化した程度で何が出来るのだ？死靈の浄化か？飯沼のようにバリアのようなものを張れるのか？」

「……！た、盾くらいには……！」

「まことに残念だなミコシバ。目の前で棒立ちされでは龍角も邪魔で仕方ないだろ？怒りで真紅に染まる刃が死靈を切る前にミコシバをぶつた切つてその場に捨て置くやもしれん。いや、まことに残念だが」

「龍角操つてんのおまえだろ！…」

続く口論の中、治療を終えたか一華がその場にすつと立ち上がつた。

「一守さん、死靈がどこから発生していたか判る？」

口論をやめた一人が、同時に一華を振り返る。

「空間が閉じたままだし。これで終わりとは到底思えないの」

一華の神妙な面持ちに、晶は「ククリと頷いた。

「死靈の中に死靈使いは居なかつた。死靈が沸いて出ていたのはこの細道の向こう 北東だ。確認後に龍角で一帯を浄化し、むささび守に調査に行つてもらつたのだが……遅いな」

「相手を見失つたのかも」

「あればすぐにでも帰還する」

「……やられちまつたとか？」

「むささび守に何かあつたのであれば、私に伝わる」

言われて惣一は今朝の事を思い出した。自分が受けた傷と同じ箇所に、晶も傷を負っていた。つまりは、あれと同じという訳か……。そこまで考えてから、はつと気づいて晶を見る。案の定、黒髪の隙間から覗く彼女の白い首に痣のようなものを見つけた。

これでは本当に、いざといつ時、自分はこの子の盾にもならないではないか。

「……なあ、一守。その事なんだけどさ」

惣一が言いかけた事が伝わったのか、不機嫌な面の晶が大きく開口した。その時だった。

大衆食堂じやんぼから悲鳴が上がつたのである。

「おばちゃんの声だーー。」

叫ぶや否や店に向かつて駆け出す惣一。幽体が実体化しただけの体が軽いのか、その背中は風のよつた速度で店内へ消えた。

「//」「……ー?」

「御子柴君ーー。」

制そうと声を張り上げた晶の横をすり抜けて、一華が惣一の後を追いかけていく。

「馬鹿か……！」

舌打ちをして彼女達の後を追つ。隠である事は明らかだといふのに、//コシバはともかく竜玉が飛び込むなんて無謀すぎる。何か考え合つての事か……いや。飯沼のあの様子、とてもそひは見えなかつた。

「いやー、本当。ああ見えてお嬢、結構猪突猛進つづか。考えなしだかんね~」

突如背後から聞こえてきた場違いな程暢気な男の声。足を止めた晶は思いつきり眉を潜めて振り返つた。

「おばちゃんー。」

ガラス戸を開け放ち、慌てて飛び込んだ店内には異様な静けさが漂っていた。

人の気配も、死靈の気配すらない。数分前 店を出るまでは煌々と点いていた照明が何故か全て消え、窓の無い店内に闇が満ちていた。

「おばちゃん！？ 無事か！？」

足音が響くのと同時に、店内に自分の影が伸びる。手探りで壁を伝いスイッチを見つけると、店内に光が戻った。
カウンター越しに厨房を覗く。と、視界の端に、床に落ちた白い布が見えた。

「おばちゃん！？」

手をかけカウンターを飛び越える。危なげなくふわりと着地すると慌てて白い布に 倒れているおばちゃんに駆け寄った。抱き起こすとおばちゃんの血の氣の引いた顔が視界に入つてギクつとなつた。

「おばちゃん！？ おい、しつかりしろつて…… おばちゃん！」

叫んで揺すり動かすが反応が無い。……と、とりあえず落ち着け、落ち着けて俺……！ 惣一は、加速していく鼓動を無理やり押さえつける。うん、よし。脈はある。息も……してる。死んでないよ、おばちゃん、死んでなんかない……って事は……、

「生きてる……、よかった……」

緊張が解ける。

おばちゃんを抱えたまま、ほーっと脱力した。その時だった。

「御子柴君！ 伏せて……！」

開け放しの戸口から一華の声が響いた。え？ と振り返ろうとした惣一の首元を何かが掠める。視界に捉えようとしたが、背後を走った猛烈な威圧感に形容を瞬時に焼き消されて出来た、不自然に漂う大量の黒い霧しか目にする事が出来なかつた。

足音と共にすらりとした肢体が現れる。

「大丈夫！？」

一華の必死の表情に、また彼女が助けてくれたんだという事に惣一は気づいた。

惣一の姿にほっと安堵の笑みを漏らした一華、横たわるおばちゃんを目にして再び表情をきつくした。

「……おばさんは……！？」

駆け寄る一華。未だ呆然としていた惣一がのろのろと口を開き答える前に、一華はおばちゃんの脈をとつて息をついた。

「よかつた……『じ』にも怪我はないし、異常も見られない。気絶しているだけみたい……」

そこでようやく惣一の様子に気づき、「『じめんなさい』」と少し強張った顔を見せた。

「死靈が一体お店に入り込んでいたみたい。気を配つてはいたのだ

けれど……」

「い、いや……別に、飯沼が謝る事じゃないだろ」

「でも、無関係の人たちを巻き込んだのは事実だもの」

「巻き込む?」

「竜駒の奪い合いに」

冷静な対応。重い言葉。彼女が放った圧倒的で非現実な力。……
飯沼は、一守と同じなんだ。この場にいて自分が、状況についていけずにうろたえてオタオタするばかりで。彼女達はまるで違う。はつきりと感じた惣一は、抱いていた違和感を口にした。

「……飯沼つてさ。今までずっとこんな争いに巻き込まれていたのか?」

一瞬、一層表情を強張らせた一華。少しだけ俯き、伏し目がちにおばちゃんを見る。

「言いたくないんだつたら、いいんだけどさ」

「……ごめんなさい」

「いって。会つて結構経つのに、俺、飯沼の事何も知らなかつたから少しうづくつした」

「……」

「こんな大変な状況だつたつてのに、察してやれなかつたなつてさ。少し反省してたんだ」

惣一の言葉に驚いたように顔を上げる一華。

「反省? なぜ?」

「なんでつて……」

問われて後頭部を搔く惣一。何かに悩んでたんなら、すぐに自分に話してほしかつただとか。自分が支えてやりたいとか。……頼つてほしいとか。そんな幼稚な理由だったりするんだけど。……實際そうされても役に立たなかつたんだろうけどさ。

でも、それって、本人に言うべき事じやないような気がする。俺が、飯沼にとつて頼れる存在じや無かつたつて事だしな。責めるべきは自分だ。うん。第一、俺、飯沼にとつて友達でしかないし。それになんか格好悪すぎる。

「……んつと。俺、昔つから氣が利かないと、空氣読めとかさ。

言われるから」

「それつて、恋人に？」

「彼女なんて居た事ないつて」

大慌てで両手を振る惣一の様子に少しだけ笑みを浮かべた一華。ほつとする惣一だったが、その表情もすぐに搔き消えてしまう。

「……反省するのは御子柴君じゃなくて、私の方」

小さな小さな、どこか懺悔のよくな印象を抱かせる眩き。

「……わつきの巻き込んだつてやつ？ 飯沼のせいじやないだろ。仕掛ける方が悪いんだし、飯沼は被害者じやないか」

「そんなことない」

「…………飯沼？」

抑えた口調に、彼女の持つ苦悩が僅かに滲み出た。感じ取つた惣一は伺うように一華の顔を覗き込む。

しかし、顔を上げた一華は無表情で、静寂の光を帯びた瞳がただ惣一を見返した。

「……訊かないよね。御子柴君」
「なにを？」

「……その、わたしが竜駒巫覗だつて事や、半神族だつて事とか
訊いてほしいの？」

「そういうわけじゃないけど……御子柴君、全然変わらないから疑
問に思つただけ。今まで普通のふりして話してたのに……気持ち
悪くないの？」

「気持ち悪い？」

「普通のヒトと違つから」

「あ～……

後頭部を搔いた。

驚いていないといえば嘘になる。実際びびつたし、たつた今、自
分を助けた力だって、間近で感じて……正直、なんだか異様に恐く
なつた。

竜玉が否定したものは全て消える

漠然と受け止めていた晶の言葉が、あの時、一気に現実味を帯び
たから。

「…………正直、よくわからないんだ。頭がついてつてないつづ
か

なんとか言葉を搾り出す、と。一華が取り繕つて苦笑した。

「…………やつよね

なんでもなによつて笑つて、一華は再び、おばちゃんの体を診る。

「『めんなさい御子柴君、気にしないで』

その様子は既に普段の一華のもので。浮かべている笑顔も、惣一が見てきたいつもの一華の表情で。だからこそ惣一は、異様に胸が軋んだ。

おばちゃんを診る白い手が、僅かに震えていた。

「飯沼」

「何?」

いつものように答える。さらっと流れる髪。細い肩。折れそうな印象を感じ、抱きしめたくなつた。

「御子柴君?」

不思議そつた瞳に見つめられ、我に返る。

「い、いや……その、考えてみたらさ。確かにびっくりはしてるけど、今まで見てきた飯沼が変わる訳じゃないよなって」

田を泳がせつつ、一華の反応を見る。きょとんとした瞳が、真意を聞いた際に惣一を見ていた。

「うん。考えてみたら、不思議な力持つてたってさ。それは前からなんだろ? し、単に俺が知らなかつたってだけだし、今までと変わらぬじゃないし。飯沼が抱えてる全部が今の飯沼を作ってるんだら、別に気にする必要ないかなって」

「……御子柴君」

「ほら俺、今の飯沼……嫌いじゃないし、ね」

……いや。

惣一はぐるりと首」と視線を逸らした。

俺つて奴は。なんでこう、なんでもかんでも勢い任せに吐き出してしまつただらつ……。飯沼の顔が恥ずかしくて見れなくなってきたつうか。絶対顔、赤いだらコレ。苦るまでもなく、バレバレじやないか。

「……お、おばちゃん! こつまでもこじんま寝かしておけないよな。休憩室に運ぶよ」

居たたまれなくなつて、おばちゃんを抱えてこの場を立ち去るつと……した。

が。

「…………ぐ…………?」

……めぐ、おばちゃん。俺、おばちゃんナメてた。
やつぱ、すんげえ……重い。確かにデカいけど、予想遙かに上回るつうか……一体何キロあるんだおばちゃんつうか……!
カビ……引つ込みつかねえ……!

一華の視線を背後に感じつつ、ひっくり返りそうにならしながらも、ふんじばつてなんとか中腰の状態からぶるぶると全力で立ち上がる。

「御子柴君、大丈夫?」

「……だ、いじょぶ……!」

手を貸さうとする一華を制して、ゆっくりと歩いて一歩ずつ前進する。よつやく厨房を脱し、ようよひと通路を通り、地下に降りる階段の前まで来た、その時、

「ありがとう」

背中に声をかけられた。

「え？」となつて首だけ振り返る。

途中までついてきていた一華が、通路の中央に立つて微笑んでいた。

「ありがとうございます、御子柴君。私も……」

彼女の泣き笑いの表情と、取り巻く光景を見た瞬間、恥も重さも何もかも一気に吹っ飛んだ。

「……飯沼……」

惣一の声にはつとして一華が振り返る その前に。

見たことのない長髪長身の男が、一華の細い腕を捻り上げた。

「……っ」

「いけませんね。竜玉ともあらう方がそんな表情を見せては

漆黒の長髪を後ろで一つにまとめ、黒い服をすらりと着こなしたどこか上品な雰囲気を匂わせる男が、整つた顔に穏やかな微笑を浮かべながら、一華の体を自身に引き寄せる。

「貴女の全ては、竜に捧げるべきものでしょ！」

よく通る男の声が、苦痛に表情を歪ませた一華の耳元を刺激した。

「……誰だ、あんた……！」

声を荒げた惣一を、男は柔軟な表情を浮かべたまま見る。やや釣り気味の切れ長の黒瞳。冷たい色に捉えられた瞬間、惣一の脳裏にこれまでの異常な光景が過ぎた。

「……ゾンビ、あんたの仕業なのか！？」

「死靈の事ですか。まあ、私のせいといえば私のせいになるのでしようが……私はただ、この鏡を反転させただけなのですよ」

一コリと笑つて、黒髪の男はジャケットの内側から掌サイズの物体を取り出した。

八角形の中心に、どす黒い何かを漂わせる丸鏡が付いている。

「……竜眼……！？」

横目で捉えた一華の眩きに、黒髪の男は愉快気に笑む。

「ええ。昨晩、貴女を手に入れる為、竜駒巫覗より譲り受けた竜駒です。結界を張る際に竜眼を反転させてみたら、結界内の陰陽のバランスが乱れ、気が淀み、忽ち死靈で溢れました。やはり竜駒はすばらしい。まさかこのような効果があるうとは」

「やはり貴方だったのね。……元に戻しなさい」

「嫌だと言つたら」

「貴方を止めます」

一華の言い放った言葉に、声を上げて朗らかに笑う男。

「どうやつて。幾ら竜玉とて、同じ竜駒を消す事はできないでしょ。それとも私を消すつもりですか？……否。貴女にそんな覚悟はない」

「……………」

睨む一華の頬に、優しく手を添える。

「そんな表情も、また愛おしい」

男は一華の顎を上げ、自身の顔を近づけた。

「飯沼を放せ！」

怒り交じりの声に、触れるか触れないかの距離で止まつた男の唇は再び口角を上げる。

「……貴方には、全てが終わつた後、たっぷり身の程を思い知らせてから消えてもらおうと思つていたのですが」

「思い知らせるだ？」

「ええ。これほどの宝玉。愛でるのも仕方がない。しかし、決して貴方が欲していいものではない」

「意味わかんねーし。大体、さつきから玉、玉つてな……一体何の話をしてんだよ…」

おばちゃんの体を椅子に座らせて立ち上がつた惣一は、男を睨んで吐き捨てる。

「そいつは玉なんて名じゃない！ 飯沼つてんだ！！」

怒り任せに、思いつきり地を蹴つた。

身体が弾丸のように飛び、一気に接近する。

「だめ…………！」

一華の制する声。構わず、未だ笑みを浮かべたままの無防備な長身の男に、叩き込もうと右拳を振り上げた。

「いける……！」確信し、振り下ろそうとした瞬間、

「御子柴君ーー！」

一華の悲鳴を、遠くで聞いた。
何が起こったのかわからない。

正面に猛烈な圧力を感じた刹那、背中から全身へ強烈な痛みが走った。

「御子柴君ーー！」

「といれ」と書かれた木札が足元に落ちた。その音で、飛びそうだった意識が戻る。木札を視界に入れて、ようやく状況を把握する。どうやら、男の立っている出入り口付近から突き当たりにあつた扉まで、真っ直ぐに吹き飛ばされたらしかった。

「…………ンなる…………ーー！」

よろよろと立ち上がる。

男は、整った眉目を僅かに歪ませた。

「直撃を受けて立てるのですか……成る程」

声に視点を上げる。長身の男は、一体どこから取り出したのか巨太な杖を持つていた。

先端と末端に見事な装飾。華奢な造りのいやに湾曲した銀色の杖は長身の男の背を遙かに上回っている。

「貴方を傷つけるべきで無い事は理解しているつもりですが……やはり田障りです。事が済むまでせめて黙つていってもらいましょうか」

言つて、男が杖の先端を惣一に向けた。瞬間、杖に青色に光る紋様が浮かぶ。またさつきの衝撃波か……!? 惣一は身構えた。体を動かす度に全身がぴきぴき痛む。だが動けない程ではない。それに、今の自分は幽体。恐ろしく身軽だ。ひょっとしたら、さつきのにも対応できるかもしない。できなければ……一華が危ない。意地でも……！

ふらつく足に気合を入れる。と、一華の発した声に思考を吹き飛ばされた。

「……やめて、一守君……」

惣一は状況を忘れて、大きく動搖を示す。

「いちもり、だつて……一……？」

惣一の反応に、「おや」と男。まるで新しいおもちゃを見つけた子供のような笑みを浮かべ、やけに楽しげな様子で杖を降ろした。

「そういうえば、血口紹介がまだでしたね
「不要だ」

冷徹に響く高い音。

同時に、高速で回転しながら飛んできた何かが男の手を弾いた。男が一瞬、一華を放した。迷わず惣一は地を蹴る。

すぐに男は一華を捕らえようとするが第一波に気をとられてその手は僅かに届かなかつた。惣一が、走り寄る一華を背中に隠した。

「無事か、飯沼！？」

「ええ……御子柴君！」や、大丈夫！？」

「俺は平氣、けど……！」

一瞬振り返つて一華やおばちゃんの様子を確認する。一華に変わつた様子はないし、おばちゃんは椅子に寝かせたまま微動だにしない。大丈夫そうだ。

正面に向き直ると、目前に竜角を構えた晶の背中があつた。

「一守」

惣一の声には反応しない。晶は田の前で穏やかな笑みを浮かべて佇む男をただ睨んでいる。

「結界を斬られた感じはしなかつたけど。といつ事は、もう一人は竜玉の護衛君かな」

「当つたり。正解者に拍手～」

軽快な声の主が、店の出入口の前で、宙を走る一つの物体をぱしつと受け止める。

「せつちもやつてくれるじゃん。いきなりお嬢の気が察知できなくなつた時にはさすがの俺つちも焦つたさ」

「……つて、お、おまえ……！？」

見覚えのありすざめる姿に、惣一は田を丸くし、口をぱみぱみへくわせた。

「よ。//やん。やつぱり～」

戸口に凭れかかりながら、外側三分の一に刃を付けた一つの輪つかをヒラヒラ振つて見せたのは、水戸光國だ。

「水戸君！」

惣一の後ろで声を上げた一華に苦笑を浮かべる光國。

「相変わらず、護衛無視して無茶してくれんなあ。お嬢」「めんなさい、けれど……」

一華の瞳はそこまで言つと、静かに佇む男を射た。

「水戸から話は聞いた。空間閉鎖したのは竜眼。死靈を操つていたのは竜爪。手にしているのは……飛竜か」

男を視界に捉えたまま、油断なく身構えていた晶が口を開く。その聲音からは何の感情も読み取れない。

「久しぶりに顔を合わせたと言つのに、挨拶も無しか。晶」「そちらこそ。何の音沙汰も無く、数年ぶりに現れたと思えばいきなり仕掛けてくるとはまた随分な挨拶だな」「そういう事になるのか。ははは。無礼はこっちの方だつたね」

晶の様子に「変わらないね」と笑んだ男が、右手に持つた飛竜と呼ばれた杖を下に構える。

「初対面の方もいるし、やはり自己紹介はしておこう」

青色に光る紋様が男の手から飛竜を上下に走り、湾曲した杖の先端と末端に、青光を帯びた糸のようなものが張られた。同時に、少し上に構えた男の左手側に現れたのは、真っ直ぐに伸びた一メートル程の木の棒。

「私の名は、一守 瑛」あきひろ

否。男の手が棒を握った瞬間、赤い紋様が棒の表面を走る。紋様が先端まで行き着くと同時に、棒の先に炎が灯った。

「……竜尾……！」

「竜から創られた七つの神具の内、既に四つは私の手の内。幾ら駒巫覗が揃っているとはいえ、貴方方の中には」

「伏せろ、お嬢！！」

叫んだ光國が黄の紋様の浮かんだ一輪を放つ よりも早く。

「 最早、私を止められる者はいない」

床に放たれた炎槍の矢が、辺り一帯を巻き込む大炎上を生んだ。

幾日も雨の降らない日が続き、日照りで干からびた地に住む人々は苦しんでいた。

来る日も来る日も枯れた沼の前で雨乞いの儀式を続けるが、甲斐なく雨は降らない。

そんな中、儀式の最中に一人の見目麗しい女が歩み出る。女は沼の主と名乗り、雨が降らない現状は、神の罰であると告げた。

頃垂れる人々に女はこう続けた。

ある人に恩を返したいが、天の神がこれを許すはずも無い。雨を降らせば我が身は裂かれ地に落ちるだろう。我が身が落ちたら、これを沼に返してほしい、と。人はこれを了承した。

女が姿を消して間もなく、曇天に日が隠れ、待ちに待った大粒の雪が干からびた地に降り注いだ。激しい雨の中、踊る人々の歓声は雲を突き抜け天まで届いた。

恵みの雨はそれから七日間降り続いた。

七日目の夜。女の告げた通り、空から竜の切断された体が降ってきた。

人はそれぞれ落下箇所に寺を作ると、感謝の意を込めてこれを祀つたという。

「……これにて、めでたしめでたし」

西日の差し込む無人の教室。

教室の廊下側の席に腰を下ろしていた、一華に良く似た黒髪の女

が絵本を閉じた。

惣一は、開け放しの窓枠に腰掛けて女の横顔を眺めていた。

「……これって、印場沼の昔話……ってやつ?」
「少し違うかしら。これは、ヒトの作り話ですもの」
「つくりばなじって……だから昔話だろ? それ」
「昔話は、昔に起った話だから昔話と言つのよ」
「実際に起つたってのか? 龍の体が空から落ちて……」
「ええ、そう」

絵本を机に置いて、椅子を後ろに引く。
女はすっと立ち上がりと惣一に向き直った。

「」の続きを、「」
「ええ、忘れ去られた続き。一部のヒトには今も伝わってこないが
いけれど」
「一部つて?」
「竜駒巫覗と、言つたかしら」

足音が近づいてくる。
女が惣一に向かつてゆっくりと歩いてくる。
やがて惣一の前まで来ると、女は惣一を見上げてにこにこと微笑んだ。

「続き、知りたい?」
「……ひとつでもいい」
「ひとつ」
「ひとつから本当に、ひとつから作り話……ってのは、気になる……か
な」

「そり。眞実を望むのね」

女は惣一に両の手のひらを差し出した。

ほつそりした白い手。その手の中に、一冊の絵本が現れる。

「これは、本物の昔話」

「本物の?」

「ええ。それも、貴方の望んだ箇所だけ記される絵本よ」

「読んでいいの?」

「貴方のための本だもの。いつでも、好きな時に開けばいいわ」

惣一は窓から降りると、女を見上げる。

女は笑みを絶やすことなく、絵本を差し出した。

差し出された絵本を惣一は受け取った。

「よかつた。貴方が望んでくれて。ずっと受け取って欲しかった本だから」

「ずっとつていつから?」

「貴方が貴方として生まれ落ちる、ずっとずっと前からよ」

教室を赤く染めていた日が徐々に沈み、夜の帳が女の姿を消してゆく。

「貴方の意思無く世は回るから。せめて意志を持つ為の世を、貴方に」

「意志……?」

「必要なものよ。決断する為に。そしてその選択の刻は

「

夜が降りて、視界が利かなくなる。
闇の中、長い黒髪がさらりと揺れた気がした。

たつ、おへそに立
5°

「お~い
「無事か~」

一体いつ頃からだらう。頬をペチペチ叩かれ続けて……「うざいから跳ね除けてたんだけど、あんまりにもしつこく叩くもんだから、うがああああとなつて飛び起きた。

「ああもつ……少しばかせてくれよ……つて」

自分の部屋ではない。

寒い。

いや、その前に。」」」

田をかつぴろげた惣一の視界に、見たこともない異様な光景が広がつていた。

天に広がる平和な夕暮れ空。沈む田に、いやに焦げ臭い辺りは大分薄暗く染められている。丁度その時、ぱちぱちと音を立てて点灯した外灯が照らしたのは、古家と古家に挟まれた敷地一杯に転がる真つ黒な瓦礫達、大小様々。……いや。よくよく見れば、黒い物体の所々に、記憶の中の見知った物体と合致する箇所がある。例を挙げると、手元にあつた「い」と「れ」の文字が辛うじて見て取れる長方形の黒い塊。……これつて、ひょつとしなくても……、

「よつやくお田覚めかい。」」」やまた暢氣な奴チヤの~」

声に視点を戻すと、まず、黒い景色の中、自分の両脇にしゃがみ込んで様子を覗き込んでいた光國、晶の顔があつた。いやいや。それより何より、自分の正面に小さな小さな影が浮かんでいるではない

いか。ようやく、惣一は声の主に焦点を合わせ、無意識に避け続けていた現実を直視した。

「…………だから。なんで、猿がいるの？」

胸の上にひょこんと座っていた小猿が、突如歯を凶悪に剥き出すと、

「誰が猿ぢやい！」

空高く跳躍し、折りたたんだ扇子で惣一の頭を思いつきり叩いた。

「や、やつぱり猿が喋つてゐるー。」「一度も言つつかー！」

第一波を叩き落とすと、する小猿に、惣一の両脇から冷たい視線が飛ぶ。

「猿だよ。一徹さん」

「猿だ。富岡」

「なんチャ、おぬし等まで人を猿呼ばわりしあつて……！」

光國と晶に向き直り、睡を飛ばす小猿の背中を呆然と見ていた惣一。

「…………その声。ひょつとして、H口爺…………？」
「だあれが、えろじじいチャ……！」

飛び掛つて顔にへばり付くと、バリバリバリ……

「こつてええ！」

悲鳴を上げた惣一の胸からりよつやく降りた小猿は近くにあつた大きな瓦礫に着地するとふんと鼻を鳴らし腕組みした。

「富四。痛いのだが」

惣一の痛みが伝わったか、無表情で訴える晶に向き直るや否や、扇子の先を鼻先に突きつける。

「白業自得チヤ、全く……！ 心配してきてみればどうチヤ。忍木戸婆さんの店は崩壊。竜玉の嬢ちゃんは奪われ、拳句の果てには命の恩人を猿呼ばわり。儂がおらんかつたら危づく街半壊チヤつたところチヤぞ！」

「予め店周りに結界張つといったのは俺つちだつて。一徹さんはソレ強化しただけだつつの。つつうか逆に訊くけど、一徹さんの力だけでさつきの防いだとか、めでたいコト思つてたの？」

「んーな事、いつまでたつてもクソ生意氣な小僧に言われんでも解つとるわい！ 神の力を儂の力だけで防げるものか！ 貴様の竜牙じやちと不安チヤつたから、この儂の巫力を上乗せしてやつたんチヤ。でなかつたら竜玉の姉ちゃん一人満足に護れんような貴様の張つたやわな結界なんぞ、木つ端ミジンコ瓦礫に消えとるわー！」

「いい年こいて『いー！』はやめようよ一徹さん。それにさ、お嬢奪われたのはこっちの不手際じやなくて、お嬢の独断行動の結果だし。結界は間に合つたつてのにお嬢の奴、何考えてんだか俺つちを完無視してからさあ……」

「……そうだ！ 飯沼は……！？」

痛みに悶えていた惣一が、叫んで跳ね起きる。

引っかき傷だらけの痛々しい惣一の顔面をなんだか氣の毒そうに見つめる一同。代表して、口を開いていた光國が溜息混じりにボヤ

いた。

「……だから。攫われてつたんしょ？」

「だから、危ないから首突っ込むのはよしとけつたんだよ。ほら俺護衛だからさ、面倒ことは」めんつうか。けど、俺つちの忠告聞いた例がないもんだから、今回はこいつちもそんまま放置してたつて訳。ほら、少し危ない目に遭えればや。お嬢もお嬢育ちだし、さすがに懲りるかなつて」

「……本当。おまえのその性格でよく護衛なんて勤まるよな……」「ん？ 腕がいいから？」

一守家で食卓を囮む一同と猿。意識の戻らないおばちゃんを休ませる為と、腹が減つては戦ができないという理由だった。

程よく焼けた鮭の絶妙な塩加減がたまらない。至福の笑みを浮かべる光國に、惣一は白飯を粗借しながら不快の表情を露にした。

大体、『アイドル発掘し隊』なんて二つ名を持つふざけた新聞部の頭であるこの男が竜駒巫覗だったというのが信じられない。その上、よりもよつてこいつが飯沼の護衛ときた。どうりで飯沼一華に関する情報量が半端なかつた訳である。昔からつるんで来た奴だというのに全く気づかなかつたなんて。まるでドッキリに嵌められたようだ。それとも、これ、長い夢？ 俺、いつの間にか寝てた？

……つて。

んな訳ねーんだよなあ……。

「どつたの//」ちやんさつきから溜息ついて

「……んでもねーよ」

男達の向かい側で黙々と食事をしていた晶が、一粒残らず平らげた茶碗の前で手を合わせると箸を置いた。その音で、惣一と光國は揃つて晶を視界に入れれる。

「それで？」

渋い柄の湯呑みを啜ると、晶は光國に鋭い視線を向けた。

「水戸。元来面倒臭がりの貴様が今回でしゃばってきた理由とは？」

「でしゃばるつて。そりや、俺っち、お嬢の護衛だからや……」

「貴様の龍牙は後方からでも攻撃可能なはず。わざわざ姿を見せて私に事を説明しに来た辺り、何か企んでいるとしか思えない」

「あーあ。そんなに信用ないかね、俺っちつて」

「その態度で信用しようと口にできる貴様が狂つてゐる。まあ、さつさと吐くがいい」

「相変わらずだな晶チャン。人がせっかくアイドル発掘し隊発行『美少女図鑑』に写真乗せてやつてるつつのに……ほら、ここ。な？ しかめつ面ばっかしてると勿体無い……」

光國が顔の前で晶に見せるように広げた『美少女図鑑』の背から勢いよく青白い大刃が突き出された。

刃は青ざめる光國の鼻先数センチの位置でぴたりと静止している。

「天高く飛ばされたいか。地深く沈みたいか。昔の誼だ。選択権をくれてやろう」

「いや、マジに恐いし。相性からして龍牙にや分が悪いって知つて龍角構てる？」

「無論。嫌ならふざけてないで洗いざらい吐け」

「ワカリマシタ。長いし、どつから話せばいいかわかんないんだけどワカリマシタ。わかつたから龍角しまつて」

「…………」

一寸置いて、手にした竜角を消す晶。だがその手は未だ警戒の色を解かない。「相変わらず冗談の通じない奴だな……」溜息を一つ。観念した光國は口を開いた。

「取りあえず今朝、雇い主の一聲でさ……」
「雇い主って？」

惣一の視線に目を丸くする光國。

「……なんだ。ミ「ちりやんて本当に何にも知らないんだな。そこの無表情女から何も聞いてないんだ？」

未だむつすり気難しい表情を浮かべる晶を顎で指す光國。

「一守とは昨日会つたばつかだから」「会つたばつかでも、今朝は話す時間がたっぷりあつたろ？両手に花状態でじやんばに入つてつたから、てっきり俺、そこで暴露大會になつてゐるのかと思つてたんだけど」

「……貴様がミコシバと知り合いだという事実を、私は兄と対面する直前に聞いた。つまりは、さつき初めて知つたのだ」

「けどや、晶ちゃん……」

「その呼び方で呼ぶな」

「……俺つちがミ「ちりやんと同じ学校に居た事位は気づいてただろ？あんた今朝、屋上で生真面目に気配探つてたじやんか。相変わらずお嬢に過剰反応してたけどさ」

「竜玉と竜牙。一対一では分が悪すぎる。どちらかに何らかの動きがあれば、先に仕掛けるつもりでいた」

「……まあ。らしきけど」

苦笑いして豆腐の味噌汁を啜る光國。と、惣一の困惑の視線に気づいてそちらを向き直った。

「悪い悪い。えーっと、ミロちゃん。俺たちの雇い主ってのはさ、飯沼本家なのよ。元々俺たちは心靈省の精銳部隊所属でさ」

「シンリョウショウ?」

「国が主導する心靈対策機関の名だ。暁に一度話したと思つが

しかめつ面の晶が補足する。

「どかーんと大爆発後で覚えてないってそんなの。でも精銳部隊つて……水戸。おまえ、一体いつから飯沼の護衛なんてしてたんだ?」

「いつからって年齢?……そうだな、飯沼の護衛に就いたのが小一、三の時で……お嬢専属になつたのはそのすぐ後かな。尤も、その頃はお嬢付きは一人だつたけど。さすがに大事なお嬢をガキ一人に任せられないだろ」

「んなら小一、三の時にはその、国の組織の精銳部隊だつたつてのか!?」

「あー。それ、ちょっと大袈裟なんだよ。別に俺たち特別なんもしてないし。けど、なんでも素質?みたいのがあつたらしくてさ。生まれてすぐに心靈省の育成施設^{じきゅうしち}つてトコに入れられたのね」

「ふええええ」

そんな小さな頃から親元離れて、陰陽師育成施設みたいな所で暮らして……で、小学校二三の時俺と一緒に遊んでた時には既に精銳部隊に属して、飯沼の所で仕事してただと?

そんな経歴を、いつもの軽薄な笑みを浮かべてなんでもない事のようになに話すこいつもこいつだ。

「話を戻したいのだが。水戸。飯沼本家の一声とは？　触れでも出したか？」

「そりや一つしかないだろ。あんたんとこの長男坊が竜駒を四つ奪つて逃走してるつづか」

「……やけに情報が早いな。合流直後のおまえの話だと、昨日夕方兄を確認した時にはまだ、竜駒を一つしか所持していなかつたそうではないか」

「そりや、ふやけてても精銳だしな。同僚も仕事してるつて。てな

訳で、朝っぱらから沸いた一大ニュースのおかげで屋敷の中、笑えるくらい大慌てでさ。竜玉が危うくなつたと踏んだんだろうな。今田中にお嬢を本家に連れ戻せと、俺っことにさ」

「んで、渋々飯沼の後を追つて、じょんぼに来たんだな」

「いんや。御触れが出た直後にお嬢が動いたからさ。何するつもりだと思つて、様子見てた」

「…………」老公よい

惣一のジト田を受け、慌てて光國は理由を捲くし立てる。

「ほり。多分、御触れはお嬢にも電話かなんかで伝わつてただろうし。連れ戻されたら最後、当分の間、家から出られなくなる事位氣づいてたんだる。……の前に、やつときたいコトがあるつづうんだぜ？　ミコちやんだつて同じ立場なら氣になるつしょ、お嬢の目的な？」

「本人に会つて直で訊けばいい事だろ」

「解つてないな、ミコちやん。それじゃあスリルてもんがないじやん。テンションだ下がりじゃん」

「責ざめる程に不眞面目だな貴様」

「へへ。それほどでも」

「褒めてないのだが」

「一応いつでも動けるように朝から中庭で待機してたんだ。そしたら案の定、お嬢の気配が消えたからさ。ドンピシャ。こりゃなんかあつたなって。ほり、な？ 僕のこの研ぎ澄まされた直感。まさに護衛の鑑つてやつだろ」

「…………ミコシバ。コイツを友人にして後悔はないか？」

「いや、そいつ、ただの腐れ縁だし」

「なんだよ一人してその物言い。わざからひどくね？」

「至極真つ当な反応だ」

「むしろ物言いに驚いてるのはこっちの方だからさ」

「そ？ そんなら別にいいけど……」

「いいんだ……」

「…………んでさ。お嬢の気配が消えたのは学校の近くだから、すぐ移動は果たせたんだけどさ。特殊な結界でも張つてあるのか、お嬢の姿がない。結界の位置もわからない。さてどうするべと考えてたら、どこからかカンカン何かにぶつかる音がする。適当に竜牙で裂いた中空からこいつが出てきしゃ」

「そりいや、返さなきやだつたな」とやけに楽しげに咳きながら、光國は「」そと懐を探る。取り出した小瓶を直視した晶が突如憤慨の表情で立ち上がつた。

「む、むささび守！……貴様、むささび守になんて事を…」

「なんてって……瓶詰めにしてるだけっしょ」

「おのれ愛らしい動物精霊を愚弄しあつて……大体、適当に竜牙を振るつただと…？ むささび守に何かあつたらどう責任とるつもりだつたのだ…！」

怒り任せにずかずかと物凄い足音で踏み込んだ晶が光國が持つている小瓶に手を伸ばす。

それを立ち上がつてひょいと避けた光國。

「責任」？ どつかつかつたら、そつちの監督不行届けだろ？」「よくもぬけぬけと……！」

龍角を出して切りかかる晶。大剣をひょうひょうと避けながら、光國は楽しげな笑みを浮かべて惣一を振り返った。

「ンな訳で。コイツのおかげで俺つちは結界内に入れたつて訳。すぐには晶チヤンと……」

「その呼び名で呼ぶな！」

「……合流出来て事態を把握してもらつた、まではよかつたんだけどさ。お嬢が入つた後、じやんぼに一重結界を張られちまつて、すぐに入れなかつたんだよ。で、その後は全員知つての通り、よりにもよつて飛竜で竜尾を放たれてどつかーんの後、今に至る……と」

ちやぶ台の周りで繰り広げられるドタバタを、惣一は呆れ返つた目で眺めていた。

一人、先ほどから箸が進んでない。気づいた光國が動きを止め、苦笑を浮かべる。

「大丈夫だつて！」「ちやん。お嬢は無事さ。なんせ、こつちには竜牙と竜角がある。竜駒はまだ揃つてないんだからな」

その隙に小瓶を奪還した晶が、蓋を開け、光る何かを数珠に移した所で深い溜息を吐いた。

「……竜を呼び出すには、全ての竜駒が揃つている事が必要だ」「それは、何度も聞いたけど……」

惣一は田覚めてからこれまで、ふとした拍子に幾度も、意識を失う前に対面した長身の男の姿を思い出していた。

晶の兄を名乗った男は、気難しい表情をデフォルトとする晶とは対照的に、終始笑みを絶やさなかつた。

しかし、その切れ長の黒瞳は常に冷酷で不吉な光を放ち、未だ惣一の奥底に不気味な影を落としている。

しかもあの言動、自分を敵視していた所から見ても、あの男は相当一華に執着している。

竜駒[云々に限らず、普通に一華の身が危ないのでは……、

「水戸の話によれば、兄は竜駒を手にしてから日が浅い。手持ち全ての竜駒を未だ使いこなせてはいないのではないかと私は考える。幾ら多数所持したところでそんな状態では竜玉には敵わないだろう。故に兄が次に行動を起こすのは我々に対してもと考える。我々から竜駒を奪わなければ目的である竜の召喚を果たせないからな。それまでの間であれば竜玉が飯沼を護るだろ?」

竜角を数珠に収納しつつ晶が付け加えた。

「何。ミコちゃんお嬢の身の心配してんのか? だつたら大丈夫だつて。何か策もあるんだる。でなきや連れ去られる時少しぐらいは抵抗するし普通。てことはさ、お嬢、自分の意思で奴についてつたんだよ。大体あの女、転落してもただで落ちるタマじゃない」

片膝立てて座ると、食後の一服と言わんばかりにシガレットチョコレートを取り出した光國。

「おまえは少しばかり心配しきつて……。ちなみにさ。その、竜駒が揃つていな状態で竜を呼び出そつとしたらどうなんの?」

手にした一本の包装を剥ぐ作業に集中しつつ平然と答える。

「竜に食われる」

「く……！？」

青ざめ絶句した惣一に「マジだよ」とチョコレートを銜えた光國が一言。

着席した晶が、茶を飲み干して湯呑みを置いた。

「だが、それにしたつてだ。使用出来ないにしても、四つの竜駒のように竜玉だけを奪つた方が奴にとつても楽だつたのではないか？隙はたくさんあつたはずだ。なのに何故、飯沼まで攫う必要があったのか……」

「あいつに竜玉は奪えないわ」

銜えたチョコレートを弄びながら、なんでもないことのように光國は断言した。

「何故言い切れる。確かに昔から、人間一人の靈力で竜駒を三つ以上制御する事は出来ないと言わってきた。過去それをやつて暴走し自滅した巫覡の名、千日手をとつて、竜駒巫覡の間で禁止された事だ。しかしどういう妙技か知らないが今、兄はそれを成し得ている。千日手が可能ならば、使えども竜玉を所持する方法があるもおかしくないと思うが」

ぱりっと歯むと、よひよひチョコレートから視線を外し晶を見る。

「じゃなくてさ。考えてみなよ。飯沼一族が大昔から代々守つてきた大事な宝を、幾ら長子だからって子供なんかに若い女の子に託す？ 普通だつたらそんな事やらないね。それがあえてやつてる

ト「がミソだつて

「どういつ事だ？」

「飯沼家が何の策も練らなかつたと思つか？ の奴らにや使用出来ないようになつてゐるわ」

「…………まさか、飯沼の奴……！」

「まさかもなにも、そつするしかないつしょ」

「……なんだ？」

晶の尋常ではない様子に問い合わせる惣一。
だがその声に答える者はいない。

「とにかく龍玉は奪えない。例えお嬢を殺した所で奴は使う事はできぬよ。まあ、つまくやれば一瞬だけ使えるのかもしけないけど

「一瞬？」

「お嬢を殺して、お嬢が完全に息絶えるまでの間だけ、かな。その間ならお嬢も制御できないだろ？」

「おまえ……！」

「いぢいぢマジことるなつての//「けやん。事実を言つたまでだつて。とにかく、竜駒が揃つまではお嬢は無事つて事。理解できたつしょ？」

「……それならば、彼女が寝てゐる間でもできるのではないか？ 要は意識を失いさえすれば良い訳だから」

「龍玉を継承してからこれまで、お嬢が意識を手放した事はないよ。きつとこれからもずっとだ。それこそ、死ぬまでさ

「…………」

「…………どういつ意味だよ。それ

「助けた後で、直接お嬢に訊いてみなよ。//「けやんにならお嬢も教えるつしょ」

言つて自嘲的に笑う。光國の表情に、惣一はなんとなく胸がざわ

つぐのを覚えた。

惣一の表情に気がついたのか、空気を変えるような明るい声色で光國は開口した。

「で？ 結局お嬢は何しにそっちに行つたの。暴露大会じゃなかつたんだろう？」

「てかさ。逆に疑問なんだけど。そもそもなんでご老公が把握していない訳？ 護衛つて相手のスケジュールとか頭に入つてないと出来ない仕事だろ？」

「まーな。それがお嬢つて、元々秘密主義……つか、基本信用してないんだろうな。俺らの事、

「俺らつて、護衛の事をか？ なんで？」

「外から來てるからわ」

「そと？」

「外とは印場と白羽外 心靈省を指す」

「シンリョウシヨウつて……さつさき言つてた國のなんたらつてやつだろ？」

「行政機關の一つだ」

「それつてもしかして……文部省とか環境省とか、そういうのと同じなのか？」

聞いた事無いんだけど。

「知らないの無理ないよ。極秘機関なんだ。元々普通の奴らにや説明つかない事象を扱つてる機関だからさ。//「ちやんだったて今回のがなきや耳にしたつて笑うばつかだろ」

「まあ、確かに。話してゐる奴を小馬鹿にするかも。漫画の見すぎだ

……とか」

「素直なのは//「ちやんの美德だよな」。で、話戻すけど。印場と白羽は心靈省がマークしてゐる土地の一つなんだ。だから俺つちみた

いなのとか、一守が派遣されてきてるのを」

「一守も？」

光國の言葉に視点を移す。自分の湯呑みに茶を注いでいた晶が気づいて口を開いた。

「ああ。富司は、元は心靈省に所属していた。^{（ル）}白羽へは派遣されきたらしい。土地の変調を正すと同時に半神族である飯沼の偵察、調査も含めた任を課せられたそうだが、程なく脱退した」

だから一守、自分は飯沼の監視役だつて言つてたのか。昼間、一華と対峙した時の晶の様子を思い返す惣一。考えが伝わったのか、晶はこくりと頷いた。

「けど偵察とか調査つて……なんとなくスパイを匂わせる単語だよな？」

「まあ、似たようなものだな」

「……なんか俺、そのシンリョウシヨウつての？ あんまりいいイメージ沸かないんだけど。要するに、飯沼の事探つてるつて事だろ？ さつきエロ爺さんは脱退したつて言つてたけど……まだ続けてるのか？」

「脱退している故、報告義務はないが。同じ能力者として、飯沼は危険視せざるを得ない。飯沼の監視は一守の義務のようなものだと捉えている」

僅かに非難の色の入り混じつた視線を向ける惣一に、むつとした様子で返す晶。その様子を半田で見ていた光國が剥き終わったチョコレートを口に放り込んだ。

「心靈省に助つ人寄越せと依頼してきたのは飯沼さ。半神族とは言

え血は薄まつてゐる。この土地の特殊な環境を、飯沼だけじゃ押さえられなくなつたんだろうな。尤も、心靈省がそう仕向けたところはあるんだろーがさ

「それつて嫌がらせしたとか？」

「そんなかわいいもんじやないだろ。それこそエゲツナイ事とか」「だから、なんでそこまで」

「飯沼が心靈省に所属していなかつたらさ。飯沼が管理していゆる印場と白羽には、心靈省の力は届かんの。心靈省つて一応国の機関だけど、ミコちゃんもご存知の通り一般には認知されてない、力の弱い組織だからな。全国から陰陽師を募つて勢力や影響を拡大、影で日本を押さえたいつつう幼稚な野望もある。そんな心靈省にとつて、半神族である飯沼や、小さな土地を聖地として祀り上げてしまふ竜駒なんてのは脅威……つつか邪魔でしかないだろうさ。あわよくば竜駒を奪おうともしている。確かに俺達は飯沼に依頼されてこの土地に入つたけど、同時にミコちゃんの言つ通り、心靈省の犬スパイの申し出を断つてドンパチするのは避けたんだろうさ。エリート陰陽師が数いる心靈省に、たかだか数人の半神族と、団結してない竜駒巫覡でケンカ売つた所で負け戦……よくて傷み分けになるのは目に見えてる。飯沼が己の護衛を完全に信頼してはいないつてのはそういう訳」

「なんつか……心理戦？ みたいな……」

「世は常々そういうもんだよミコちゃん

呻いて後頭部を搔く惣一の肩に腕を回して、力任せに引き寄せる光國。

「な、なんだよいきなり……！」

「ミコちゃんが知らない影でたくさんんの奴らが走り回つてゐる

「……例え恐えよ」

「事実や。」「わやんはもう少し口を知るべや。 もわなわや。」

「なんだよ？」

「大事なモノ、取りにぼすや。」

「…………」

「今戻つたぞ～」

障子が開いて、冷たい外気と共に、ちよろちよろと小猿が入ってきた。

「随分長い廁だつたな、富岡。」

「馬鹿者。周囲の結界を強化して回つとつたんチャイ。 おぬし等がちんたらやつとる間にいつ襲われるかわからんからの～」

席に着き晶と同じ仕草で茶を啜る。と、まるでずつとそこに居たよつた雰囲気で、世間話でもするような口を開いた。

「して小僧。おぬし等飯沼えすぴーは、本家の御触れとやらが出る前に 確か昨日の深夜には心靈省から任を解かれとるチャラ。 嬢ちゃんが何も話さなかつたのはそういう理由チャニイのかい。 逆に問いたいのチャガ。 なんでおぬし、ここにある」

一徹の声にはあ～？ と、光國を振り返る惣一と晶。 光國は口笛を吹き、まばらの拍手を一徹に贈つた。

「さつすが一徹さん。 情報早い」

「誰のおかげでこんな格好しとると思つとるんチャ」

「あ。 やつぱり一徹さん今、飯沼本家か

「任を解かれただと？ 聞いていないぞ」

「ん？ 言つてなかつたつけ？」

「そんなら、昨日の夜中から既に飯沼の護衛じやなかつたつて事か

？」

「一応はね。けど、飯沼本家は事情知らなかつた訳だし。俺つちも一応学費払つてもらつてこうしてミコちゃんと同じ高校生してる訳だしさ。最後の頼まれ事ぐらにはやつとこうかなつて」

「お主らしくもない考え方だ。実際お主以外のえすぴーは皆東京に帰つてしまつて、今飯沼の守備はからきしヂヤ。『タタタタしとるどこりではないぞ」

「どういう事だ、宮司」

「どういう事も何も、心靈省の都合でしかないヂヤろ。犬を放つ必要がなくなつたと」

「何故だ。竜駒を揃えつつある人物がいる今、飯沼を護る名義でこれを倒し、使い手を失つた竜駒を貰い受ける。心靈省にとつても千裁一遇の機会なのは……」

「そこまで考えても、まだわからんの？ 晶チャン本当に一徹さんの孫？」

「その呼び方は止めろと言つている……！」

「その『竜駒を揃えつつある人物』ってのが、心靈省に属してゐつつたら？」

半立ちになつて怒りにわなわな体を震わせていた晶が、光國の一言で硬直した。

「…………まさか。兄が？」

「心靈省で一守瑛つて名は有名よ？ 数年前に心靈省に入つたと思つたら、あつつく間に精銳部隊に上り詰めやがつたつづ、脅威の陰陽師。俺つちと同じ、超絶エリートだつて」

呆けた表情で聞いていた晶。そのまま、茶を啜る小猿を振り返る。

「……宮司は知つていたのか」

「あやつは家を出た。どうでもいい事チヤ」

「…………」

すとんと着席する晶。声をかけようとした惣一は光國に制される。

「程よく暗くなつたトコで話戻すんだケドさ。結局お嬢、何しにあんたらに接触したの？ ょつぽどただ事じやなさそなんだけど」

「ただ事じやないつて……なんでそう思うんだ？」

「タイミングもそうだけど……そりやあ嫌がつてたからさ、お嬢。ミコちゃんに正体知られる事」

「…………」

光國の言葉で、惣一の脳裏に一瞬、一華の寂しげな笑顔が蘇る。

「いや、知つてて黙つてたのは悪かつたけどさ。口止めされてたし。それに俺つちはちやーんとお嬢に進言してたんだぜ？ 全部吐けば楽になるぞつて」

「取調べの刑事かよ……」

惣一の顔を神妙な面持ちで見上げていた晶。視線に気づいた惣一がそちらを見遣る。と、晶は喉を鳴らしてから光國に向き直つた。

「……飯沼は何もしていない。ただ、忠告しに来ただけだと」

「何を。一守瑛の事？」

「いや。ミコシバを元に戻せと言つてきた。そもそも死人が出る

と

「ふーん。んじゃーそうすつかあ」

氣だるげに立ち上がると、首をコキコキ鳴らしながら部屋を出て行こうとする光國。

「つて、俺を体に戻す方法、知ってるのか！？」

「いや、わかんね」

ずつこける一同。

「相変わらずヂヤの一、お主」

「一徹さんもね。まあ、完全に切れた魂を体に戻す方法。無くはないでしょ」

言つて、障子を開ける光國。

「マジで！？」

「つつても、手持ちじや無理なんだけど」

身震いするほど冷たい夜風に当たつて気持ちよさげに深呼吸する光國の後ろで再び一同が畳の上に転がつた。

「…………何回俺を転がせば気が済むんだ水戸」

「まあさ。お嬢が言うんだ。なら、なるだけミコトちゃんの体の近くに居た方がいいって事」

胸のすぐよくな清々しい笑み。目にした惣一は自分には無い彼女との絆を思い知つた。

「……信頼してるんだな。飯沼の事」

惣一の言葉に、きょとんと田を見開く光國。

「いや。信頼つづつか。お嬢は知ってるからさ」

「知ってるって、何を？」

惣一が首を傾げると、光國はしばし空に浮かんだ白月を仰ぎながら、数秒後、無表情で顔だけ振り返った。

「……全部？」

薄い雲の広がりが、ほんの少しだけ欠けた月を覆っていた。
暗い森に囲まれた一守家の庭園で、制服姿の黒髪の少女が熱心に大剣を振っている。

惣一は少女の邪魔にならないよう、屋根の上からぼんやりとそれを眺めていた。

「ありや 噶の日課なんヂヤ」

声に振り返ると、一匹の猿の姿。ゆっくりと惣一の横に移動すると腰を下ろし、晶の様子を眺めている。

「氣の迷いでもあるのか、乱れた精神を統一したいのヂヤろが……色々と不器用な孫での。ああやつて竜角に頼る事しか知らん。すまんの、付き合わせて」

ひょうひょうとした口調で、一徹にしてはしんみりとした言葉を発するものだから、惣一は少しだけ慌てて首を振った。

「別に、謝る必要なんて……」

「お主、隠してはあるが、居てもたつてもおられん状態じゃ」

図星をつかれて絶句していると、一徹はさりげなく一撃を放つてきだ。

「晶も氣づいておるヂヤろうが」

「…………マジ?」

「晶に聞かなかつたか? 現状ヂヤお主、晶の式守ヂヤろ。式守の

感情はダイレクトに術者に伝わるもんチヤ

「…………」

人の口から改めて聞いて、解っていたつもりの惣一は、都合のいい所でいちいち失念していた事に気づいた。…………やべえなんてもんじやない。それって、つまりはバレバレだつたって事じやないか。あいつ何も言わないから…………って言えるわけないだろ。

「まあ、男としては氣の毒に思つがの。晶に邪な感情を抱いた時点で貴様は晶から最も嫌悪される存在に昇格したのチヤからの」

「抱いてねー一つつか楽しんでんなよエロ爺」

「ま、冗談はさておき」

「冗談言つなよこのタイミングで…………」

「伝わつた所で、晶には理解できん感情かもしれんがの」

「…………理解できない？」

「お主、昨夜から晶と共に行動して、何も氣づかんかったか？」

「…………色々、疎いなあとか思つてたけど」

「晶は一日のほとんどを修行に費やし神社で過^{ハシ}しておるから」。

故に入付き合いも皆無。世間に疎いのは当然

「なんで学校とか行かせないんだ？」

「晶にその氣がないからのお」

それって学校に行く氣がないって事？ なんで？ 顔中に疑問符を並べた惣一を横目でちらりと見た後、「ま、いいチヤう」と小さく呟いて猿は語り始めた。

「心靈省の話は聞いたかの？ 内部にある育成施設では一般常識も一通りは教えてある。過程を終了すれば高卒、もしくは大卒と同等の資格が手に入る。施設側の意向での。学校へ通う必要のない環境が完成しとるのチヤ。当人につたって、勉学より他に優先させる事

柄があるから」

「何なんだよ、その優先させる事つて」

「そりやあ能力を高める事、ヂヤよ。誰に言われるまでもなく時間があれば自ら鍛えとる。よつやく平仮名が読めるよつになつた子供が同室で六人背中を合わせて、寝る間も惜しんで黙々と術書を読みふけつとるよ」

「水戸もその中に居たつて、晩飯の時に聞いた。でも、なんでそこまで……」

「心靈省なんぞに属する輩、ヂヤからの。個々背負つてこるものがあるんヂヤろ」

「水戸も、……一守も、そつなのか?」

「晶は、……そうヂヤの、……。背負つてこつよつも、そつせざるを得なかつたといづべきか」

歯切れの悪い言葉に、惣一が首を傾げて様子を見る。小さな猿は、ただ一心に月を眺めていた。

「あの子は生まれつき靈力が高くての。怯えた両親によつて生後間もなく心靈省に預けられた……まあ、所謂、捨て子ヂヤつたンヂヤ」

「…………すてご?」

「儂や、実孫である瑛と血の繋がりはない。事情は違えど」

事実に頭が真っ白になつた惣一にも浸透するよつに、一徹の声がゆづくりと響いた。

「…………晶は、お主と同じなんヂヤ」

「…………宮司から何か聞いたか」

惣一が縁側に腰を下ろすと、それまで一心不乱に大剣を振るつていた晶が動作を止める事なく口を開いた。

晶の幼いながらも整つた横顔を眺めながら、惣一は口を開いた。

「わかるの？」

「私を憐憫の目で見ている事位は」

「憐憫つて……」

「違うか」

「違わないかもだけど、なんか表現露骨つていうか……おまえってそういう難しい言葉は知ってるのな」

「読書は好きだ。特に一守の蔵の古い書物はいい」

「……それだつたらわ、一守。おまえ学校とか行く気はないの？ 学校にだつて古い本はいっぱい……」

「ない」

晶の即答に、一瞬怯む惣一。

だが、即答だからこその氣になつた。そういうえば今朝だつて……、

私は生まれてこの方、学校という場に通つた事はない。

なんでか、むつとした表情でぴしゃりと言つ放つていた。一守の奴、本当は意識しているんじや……。

「……今日は、俺の学校行つてみて何も思わなかつた？」

「特には。ただ、潰すように時を過ごしていりのだなとしか」

「潰す？」

「ほとんどの者が明確な意志もなく、時が過ぎるのをただ待つていて見受けられたのだが……違うのか」

「……違わない、かもだけど。でもさ、学校つてそれだけじゃ

なくて」

「私の目的ははつきりしている。限りある時間で学び舎に通う事がプラスになるとは思えない」

「その目的つてさ。いつごろから決めてたの？」

「富司より竜角を継いだ時に誓った」

「何を」

「竜を天に還す」

言葉尻で、大剣を頭上から真っ直ぐに振り下ろす。

蒼く光る刃が一瞬、水晶のような虹色の輝きを放つた。

「耳にしたのかもしれないが、兄と私は血が繋がっていない。心靈省に居た頃、ただ一人、同室であつた兄がよくしてくれたおかげで今の私がいる」

「……あいつも心靈省に居たのか」

「祖父の施設だから、と、両親に体よく預けられたんだと笑つていた。心靈省を脱退する富司に引き取られていく兄が、私の手をとつたのだ」

「……」

「兄こそが私に竜角や竜駒巫覗の話を聞かせたのだ。富司から竜角を受け継いだ時、それに恥じぬ力を手に入れたいと兄はよく話していた。あの頃の私は、竜駒巫覗となつた兄の手助けがしたかった。生きる目的を持たせてくれたのが兄だつた。私はそれを守り、実行したい」

「…………一守、おまえそれは」

「竜ではなく、兄の想いを守りたいのか。

一瞬だけ、晶は惣一を見上げる。

「その兄が今、他の竜駒を四つ揃えている。私にとつてもこれはチ

ヤンスだ。兄の意志がもしあの頃のまま私と同じなら、竜角は献上してもいいとも思つてゐる

晶の言葉に惣一はぎょつとして、思わず立ち上がりてしまった。自分の目に映つた一守瑛は、晶の話の中の一守瑛とはかけ離れた印象を醸し出していたからだ。

「その、心靈省つて所が裏で糸引いてるかもなんだぜ？ 竜を召喚すれば力が入るんだろ？ それが目的かも」

「竜駒巫覗は竜の為に在る。竜を還す事が存在理由だ。力の所在は二の次だ」

「飯沼が力をつけるのは嫌がるくせに？」

「……飯沼の力は特殊だし、そもそも竜を天に返す氣はないからな。……まあ、水戸の話が真実だとすれば無理もない事かもしれないが」「だから、どういう意味なんだよ？ それ」

「飯沼に会つたら直接訊くがいい。水戸は私を止める為に情報を寄越したのかもしれないが」

「竜を天に返す事が、飯沼にとつて悪い事になるのか？」

剣を振る手を休めて、晶の鋭い黒目が惣一を見た。

「…………だとしたらどうする？」

雲が、晴れた。

「//コシバも私を止めるか？」

形のよい顎。滴り落ちる汗。月明かりを背にすつと立つ晶の澄んだ瞳に射抜かれて惣一は一瞬、言葉を失つた。

「……今、訊かれても答えられない。飯沼にひとてどんな不都合があるのかわからないから」

思わずじぶんもじぶんになりながらもなんとか言葉を搾り出すと、晶はふうと息をついた。

「わうか。決めたら、どうか教えてほしい」

視線を外し正面を向くと再び大きな剣を構え、振り下ろしはじめた。

「……わ、わかつた」

返事とともに、視点を足元へ。晶の姿が視界に入らないよつじて、気を落ち着けた。

……ちよつとだけ、なんか、困った。

一守が一瞬だけ、違う奴に見えたからだ。

他の存在を突き放すような鋭利な輝き。纖細な強さに僅かに混じつた柔らかな弱さが意識を惹きつける。彼女が持つ大剣、竜角に受ける印象と同じように。

そういうば、こいつと出会いつてまだ一日しか経つてないんだよな。知らない面があるのも当たり前か。さつきは少し、びっくりしただけだ。うん。

気を取り直すと再び縁側に腰を下ろして、晶の横顔を眺める。

……本当、搖るがないよな。こいつつて。

兄貴じゃなくて、こいつが竜角を受け継いだ理由。なんとなくわかる……様な気がする。

「……しつかし、目的か。偉いよな一守」

「何がだ？」

「俺達くらいの年で目標なんて持つてる奴なんて数えるほどだつて
ミコシバにあるではないか」

せりつと言われ、目を丸くする。

「元の体に戻るのだらう?」

「あ」

「先ほど水戸の話を聞いて思つたのだが、ミコシバの現状問題を解決出来るやもしれん竜駒がある」

「マジで!?」

「飛竜と言つ。使えば死人に再び命を与える事が可能だ

「……死んでないつて、俺」

「だから、解決出来るやもしれんと言つた」

「それに飛竜つて、今は兄貴が持つてるんだろう?」

「事情を説明して拒むよつなら、奪うのみだ」

「おまえつてや。意外に過激な発言多いよな。兄貴と戦うの、躊躇いないのかよ」

「私は竜駒巫覗。いくら兄でも負ける事は許されない。……許さない

い

「一守……」

月が再び、陰る。

空を斬る音が一際大きく響く。

地に着く寸前でぴたりと刃を止めた晶は、そのまましばらく静止する。同時に風が止み、まるで時を止めたよつな静寂が辺りを支配した。

永遠のような刹那。晶は一息つくと竜角を消した。

「……いいのか?」

「ちらり歩いてくる晶に声をかける。晶はちらりと惣一を見た後、そつなく視線を逸らした。

「いい。迷いは晴れた」

「そつか。よかつたな」

「……ミコシバのおかげかもしない」

「え？」

「雑談も時には役に立つ」

「……そりや、よーござんした」

惣一の隣に腰をかける晶。置いておいたタオルを手に取り大量の汗を拭う。

夜風が吹いて、晶の切り揃えた黒髪を揺らした。手を休め、気持ちよさそうに目を閉じる晶の横顔を盗み見しながら沈黙に耐えかねた惣一が開口する。

「しかし……元の体に戻るのを目的とか言つてもいいのかな」「目的と言わずになんと言つのだ」

「だつてそれ、成り行きつつうか、突発的なものだろ。一守みたいな崇高なものじゃ……」

「人の目的など、大半が成り行きで出来ているものだ。私のも然り。それにミコシバだつて半永続的に抱いている目的もあるだろう。それを果たす為にも必要な事ではないか」

「え？」

「飯沼を守りたいのだろ？」

「…………え？」

「ひしひしと伝わつてくるのだ。あの瓦礫の中で起き上がった直後

……いや、もつとずっと前からか？」

自分の顔が、みるみる赤くなつていいくのがわかつた。

一守の視線を感じて、ぐるっと顔¹と視線を逸らす。

「……やつぱバレバレかよ」

「なにがだ?」

「いや……だからその……」

「何が言いたいのかわからないのだが。ミコシバが飯沼に対して異常なまでの興奮を抱いていた事は時々あった」

「……変態じやん、俺……」

「違うのか?」

「……厳密に言えば、違わない」

「何をそんなにがつかりしている? 私はミコシバが羨ましいぞ」

羨ましい? ……変態が? 思つてもみなかつた言葉をかけられ、

惣一は思わず晶を振り返る。

目が合つて、晶は静かに微笑んだ。

惣一の心臓が跳ね上がる。

「人のために無謀になれるおまえが」

「……えっと。……貶してる? それ

確かに、一守を助けようとして呼吸できない場所に飛び込もうとしたり、飯沼を助けたくて敵わない相手に殴りかかつたりもしたけどさ。

思い出しては気が沈む。「……ま、当然か」惣一は溜息混じりに小さく呟くと頃垂れた。

「貶してなどいない。確かにそれは危険であると同時に馬鹿げている。自身の力量も把握できず、命を過小評価したとしても愚かな行為だ……」

「馬鹿にしてんじやん思いつきり」

「……と、今まで思っていた。が、ミコシバと接している内に思つた。それは強さに変わる時もある」

「強さか。……本当に、そうなれねばな」

「望むのなら術者として、可能な限り力を貸そひ、ミコシバ。それが私に出来るせめてもの償いだ」

「償いつて、そんなオーバーな。一生幽霊ユウゲンつて訳でも……ないんだろ？」

恐る恐る問う惣一に、首を傾げる晶。

「だよな……方法わかつてないんだし。でも、水戸はなんか知つてそうだし……。」

「ならば、物々交換といひ、ミコシバ」

なおもブツブツ呟き続ける惣一に、右手を差し出した晶。

「竜は人の世を守つて散つた。竜駒は竜を守る為に在る。だから私は竜を守る。可能な限り、その為の力を貸してほしい、ミコシバ」

言われて惣一は戸惑つた。何も出来ない俺が、一守に力を貸す事なんてあるんだろ？ これまでだつて一守に助けてもらつてばかりなのに？

差し出された白い手を見ていると、ふいに一華の声が聞こえてきた。

「一守さん、すごく警戒心が強いの。ヒトにはあまり、心を許してくれないの」

一華の言葉の理由はもう知つている。

でもどんな過去を背負つても、いつだつて晶の表情は真剣で、そ

の意志は揺らぐ事がない。

その晶が、自分に手を差し出している。

「……ああ

真摯な瞳に改めて向き直ると、惣一はしっかりと頷いた。

「俺に出来ることなら」

惣一はその手をしっかりと握る。やっぱり頼りない程小さくて、やつぱり汗ばんでいた。けれどそれはどんなにか温かくて、じんわりと惣一の胸に沁みていった。

時刻は丁度、午後十時。

神社の境内に惣一、晶、光國の姿があつた。
全員制服姿のままである。晶のみ着替えようとしていたのだが、光國と一徹に止められて断念した結果だった。
三人と向かい合つて、小さな猿が腕組みしつつ立っている。

「さて。今僕は飯沼の結界主^{チャ}からしてそこから動けん。かと言つて、式守^{サル}の身のままついていった所で口クな事も出来ん^{チャ}う。お主等に全部を任せるのはちと不安^{チャ}が、ま、なんとかなる^{チャ}る。もし、どうにもならない状況に陥つた時には……晶」

「なんだ富司」

「仮にも竜駒巫覗の名を持つ^ウで答えを導き解決するん^{チャ}な」

「何を言つて^ウいる富司」

「肝心なのは、状況に囚われぬ意志と判断力、それに物事に動じぬ強靭な精神力^{チャ}。選択の時は近づいておる

「選択？」

一徹と晶のやり取りを横目に、惣一が首を傾げた。
はて。俺もつい最近、同じ事を誰かに言われたよくな……。

「何の話だ、富司」

「今夜。竜は復活するチャリ！」

晶の体が僅かに揺れた。

「なれど、選択肢は無限にあると言つ事チャ。儂は何も言わん。孫
が自分で考え自分の意志で成した事ならな、爺は見守るまでチャ」

「富司……」

「行つてこい。帰つてきたらこの間通販で仕入れた高級茶葉がお主
を待つとるからな」

晶はじばりく一徹の目を見ていたが、次の瞬間、深く深く頭を下
げた後、

「行くぞ、ミコシバ」

ぐるりと踵を返して長い石階段を降りて行った。

「……ちゅいヒロいけど、いい爺さんだな

「ああ。……最高だ」

「……なぜ、瑛ではなく晶に竜駒を継がせたか。晶は解つてあるの
かの？」

「一徹さん。俺たちにもよくわかんないんだけど、それ」

声に一徹が見上げると、いつの間にか光國が腕を組んで隣で突つ立っていた。

「晶ちゃんより瑛サンのがスペック高いじゃん。俺たちそれ、常々 疑問だつたんだよね」

「おぬしは知らんでいい。ところが、早う行かんかい！」

一徹が手にした扇子で大きく扇ぐと、強烈な風が発生した。

「へーい」

黒い木々が揺れる盛大な音と共に、何の抵抗もなく飛ばされる光國。

その姿が小さくなつていいくのを油断ならないといった表情で凝視していた一徹は、やがて陰を解くとふうと息を吐いた。

「単独行動してあるよ！」に見えるあやつの目的もわからんままか。無駄足チャつたかの？」

飯沼家の方向へ消えていく猿の背を、木の枝の上で足を組んでいた光國が見下ろしていた。

「俺つちも一つ疑問なんだけど。//「ちやんの目的と晶ちゃんの目的。どうやつたつて選べるのはどつちか一つだけだって事、//ちやん達わかつてんのかなあ」

欠けた月を背に、夜闇を病院へ向かつて移動する。時折強く吹き付ける北風を肩を竦めてやり過ぐす。そうしていつしか麻痺するように体が凍える寒さに鈍くなつてきた時。丁度一守家と病院間の中点に位置する場所で、先頭を歩いていた光國が唐突に足を止めた。

「どうした?」

「俺つちた。一 手に分かれた方がいいと思つんだよねー」「は? なんだよ唐突に……」

同意を求めようと晶を見るが、晶は無表情で光國の動向を見つめている。

惣一の声に振り向くことなく光國は正面の三叉路に立つと一方に体ごと向き直つた。

「ひつち行くと、ミコちゃんの体が眠つてる市大病院がある」

光國の視線を辿つて道の先を見る。今朝、晶と一緒に往復したばかりの道は静寂と闇に包まれ、まるで違う印象を受けた。

「んで」

言葉を短く切ると、光國は正面の道に向き直る。

「ひつち行くと、俺らの通り印場高校。……で、ひつち何があるかつづと」

「印場沼、か」

最後の道に向き直る光國に、晶がそつてなく答える。

「竜を召喚するには、打つてつけの場所だな」「さつすが晶チャン。伊達に竜駒巫覗名乗つてないね」

軽薄な口笛と棒読みの贅辞に不機嫌に鼻を鳴らしてそっぽを向く晶。

「夕餉の後、貴様が行方を晦ましている間に数体の式神が印場沼の方角へ飛んでいくのを見た。貴様、既に偵察済みなんだろう」

晶の言葉に感嘆の声を漏らす惣一。やっぱ一守と同じにコイツもそういう事出来ちゃう奴なんだ。そりや国の施設の精銳部隊、だけ? そういう「にいる奴なんだし、出来て当然の事……なんだろけど。実際日にしないし、欠片も現実味ないし。……^{コイツ}水戸だし。耳にしたって未だに微妙に信じられないんだけど。でもちょっとやつてやつての所見てみたかったかな。

惣一の視線を「どーもどーも」と愛想よく受ける光國。

「書く物ないし、サインは後でね」

「いらねつつの」

「護衛対象が気になるのは理解出来るが、竜玉が捕らわれた今、竜駒巫覗の使命に基づいて我々は協力体制をとらざるを得ない状況下にいる。単独行動は控えてもらいたいのだが」

晶の厳しい目つきに、しかし光國はおどけるような仕草で「せーせん」と頭を下げる。当然、より一層不機嫌面をした晶がさらじに口を開けようとすると、

「つか一守、疑問なんだけど」

険悪な空気を感じた惣一は努めて明るい口調で一人の間に割つて入つた。「今この時、水戸の態度を奢める事以上に重要な疑問があるのか？」とでも言いたげな視線を寄越す晶に内心ビビリつつも葉を続ける。

「いや、なんで印場沼が竜を召喚するのに打つてつけなんだろーなあ……とか。ほら、召喚した竜が現れる所つて、竜玉を持つてる飯沼の居る場所なんだろ？ 街から離れてるとか広いとか、そういう場所的な意味？」

話すにつれ、晶の黒目からみるみる怒氣の色が消失していく。言葉尻を待つて「ふむ」と一言漏らし、何かを納得した様子。腕組みしてこぢらに向き直つた。どうやら氣を逸らす事に成功した模様。感謝しろよ、老公……つて多分、人からかつて遊ぶのが趣味の黄門サマの事だ、恩を着せよつモンなら「いらん世話」とか溜息つかれるんだろうけどさ。背後のトラブルメーカーを心で一睨みしたところで、目前の晶に溜息をつかれる。あれ？ 気のせいか、まだ不機嫌っぽい……？

「……ミコシバ。印場沼は元々、黒き竜の住まつ神聖な湖沼だ。人にとっては黒き竜と意志を交わした伝説の地であり、我々竜駒巫覶にとつては、はじまりとおわりの場所と言われている」

「そういえば、そうだつたな。確か、竜が言つたんだつけ。雨を降らす代償に、裂かれて墮ちた自分の身を沼に返せ……とか。……あれ。そしたら竜駒つて最後は沼に返さなきやいけないんだ？ 竜召喚したら無くなつちまうのか……それで『おわりの場所』なんだ？」

返す惣一に、意外そうに目を見開く晶。

「…………よく知っていたなミコシバ。毎晩は黒き竜の話を知らないと言つていたが」

訊かれて惣一は「そうだつけ？」と首を捻る。

「一守の言葉でなんとなく思い出した。忘れてただけで耳にした事があつたのかも」

「如何にもミコシバやんらしい答えだねえ」

「どんなどよ。お前の中の俺って」

後頭部に両手をやり陽気に笑う光國を振り返りジト目で睨む。じやれあう一人 惣一をしばらく怪訝そうな面持ちで見ていた晶だつたが、氣を取り直して視点を光國に移した。

「…………話を戻そう。水戸。やはり兄は今、印場沼にいるのか？」

「ああ、それなんだけどさ。何体送つても途中で消滅しちゃうんだ、俺の式神」

「消滅？」

「そ。邪魔されてるつて事。だから残念ながら沼の様子はわからぬい。けどまあ、瑛サンとお嬢がいるのは十中八九、印場沼だと思うんだよね。俺っち」

病院に続く道とは反対方向に伸びる道に顎を向ける光國。

「ミスリードつて可能性もあるけど。なんとなく、氣配感じじした
「氣配つて？ そんなんわかるの？」

惣一の疑問に光國は「まーね」と軽薄な笑みを返す。

「竜駒一つでも馬鹿みたいな靈力放つてゐるのに。」うちの一つの竜駒以外、全部一箇所に集まつてゐる訳だし。特にお嬢 竜玉は他の竜駒を引き寄せる性質を持つからさ」

「私も水戸と同意見だ。しかし」

難しい顔で印場沼の方向を睨む晶。

「兄が何も仕掛けでこないのが疑問だ。手元に竜眼があるのだから氣配を絶つ位一瞬で済むだろうに垂れ流しとは。竜眼を使用出来ない理由があるのか、単に我々を場に誘き寄せたいのか……」

「罷つて事？」

「いや。瑛サンで今や千日手だぜ？ そんなめめつちい事しなくてもさ、竜駒を一個ずつしか持たない俺ら相手なら一対一でも余裕つしょ」

「千日手つて、さつきも言つてたけど……」

言葉の先を予測したか、思案顔の晶が惣一の言葉尻を待たずに答える。

「千日手とは、竜駒巫覗の間で禁じ手とされてきた、人一人が竜駒

を三つ以上手にした状態を指して言う」

「なんで禁じられたんだ？」

「過去に一度だけ、竜召喚の意を持たず、ただ力を得るためだけに竜駒を収集しようとした巫覗がいた。が、その者は結局、三つの竜駒を手にした所で制御出来ずに自滅し、一帯に甚大な被害を齎した。人が竜駒という神力を操るなどそれだけで奇跡に近い所業だというのに、複数を手に入れようなどもつてのほか。再発を恐れた心靈省の提案もあり当時の飯沼 竜玉がこれを禁じ手と定め、以後竜駒巫覗は固く守つてきた。……だが、どういう訳か兄は今それを成し得ている」

「それ……かなりやばいんじゃないか？昔話が眞実なら一守兄つて、今いつ自滅しても可笑しくない状態だつて事だろ？」

「やうやう。理解できた？ // 『ちやん。いまいち緊張感ないけど、

今つて結構シビアな状況なのさ』

「緊張感がないのは貴様がいるからだろ？」

「ひどいな晶ちゃん……」

「その呼び方はやめると言つてこる」

「……俺つちだつてわ、これでも危機感ぐらい持つてゐつて。竜駒を四つも持つてりやあ、日本だつてどつとでも出来るだらーし」「どつにでもつて……？」

「じやんばのーの舞とか？」

「日本全国、辺り一帯丸ごと焼け野原つてこと、……まつさか…」

…

カラ笑いする惣一に半田を向ける光國。溜息を吐きながら首を振る。

「// 『ちやん、じんだけ言つてもまだ事態把握できてないだろ~』

「当然だろ。實際竜駒を扱つている我々でさえ予測不可能なレベルだ」

反論しようと開口した惣一を遮つて、晶が半田で光國を見返す。

「そりや、千日手なんて想像しかできないけど。負担でかそーだな、とか……」

「負担？ 竜駒使うのに負担なんであるの？」

「そりやあ、// 『ちやん。竜駒一つでなかなかキツいもんよ。最初は俺つちでもヒーヒー言つてたさ。けど、代わりにあの力だしな』竜駒つて一つでもそんなにすごいんだ？ 確かに、ゾンビ軍団追つ払つた時の一守はすごかつたけどさ、でもあれは一守自身がすご

かつたつつか……」

「……そつか。竜駒の威力、田のあたりにしてない訳だな。//」
やんは

なるほどねーと腕組みし、うんうん頷く光國。なんだか馬鹿にされたような気がしてむすつとしかめつ面になる惣一に構うことなく上機嫌で語りだす。

「じゃんばが破壊された時はさ。予め竜牙で店周囲に結界張つてたからアレぐらいで済んだんだよ。飛竜と竜尾の合わせ攻撃だなんて今まで誰も試した事のない大技なんだぜ？ どつかーんの後、自分等も街も無事だつてわかつた時はさすがによく抑えたもんだよと自分を褒めたくらいぞ」

「水戸はいつでも自分褒めてんじやん」

「全てが貴様の手柄ではない。富司の力もでかい」

「人が気持ちよく漫つてる所に、揃つて冷水鉄砲撃たないの。…まあ。けどさ晶チヤン」

「その名で呼ぶな」

「俺つちもそうだけどさ。自分も竜角の力、解放したことないだろ？ 余裕で街壊滅くらいく行くと思わないか？」

「…………試した事はないが、竜角を全開にすれば恐らく私の意識は吹き飛ぶ」

「制御不能つてやつだろ、それこそヤバいじやん」

話を聞いてる内に惣一はだんだん恐くなつた。一守達がなんでもない事のように普通に扱つてている竜駒つて……実はとんでもない物なんじやん。話だけ聞いてると、まるで兵器だ。

「……一守兄つてあの時、本当に街を破壊する氣だったのかよ？
やばいんじや？」

惣一の言葉に「さてね」と両手を後頭部に、空を仰ぐ光國。

「どうだらうなあ。あの派手な攻撃は俺っちや一徹さんが結界張つたのを見越したコケオドシ的なものだと思うけどでも。……必要があればやる、かもね。あの時だつて、躊躇なかつたしな」

「けど、そんな事したつてなんになるつつうんだ？ 従わないなら街壊せつて、その日本のお偉い施設が命じたのかよ？」

「俺っちにわかる訳ないつしょ。今回飯沼SPには撤退命令が出ただけ。心靈省の指令いつてるの瑛サンだけだし。ま、とにかくや。今の瑛サンの力じや、俺っち等に罠を仕掛けるまでもないという事はわかつたつしょ？」

「……なんとなくは」

竜駒が自分が想像しているよりずっと大変な代物で。それを四つも持つていてる一守瑛は今のところ、最凶。一国を破壊出来る程の力を持つていてるといつて。現実味は全くないが、実際に日常は一瞬で跡形もなく吹き飛んでしまつた。これが現状だ。

「水戸。心靈省はともかく、飯沼の真意は全く読めないのか？ 飯沼は自ら兄についていつたと言つていたが」

晶の言葉に惣一はピクリと反応し、光國は首を竦めた。

「言つたろ？ お嬢は秘密主義。なんでも知つてるからこそそんなのかもしれないけど」

「何でも知つている」。光國の言葉に、惣一の脳裏に少し前に浮かんだ疑問が再び過ぎつた。

いや。信頼つつうか。お嬢は知ってるからわ
知ってるって、何を？

……全部？

あの後、光國にはぐらかされて結局教えてもらえなかつたのだが。

「夕飯の時も同じ事言つてたよな。それってつまりは、どうゆう事
だよ？」

「飯沼の、半神族としての力だ」

惣一の感情に一早く反応した晶が答える。

「？ 竜玉つてのは……確かに、全部を否定する力、じゃなかつたつ
け？」

「竜玉の力はそうだ。他にも飯沼は、半神族本来の 時空干渉の
力を持つ」

「……時空、干渉？」

聞き慣れない言葉に惣一は首を傾げる。光國は壁に背を付け面白
くなさそうな顔で二人を見ていた。

「どういう理屈か知らないが、飯沼はその力を持つて過去現在未来、
全てに影響を及ぼす事が可能であると富司に聞いたことがある」

「…………それってつまり、どういう？」

「詳しい事は私にもわからない。が、私が飯沼を警戒する理由はそ
こだ。彼女の持つ竜玉の力と半神族としての能力は非常に相性がい
い。故に私は飯沼を監視してきたのだが……」

「今までに飯沼がその……時空干渉って力を使つたことがあつた
のか？」

「いや。私がこの街に来てからこれまで、全くわからなかつた。だ

が、あの一族はこれから起る事全てを把握していると考えた方がいい。恐らく富司も今後の対応策として飯沼家に呼ばれたのではないかと私は考えている

「……全てを把握している？……そうなのか？」

晶の言葉を惣一はどうしても飲み込む事が出来なかつた。嘘を言つていらない事はわかる。昨日会つたばかりで自分はまだ僅かな面しか目にしていないのだろうが、それでも一守晶という人間が、搖るがない、鋼のように真っ直ぐな奴だという事は把握できた。晶は、一華の事を本当にそう思つているのだろう。……だけど。惣一は今日一日の記憶、昨日以前の記憶の中からも、一華の姿を探して追つた。本当にそうなら飯沼、あんな簡単に一守瑛に後ろとられたりするか？それに、俺が暴走した時に見せるあの様子もつて、あの表情つて。そななる事を知つて演じれる反応ものか？

「……俺には、そうとは思えないんだけど」

口にしてから晶の反応を伺つと、彼女はなんだか、ぱつの悪そつな顔で惣一を見ていた。

「まあ、私も全てを熟知してゐ訳ではない。能力者の間で囁かれていた事だからな」

「水戸は知つてゐるのか？」

話を振られて瞳を見開き、少しだけぎょっとした顔つきになる光國。珍しいと思つた次の瞬間には氣だるげな視線を惣一に投げて寄越した。

「まあ、一応はね。けど、そんな……言つ程便利な力じやないと俺つちは思つよ」

「なんで」

「なんでって……まあ、はたから見ててそう思つただけだけ。いつもなんか悩んでるからさ、お嬢」

「…………今回も一人で考えて実行した結果つてか」

情けなさと同時に、怒りにも似たもどかしさが、自分の中の暗い奈落の底から沸き起こつて心に重く圧し掛かった。いつだつて彼女に癒されるだけ癒されておいて、自分は彼女の事を何も察してやれない。

……たつた一人で、何を思つてあの男についていったんだろう。幾ら不思議な力を持つてたつて、飯沼は女の子だ。背中に隠した飯沼は微かに震えて……怯えていたのに。無事だうと周りに太鼓判を押されたからつて、僅かでも安心してしまつた自分、最悪。たつた一人で、心細くないはずがない。

また、あんな顔して……泣いてはいないだろうか。

「……印場沼に、飯沼がいるんだよな。一手に分かれるんだつたら、俺、そつちに」

「ミコちゃんは体の近くに居たほうがいいだろ。お嬢が早く体に戻れつつてるんだからさ」

惣一の感情任せの声を、遮るように光國の鋭い声が飛ぶ。苛立ちと共に顔を上げた。

「病室に居たつて戻り方なんてわからないじゃないか。それに一守が言つてたけど、俺が元に戻るには飛竜つてのが必要なんだろ？ それつて一守兄が持つてるつて……！」

吐き捨てる途中で、冷静な光國の目が自分を刺している事に気づいて口を噤む。ミコちゃんが行つても何にもなんないつしょ。そう

光國に制されて居るよ^うに感じて、なんだかひどく悔しかった。

「飛竜か。……飛竜ね。ふうん。確かに戻せるのかもしぬないけど……根本はそういう事じゃないんだな……」

ブツブツ言^う光國の様子を怪訝^{そう}に眺めながら晶が口を開いた。

「おまえが言^うていたのは飛竜ではないのか。他に方法^{ベスト}が？」
「うん、あるんだ。一つ。確かに、それが多分真^{ベスト}実^ミつて奴が」

ベストって。何に対^{する}ベストなんだ^う。

惣一と晶の視線に気づいた光國、壁から背を離すと一人の近くまで歩を進める。

「ここからは俺^{たち}の推測なんだけど。昨日晶チャンも大いに混乱したと思^うけど。靈力ゼロのミコちゃんが精神体に靈力纏つてるの」

「……どうして貴様がそれを？」

「まあ、聞いてよ。実はさ瑛サン、その事故の日 昨日から急に目立つた動きと^るよ^うになつたんだよね。飯沼家でも瑛サンの昨日以前の行動は把握出来ていなかつ^つう」

「……それがどうこ^う？」

「ミコちゃんの事故。無関係のよ^うに見えて今回の件に大きく関わつてゐると思^う」

「…………なんだつて？」

惣一が眉を潜めた横で、晶が不審な声を上げた。

「少なくともお嬢は、ミコちゃんがあそこで事故るの、知つてたぜ？ わざわざ学園寮抜け出して近くで待機してたくらいだし。しか

も丁度そこそこで、飛竜を手にした瑛サンと出くわしたんだ俺達。もしかしたら「ちやんの事故、瑛サンが仕掛けたのかもしれない。けど、そこそこは俺たちにも分からなかつた。お嬢は、何か知つたのかもしれないけど」

光國の言葉に、脇間校庭で会つた時の一華の言動を思い出す。そ
ういえば、彼女は知つていたじゃないか。

俺の事故を、一人で見ていた……だつて？

呆然と立ちすくむ惣一の肩をぽんと叩く光國。

「な？ だから、『ちやんは一応安全な場所に避難。で、護衛も
必要だろ。俺は当然、術者である晶チャンが適任だと思つんだけど』
「……なら、飯沼は……」

回らない頭で問つと、光國は少しだけむつとしたような顔になつ
て、親指で自分を指し示した。

「何のために護衛がいるんだよ」

だつて、ずっと前から見てきたんだ。

貴女のやりたい事なんてもう覚えてい。

貴女の見ているモノなんてもつ気づいてい。

貴女の望む世界なんてもう知つていて。

どれ程の命と時をかけて、それらを叶えようとじてこらのか。それだけは、やすがにわからないけれど。

だけど。貴女を見ていると、疑問が沸いて止まらないんだ。

それならどうして、俺はここに居るんだ?

// SHIDE - M //

はじまりとおわりの地 印場沼。

「…………なんだあのつやあ」

式神を全滅させて拵えた魔方陣を使い目的地手前に瞬間移動を果たした光國は、ものの見事に干上がってしまった沼底を前に素つ頓狂な声を上げた。

「さつすが竜駒。面倒な術式すつ飛ばして無尽蔵な靈力でこんだけの事を成してしまつんだからとことんデタラメだよな…………」

「何を驚きますか。竜駒などなくとも術式を組み時間を費やす事で、水戸君にだつて出来る真似でしょうに」

黒い木々に狭く切り取られた暗い空の下、どこからともなく響く声。ポケットに手を突っ込んで中空に視点を上げたまま光國は言葉を続ける。

「そりやあね。でもやううとは思わないっしょ。何年もかけてやつと達成するその前に俺っちの方が干からびちまつりつつか」

「だから、水戸君も龍牙を手に入れたんだね」

「全部眺めてみて、コイツが一番氣に入つたんだよね。ぶん取る時、前の持ち主をちょーっと再起不能にさせちまつてお嬢には大層怒られたけどさ」

ポケットの中から一つのリングを取り出し、空に放る。光國の意に応じて、指輪状のそれ等は直径四、五十センチ程に巨大化した。外側と内側に刃の付いた銀輪。一部分に赤い布を幾重にも巻きつけて作られた持ち手を、交差させた両手で光國が握ると表面に黄色の紋章が走り、同時に輪の外と内側に月牙状の刃が出現した。

「圈を模した土属性の竜駒か。使いこなすには相当な鍛錬が必要だつただろうに君は宮司の指導の下、数日で一通りマスターしてしまつた。晶よりセンスがよかつたよね」

「その節は修行にお付き合いいただき。感謝シテマス。兄弟子」

構えた両手と頭を下げ、「あざつす」と光國。その様子にクスクスと笑いながら、よく通る中性的な声は言葉を続ける。

「たつた数日間だけだつたけどね」

「早いトコお嬢付き、一人立ちしたかつたもんでさ」「けなげだね」

「その逆。嫌に鼻につく女を一回でいいから泣かしたいと思つただ

け

「子供には過ぎたお姫様オモチヤだつたろ」

「よく言つよ。そつちも、俺つちが飯沼でんせに入る前から既に狙つてたくせに」

「おや。バレハラてたかい」

「それなかつたことにして、今さら竜駒を手に昔話ヒサガタの成就とか。あ

のさ。それつて、本当に上からの命令な訳?」

「君はどうだと思つ?」

質問で返された。光國は眉を潜めつつ腕組みする。

「んー……そだなあ……」

「当たつたら見逃してあげてもいいよ

「冗談。ここで見逃してもらつても、いざれどつかで殺られるだけだからね」

「バレてましたか」

「そりやあ俺つちも心靈省ヒリュウジウの人間だから。それに俺つち、これでもお嬢の護衛なんだ」

「おや。任務は解かれたのに?」

「俺つちのやりたいようにやる。その為に手に入れた竜牙チカラさね」

「君も富司のようになつてつもりかい?」

「実は最近、それもいいなとか考えてたり」

「本当かい」

やたら残念そつな音を上げる声。

「君とはいなかもお友達になれそつな気がしたのに」

殺氣の入り混じるそれを半田で聞き流すと、片手を前にやり口キ

「キならす光國。

「いや～同じ男として俺つちに惹かれるのはすんげえ理解出来るんだけど。俺つち友達は作らん主義なもんで……」

「おや。御子柴惣一君はどうしたの」

「ミ「ちやんは……義兄弟つつか。お嬢とは違う意味で特別」

「君は相変わらず面白い物言いをするんだね。なるほど。血は繋がつていなければ家族は同じだものね。……けど、私と畠とは違う。同じに育つた訳じゃがない」

あくまで朗らかな返答に光國の動きはピタリと止まった。

「それなのに同じ環境に居て、意識し合つだけならともかく、そこまで仲良しになるものなんだね。実際に田にして驚いたよ。お姫様の命令なのかい？」

「…………んなの、どうだつていい事つしょ。つつか、いつどいで仕入れた情報だよ」

「御子柴惣一君に関わる前に、彼がどういう人物か少し調べさせてもらつたんだよ。組織が大きいと柵もすこいけど、この時に便利だよね」

静止した光國の瞳に銀の光が宿る。

「……氣に食わないな。そのドヤ声」

「よつやく、素になつてくれたかい？」

「素？ 僕は元々こういう性格だけど」

「気づいていないんだね。目の色が明らかに変わった。よつほど突付かれたくない事だったのか、もしくは……君の大事なお姫様を見つけたか」

光國の視点はここに来た時からずっと一点で静止していた。

千上がつた沼底のはるか上空に巨大な水の塊が浮いている。中にほつそりとした人影が見えた。両手両足を水流によつて固定され、体の自由を奪われている。深く瞳を閉ざしたまま動こうとはしない。

「安心していいよ。あの水は沼の泥水じやなくて、飛竜で生み出した清流だ。竜玉で身を守っているのか呼吸も問題ない。まだ、生きているよ」

「お嬢を、どうするつもりだ？」

「どうも私を止めようとしていたみたいだけれどね。残念ながら彼女を味わうのはもう少し先 私が竜角を手にした後だ。だから、時が来るまでの間、あそこで高みの見物をしてもらいつもりさ。あの位置なら病院だってよく見えるだろう?」

一味わう、ね……。さすがにお嬢がどういう状態か……」「

「ああ、理解しているよ。彼女は既に成駒化しているね。半神の血を守るためとは言え、飯沼家は残酷だ。適性はあつたとしても白き竜の力を完全に受け継いでいるのは彼女じやない。陽動……彼女を本当の駒としたのか。まあ、仕えている君に言つ事じやないのかもしないけど」

卷之三

「さて水戸光國君。君にしそうするつもりかな。護衛なのに彼女の意志は守らないのかい？ 彼女のやりたい事、君ならもう理解出来ていると思つていたけれど」「

「俺が守るよう言いつけられるのはお嬢の身だけなもの。お嬢の意志なんて知ったこっちゃない。むしろ少しは泣いてくれた方が可愛氣があるってもんだ。これまで散々護衛泣かせててくれたからな。せいぜい邪魔させてもらおうか」

「性格悪いね」

「妹泣かしに来たアンタに言われたくないつづうか。俺は護衛の仕おれ」

事を真に進めるまでだし」

「そりゃ。なら、僕は妹の元へ急ぐとしよう。君を泣かしてね」

言葉尻を合図に、辺りを漂っていた殺気が数箇所で凝縮し鋭利なものに変化する。光國に向けて四方八方から放たれた炎の槍 竜尾。視線を巡らし、炎が己に到達する一瞬で理解する。じやんぼを破壊したものと同じ攻撃だ。

「ふうん……。竜眼て、竜駒もコペー出来ちゃうんだ。こりゃまいつたなあ……なんて」

動じず、光國は両手を顔の前で構える。「あざっす」と手を離してからそれまでずっと音もなく地面を走り続けていた一輪の竜牙がそれぞれ光國の手に吸い込まれるように収まつた。同時に、光國の立ち位置を中心として周辺 竜牙の走つた複雑な軌跡が発光する。全ての炎の刃が一瞬にして地より湧き上がつた大量の光に搔き消された。

完成した巨大な黄の魔方陣の中心で竜牙を構え、腰を低く落とす光國。竜尾の攻撃と共に沼底に姿を現した一守瑛に向かつて低い声を放つた。

「……さあ。俺のお嬢、返してもらおつか

ひつそりと静まり返った夜闇に沈む病院を前に、眉を潜めた晶の横顔を覗く。

「何

「結界だ。それも、建物　いや、敷地全体を覆うほど強大な……」

「結界？　中に入れないのか？」

晶は片手を伸ばして病院の敷地に入していく。数歩歩いて、触れた感触に立ち止まつた。

「そういう訳ではないようだが……中の空間が妙だ。違和感がある。

……竜眼か？」

「一守兄、印場沼に居るんじゃなかつたのかよ？」

「水戸が戻つてこない所からして、そのはずだが。何故、ここに仕掛ける必要があつたのか……目的は」

しばし宙を仰ぐ晶。ふと、惣一を見た。

「やはり水戸の言つていた通り、ミコシバが関わつてゐるという事なのだろう」

兄が重要視しているもの。晶が知つてゐる限り、病院には惣一の体しかない。

惣一は困惑の表情を返す。

「俺何もしてないし」

「わかつてゐる。だが、事実はこうだ」

二人して、病院を睨んだ。その間数秒。

「どうする？」

「行くしかないだろ！」

晶は竜角を手にすると結界をぶつた切った。

竜角で一閃して正面玄関の自動ドアを手で押し開けると、二人は暗い病院内に侵入する。

「……いいのかな」

きょろきょろと落ち着かない様子で院内を覗くように歩く惣一。一方晶は竜角をしまうといつものように大股でスタッカート歩を進める。

「いいも悪いもない。非常事態だ」

「……ですか」

ため息混じりに呟くと、晶の後を追つて非常灯だけが頼りのただつ広い待合室を歩く。機能を完全に停止したような無人の病院は無機質であるで生の感じがなく、廃墟に紛れ込んだような感覚だった。少しだけ不気味に思えて晶の様子をちらつと覗くが彼女は臆した様子もなく、いつもどおりの無表情でスタスターと病棟へ向かう。

「なあ、さつき言つてた違和感つて今も続いてるの？」

晶の言つ違和感を惣一は実感する事が出来ないでいた。昼間のように死靈がうよつよしている訳でもない。なんの変化もみられない。勿論罷も。

暗い病棟はそれだけで不気味だつたが、ただの病院。それ以上でもそれ以下でもない。

「確かに、陰陽のバランスは安定している……………というか、安定しきていいと言つた方がいいか」「しそぎていいって？」

「印場と白羽、……飯沼が管理している土地はそもそも、他と比べて異常だ。竜駒が発する神力による影響で、空間の性質が乱れている。ちょっととした衝撃で……例えば、人が歩行するだけでも陰陽のバランスが乱れやすい。それが通常であるのに、病院内部だけ、そうではないのだ。私はともかく、幽体のミコシバが実体化して歩いてもなんの波紋も起こらないのはこの地においては有り得ない事だ」「それって、いいことなんじゃ？」「そうだが……意味がわからない。わざわざ結界まで張つてこの病院を正常に保つ理由が」

エレベーターの表示が一階で点灯する。

扉が開いて、闇に慣れた目に痛い程明るい箱が現れた。

乗り込んで惣一の病室のある、四階のボタンを押す。

扉が重たく閉まり、機械音と共にエレベーターが昇る。惣一は、操作ボタンの前に立つ晶の背を眺めていた。

「……大丈夫かな。水戸の奴」

黙つていると、どうしたつて一華が居ると思われる向こうの様子が気になる。ぼそつと呟いた惣一を振り返る事なく、晶が開口する。

「水輪の飛竜のみであれば土輪の竜牙に勝ち田はあつたかもしけないが、金輪の竜眼をはじめとして、火輪の竜尾、月輪の竜爪を手にした千日手に単独で挑むのだ。無事で済むはずがない」

冷たい響きに、惣一は少女を凝視した。

「…………わかつてゐるのに一人で行かせたのか？」

「策があるようだつた。もしかしたら勝ち負けではなく、単に飯沼を逃がす為かもしれない」

光國は一華の護衛だ。奴が一華の為に動くのは当然である。わかつてはいるのだが……。

小学生の頃から一華とともに居て、ずっと一華を護つてきた。それは、惣一の”立ち位置”を揺るがす事実だった。

それで何かが変わる訳ではない。だが、まるで自分のいる位置にだけ巨大地震が発生したような感じだ。足元がぐらぐらして心許ないというか、居ても立つてもいられないといふか。

惣一は一華に一目惚れだつた。

初めて会つた時。早朝補習で嫌々乗り込んだバスの中。ハンカチを拾つて見上げた先に一華がいた。

浮かべた笑顔に、どうしようもなく惹かれた。自分だけの宝物を見つけたような気がした。なんとなく翌朝から同じ時間のバスに乗つて、彼女を探し続けた。そわそわして落胆する、浮き沈みの激しい日々が続き、そうして翌週の月曜日の朝、バスに乗り込んだ彼女の姿を見つけたその一瞬で予感は確信に変わつた。居ても経つてもいられなくて自分から声をかけた。名前を覚えてもらうと舞い上がりでどんどん会話を続けた。話すようになるとモット笑顔が見たくなつて笑い話を仕込むようになつた。おかしくらいに彼女に執着した。こんな事は初めてだつた。

光國はそんな彼女と毎日を共にしていたのだ。自分が彼女を見つけるもうずっと前から。

おかしいだらうけど、自分だけだらうと思っていたのだ。女子校育ちで、どこか人を遠ざける雰囲気を持つ彼女は、そりやこれだけ神がかつた容姿だ。モテるのだらうけど、仲の良い男なんていないと、馬鹿みたいだけど思い込んでいたのだ。

「…………水戸つてさ。やっぱ」

「なんだ？」

「いや、なんでも」

好きなのかな。飯沼の事。

女々しい感じがして、言葉を飲み込んだ。そもそも、こういう自分は嫌いである。他人には見せたくないなつた。

飯沼と会つてから、自分はどんどん情けない奴になつていく気がする。

つていうか、知らなかつた。自分にこんな面がある事。

軽快な音と共にエレベーターが開いて、内に入り込んでいた惣一を現実に引き戻した。

……考えるのはやめよつ。いくら想像したつて仕方ない。今、自分には一華を助ける術がない。部外者だつたのだ。認めて飯沼の無事を祈つて、水戸を信じよう。もう、嫌な自分が出てこないよう。改めて直視した正面のナースステーションには、明かりこそ点いていたが人つ子一人見当たらなかつた。なるべく音を立てないよう横切つて、惣一の体のある病室へと一人で急ぐ。

「巡回に行つてたりするのかな。ばつたり鉢合せしたら追い出されそうだな」

「面会時間外で、鍵を竜角で破壊してからの不法侵入だからな。当然だらう」

「自覚あるんだ。銃刀法違反」

「……ミコシバがあんまりしつこく咎めるからな」

俺言つたつけ? と考えて、はたと答へに迷つて。心中が丸聞こえだつたんだつけ。

「病院のスタッフと鉢合わせしたらどうする気だよ?」

「氣の毒だが、眠つてもらうしかないだらう」

「……平然と」

「仕方があるまい。水戸ならばもっとつまくやるだらうが、生憎私は結界を張るのが上手くないのだ」

「なら、一守は何が得意なの?」

「……斬る、事くらいか」

「……」

俺の視線を受けてか、心中を読んだか。一守は氣難しそうな表情で僅かに俺から顔を逸らした。

後方のナースステーションから漏れる光に照らされて、黒い髪の隙間から覗く赤く染まった耳が目についた。

惣一の個室の扉には面会謝絶の札が仰々しくかかっていた。

確かに、今日の検査結果に異常が見つかなければ明日にでも一般病棟に移されるはずだつた。このタイミングはありがたいかもしれない。個室であれば一守兄妹がドンパチやつても巻き込まれる事はない、など、思う。多分。じやんぼの有様を思い出して徐々に自信がなくなる惣一。だつて、恐らく兄が気を遣う訳はないし、妹の方は結界とやらが苦手ときた。あの時大惨事を防いだ結界を張つたのは、不在である水戸と一守爺だ。

躊躇なく晶は扉を開けようとして、さらに顔を顰めた。

「また結界か」

「今朝はなにもなかつたのにな」「準備が整つたという事かもしれん。どうやらせよ、一いつの行動は読まれているという事だ」

「…………農か」

「下がつてろ!!」シバ

竜角を手に一閃すると誘うよつに僅かに開いた隙間。とつてに手をかけ引き戸を全開にし固定されたのを見届けると晶を先頭に足を踏み入れる。

惣一の命を繋いでいる精密機械の音が止んでいる事を惣一が不審に思う前に、独特な匂いが鼻腔を撲つた。

「…………線香…………？」

廊下から漏れる弱々しい光を頼りに匂いの発生源を確かめようと見渡した部屋の様子が、以前とまるで違つていた。

「…………！」

音がしないのは当然だった。精密機械など、この部屋には一切置いていない。

線香の煙が細く棚引く四角い室内の中央に白いシーツで覆つたベッドが一つ置いてある。

「…………部屋違つ？ 間違えた？」

晶はぶんぶんと首を横に振る。

「位置は間違いない。だが、空間を弄られたかもしれない」「弄られたつて……でも、これじゃあまるで……」

靈安室じゃないか。

言い終わらぬ内に、晶は首を縦に振つて肯定した。顔を顰めている。

「無数の死者の気配が入り混じつていて。ミコシバ、それよりあれは……」

線香の置かれた台の前に設置されたベッドに歩み寄る。白いシーツにこんもりとした膨らみ。誰かが、寝かせられている。しつかりとした生地の白い布が一枚、顔面を覆い隠していた。

「つぞだろ……これ……」

自分の病室だった場所に寝かされている白に包まれた人物。青い顔で僅かに後退した惣一を横目に、晶が布をとる。

そこで寝ていたのは

「い、飯沼……！？」

二人は目を見張った。

飯沼一華は白肌をさらさらと白くさせて無機質な蠍人形のようにベッドの上に横たわっていた。

「飯沼……！ 嘘だろ！？」

真っ白になつた頭に熱い何かがぐわつと駆け上がる。

金縛りを解いた惣一は息をするのも忘れて彼女の体に駆け寄つた。

「飯沼！ 起きりよ、飯沼！」

何度も名を呼んでその体を揺すっても起き上がる気配は一向にない。長い睫毛が縁取る大きな瞳は硬く閉ざされたままだ。

「……飯沼、起きりつて……頼むから……！」

冷たく硬い感触。生きている感じがまるでしない。これじゃあまるで……無じやないか。沸き上がる恐怖で顔が引きつる。

「……嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だる……こんな、こんなのはつて……！」

ほの暗い絶望が真っ黒に染まる瞬間。脳に絡みつく線香の煙を払つように、惣一は両拳でベッドを思いつきり叩いた。

「……無事だつて、言つたじやないか！ なんで、なんで飯沼が、こんな…………！？」

「違う、//コシバ、これは…………！」

「それが現実だからですよ」

穏やかな声に振り返る一人。

戸口にこじやかな表情を浮かべて瑛が立っていた。

漆黒の長い髪を後ろで一つにまとめた黒衣の男は身構える一人の正面で仰々しい手振りで恭しくお辞儀する。

「よつゝん。現実へ」

ゆつくつと上げた顔から仮面のような笑顔が覗く。細められた切れ長の黒瞳からは真意は読み取れない。

「水戸は倒れたか」

瑛の両手首に嵌められた銀輪を皿にした晶が、動搖を示した惣一を庇うように一步前に出た。

「彼こそが一番の脅威だったからね、竜玉をだしきりの陣地に釣り上げてみたんだけど寸での所で逃げられてしまったよ。やつぱりさすがだね彼は。用意周到と言つべきか」

「追わずにこちらを優先させたのか。らしくないな」

「こちらにも事情があるものだからね。既に再起不能である彼に引導を渡すのは、後でも出来るかなって」

「おまえ……！」

今にも飛びかかるんばかりの惣一を片手で制し、晶が真一文字に結んだ口を開く。

「問おう、兄よ」
 「堅苦しいなあ。」お兄さん”って呼んでいいよと何度も……」
 「狙いはなんだ」

おや。と不思議そうに首を捻る瑛。

「晶ならひとつくに氣づいてことと思つたけど」「目的が黒竜の復活であれば竜角を献上しようと思つていた。だが、そんな単純な話ならここまで手の込んだ事はしまい。病院の空間を歪めた理由はなんだ。何故飯沼を」「生かしているかと言いたいのかい？」

「…………」

惣一の感情を読んだか、振り返らずに一守は告げた。

「生きている。竜玉の力は未だ感じる。それは抜け殻だ」「ぬけがら？」

惣一はベッドを振り返った。

何度も同じくしても悪夢のような光景だ。白い衣服に包まれた、眠るように横たわっている青白い顔はどう見たつて飯沼一華なのだが……。

「私にも理屈はわからないが、その飯沼からは竜玉の力を感じないのだ。しかし、幻のように見えて決してそうではない。その飯沼も確かに生きている。今はまだ」「意味判らないんだけど。彼女、飯沼じやないってのか？　どう見たつて本人……」「言つたでしょ。これが現実であると」

よく通る楽しげな声に晶が眉を潜める。

「”現実”とは、わざわざ竜駒を用いて世界の一部を侵食させてま

で存在させている異空間の事を言つてゐるのか？

「そうだね。確かにここは異空間で、今まさに死にゆこうとしているそこ

の彼女は異空間の飯沼一華だ。君達が救おうとしている彼女ではないね。だけど間違いなく彼女は飯沼一華だよ。竜玉を手放してしまつた後の、ね」

「水戸は、竜玉は他者には使えまいと言つていたが

「ああ、それは確かに誤算だった。彼女は例え仮死状態にしたつて意思を手放さなかつたよ。そんな真似が出来るのは、竜玉と同化している証

「竜玉と、同化……？」

晶の後ろで声を上げる惣一の表情を視野に入れて瑛は薄く笑んだ。

「さうですよ、御子柴惣一君。彼女は竜駒を所持しているのではなく、竜駒と同化しているのです。竜玉は彼女の中で混ざり合つて溶けています。もう切り離す事は出来ない」

その表情は、初めてその姿を見せた時、男が自分に告げた言葉を思い起させた。

……貴方には、全てが終わつた後、たゞぶり身の程を知りさせてから消えてもらおうと思つていていたのですが

あの時と同じ、冷めた瞳で自分の反応を見つつ、口調だけは楽しげに語る。一体、自分に何を知らしめようとしているのか。慇懃無礼に言葉を並べてくれるが、自分にはいまいち飲み込めない。

顔に出ていたのだらう。瑛はさらに笑みを浮かべて、まるで子供に語りかけるような優しい声でゆっくりと言葉を紡いだ。

「竜召喚は、彼女の命と引き換えるだといふ事ですよ

ねつとりと脳に纏わり付くような言葉は、まるで破滅の呪文のように響いた。

「…………なんだって？」

「竜駒は竜の体の部位で作られています。体を返さなければ竜は現存できません。彼女は竜玉と混ざり合っています。恐らく現存時は彼女毎竜に取り込まれるでしょう」「う

真っ白になつた頭に言葉がゆっくりと漫透してゆく。

やがて浮かんだのは、時々見つける一華の悲しげな表情。そして。

ミコシバも私を止めるか？

「…………一守」

自分でも驚くほど低く、乾いた声が出た。

田の前の小さな背中は振り向かない。

「おまえ……、おまえ知つていて俺に協力しろなんて

「…………ああ。言った

晶の考えはわからない。だって、俺には彼女の心は読めないから。

「どうしても、竜は復活させなきゃならないのか？…………その

ちょっと変な奴だけど。能天気に生きてきた俺とは全く違う生き方をしてきた奴だけど。だけど彼女は真っ直ぐな人間だと思った。昨日会つたばかりだけれど、いい奴だと。信じるにたる人間だと思わせた。

「……飯沼が、死んでも」

瞳の強い光が。

「飯沼とて竜駒巫覗だ」

未だ手に残る、柔らかな感触が。

「私とて同じ立場なら、『』の命で竜が復活するのならば本望……」

「……おかしいだろ」

「なにが」

「おかしいだろ、そんなの……」

きつぱりと言い切る、その意思に、晶は驚きに見開かれた瞳で僅かに惣一を振り返った。

「妹を責めないでやつてくれますか?」

「いやかな表情のまま口を挟んできた瑛を睨みつける。構わず、さらじ言及しようと口を開く惣一を、

「わざわざ口にしなくたって、君はもう十分彼女に訴えているだろうに」

穏やかな表情の男が放った、冷静な声が遮った。

「確かに晶は昔から真面目一邊倒で、融通の利かない性格だ。その為に誰かと衝突する事も多かった。しかし、そもそも人の価値観は決して等しくない。個は寄り添う事は出来ても交わり一つになる事

はない。それなのに自分だけの正義を他者に押し付けるのは感心しないですね。御子柴惣一君

「押し付けてなんか……、俺は普通に考えて……！」

「いや、君は君個人の意思よりに物を言つてこるよ。好いているのでしょう、飯沼一華を」

さりと紡ぐ男の声を耳にした瞬間、カツと顔が赤くなつた。
そんな事を、なんだつて今、飯沼を奪つたこんな奴に言われなく
ちやならないのか。

「…………そんな事関係な…………！」

「いいえ、大いにあります。君が彼女に特別な感情を抱いてしまつたが為にこの現状が成り立つていてのですから」

「どういう意味だよ、意味わからんねえよ！」

「わからないのなら、わかるうとすればいい。」この部屋に全てが在ります」

続く不可解な言葉に表情を歪ませる惣一。

「ここに全てが在る……だつて？」

飯沼が靈安室に寝ているだなんて、これ以上ない位悪ふざけな空間にか。

考えれば考えるほどに、怒りが沸々と頭に上り、支配して思考を短絡化せらる。

「飯沼が死んだ方がいいっていつのか？ おまえも、一歩と回じようにな……！」

「それは違います。君は主觀で物を言つていて。人である以上無理もない事ですがね。晶は言い訳をする子じゃないから、私が彼女の代わりに弁解してあげてもよいのですが」

「弁解だ……！？」

「ええ。眞実とは存外、ストレートで分かりやすいものです。もつと俯瞰で世界を見てください。そうすれば、直すと理解出来るはずだ。だつて君はもう持つてないんじゃないですか」

「持つてこないって、何を……」「
眞実を」

ドクン。

鼓動が、何故か一際大きく響いた。

「ミロシバ……？」

惣一の反応に、晶は怪訝そうに眉を歪ませ、瑛は黒瞳を細める。

「見よつと思えればなんでも田代出来るし、わからうと思えればなんでも理解できるはず」

「だから、あんたの言葉はわから意味がわからないつて……何

が言いたいんだよー。俺は何も……！」

「わかるうとしないのなら、君には不必要つて事で。私がいただいてもいいんですね？」

言い終わらぬ内に、瑛は手の内に八角形の枠に囲まれた丸鏡を出現させると、鏡を惣一に向けた。

一度だけ目にした事がある。瑛に捕らわれた時、一華が『竜眼』と呼んだものだ。それが今、惣一の全身を、困惑の表情を映し出していた。

「なんだよ、それ」「…………やはりか」

瑛は溜息交じりに呟くと、竜眼を小さくし衣服のポケットにしま

う。代わりに手にした長方形の薄い紙の表面を人差し指と中指でなぞった後、惣一に向けて飛ばした。紙は、まるで鳥のようなスピードで惣一に接近すると目前で消失する。疑問に思った刹那、猛烈な圧力が惣一を襲った。上下左右前後、あらゆる角度から押し潰される……！

意識が吹き飛ぶ瞬間、暗くなつた視界で銀の光が縦に走った。圧力から開放され、惣一はその場に崩れ落ちた。

// SIDE - A //

「ミロシバに手をかけるのは、私を倒してからにしろ」

竜角を手にした晶が、刃先を瑛に向ける。

「おや。自分を信じぬ男を救おうといつのかい？　君を庇つた兄と敵対しても？」

「周りは関係ない。私は私の決めた通りに動くだけだ」

「勝てないと判つていても？　真実も知らぬまま散つて、君はそれで本望かい？」

「兄は言つた。ここには全てが在る。これこそが、現実であると」

「……気づいたのか。晶」

「ああ」

「大事なのは、状況に囚われぬ意志と判断力、それに物事に動じぬ強靭な精神力』。富司の教えが生きているのだね」

ふと懐かしい表情で晶を見る瑛。

垣間見た瞬間、まだこの手が彼に届く気がして晶は思わず叫んだ。

「兄、兄が望んでいるのは、今この手が復活させる理由はもしかして……」

だが、自分の知る温かな表情は、その一瞬で消える。

「私情と心靈省の利害が一致したという訳だ。そのために今一度心靈省に移り鍛錬を続けながら機会を伺っていた」

「……心靈省を出る時、兄は一度とこには戻らないと、そう私と誓つた。力をつけて、我々での馬鹿げた施設を破壊しようとも。それはもう……！」

「本当はもう、解つてているのだろう晶

自分を宥めようとする、困ったような笑顔。無駄な物を全て削ぎ落としてしまった、生活を共にしていた頃とはまるで別人のような痩身の男が今浮かべている表情はしかし、自分が最も好きだった兄の表情と寸分も違わなかつた。

晶は愕然とする。瑛は正気だ。心靈省に操られているのではなく、本当に自分の意志で成そうとしている。

「おまえが関わる必要はない。悪いようにはしない。だから、私に竜角を渡して欲しい

「……だが」

短く切つた言葉。晶は僅かに、兄から視線を逸らしていた。

「だが。兄は私を利用した」

「……………晶

「おかげで。関係、なくはないのだ、私は、もう

「よく、考えてみなさい。晶。式守に執着するのがおまえの悪い癖だ。痛覚すら共有しようとすると。だから、式は選べと昔から。……」

「……式じゃない！」

いつの間にか握っていたはずの龍角が数珠に返っていた。気づいたら、両手を握り締めて、地を見ながら、晶は全身で叫んでいた。

「ミコシバは、式なんかじゃない！」

大きなまつすぐな黒瞳で瑛を見返す。

射抜かれて思わず瑛は絶句した。

それは、瑛が今まで見たこともない晶の表情だった。

「……わかつているのかい、晶。おまえがやろうとしている事は私と、それからそこに寝転がっている男がもつとも嫌がる事だよ」

「無論」

「龍角は攻撃型。おまえと同じで、守るには不向きだ」

「ああ」

「月齢十五日前後はお前の靈力が最も落ちる刻だね？」

「そうだな」

「私は……おまえより、強いよ」

「承知している」

「……………そうか」

瑛は目を閉じた。

いつの間にかその手に、一メートル程の大きさの棒を握っていた。

打撃部分に節目のような突起が二十一も付いた硬鞭。

瑛の意により、硬鞭に銀色の紋様が浮かび上がる。

「竜爪……！」

竜爪は確か、精神操作が可能な竜駒 気づいた晶が動くよりも早く、

「残念だよ晶。まさかこんな事にならうとは」

表情を完全に消した瑛が、硬鞭を振るつた。晶の体が完全に固まる。

「……っ」

しかし、晶の顔に敗北の色はない。

近づこうとした瑛を、無数の風の刃が襲つた。晶の目前に、イタチの動物霊が浮かぶ。

「式守？……竜爪の精神操作は竜玉以外では破れないはずだが」

地に落とした竜牙の描いた魔法陣が瞬時に発動する。

噴き出す大量の光は瑛のすぐ間近まで迫つていた式の攻撃を全て反射させた。

「……」

が、晶は無傷だ。

「なるほど、もう一体いるね。竜爪を受けたのは

一輪の竜牙がそれぞれの軌跡を描いて晶に飛ぶ。

動けないはずの晶が瞬時に前に出て、竜角を振るつた。竜牙を地

に叩き落す。

「 不可視にした式だつたか。数年間見ない間に少しあは成長したんだね。ではこちらも」

その手に現れる身の丈以上の大きさの『 飛竜。

「 少し、本氣になろうか」

同時に晶の周りを、何千何万の炎槍 龍尾が包囲した。

「これは.....ー?」

目前に現れた一本の龍尾を手に、瑛が飛竜の光弦を引く。と、周囲の龍尾の穂先の炎が一斉に晶を向いた。

「 龍眼でコピーした龍尾だよ。性能も本物とほとんど変わらない。四方八方から発射される全ての龍尾を龍角で打ち落とす事は不可能だろう? かといって避けねば後ろの御子柴惣一君に当たってしまふかもしれない。お姫様は自身で身を守れるかもしれないが、.....」

「 お手並み拝見といこうか」

「こりと笑つて限界まで引かれた光弦を離す。龍尾が放たれると、それを合図に龍尾のコピーも一斉に晶に向かつて飛んだ。動じず、素早く三つの印を結んだ晶は、懐から取り出した四枚の薄紙を人差し指と中指の間で挟み上から下まで指を滑らせ発光させると後方に投げた。紙はあるで意思を持つかのように、それぞれの方向に向かつて飛んだ。

「障壁」

晶の言葉で四枚全ての紙が弾け、惣一達の前に不可視の壁が出来た。確認する事なく疾走した晶は正面から飛んでくる龍尾だけを龍角で打ち落としながら瑛に接近する。後方から今までに己の頭を貫かんとする龍尾の接近を感じた晶は、瑛の目前で龍角の刃先を床につけると棒高跳びの要領で瑛を飛び越えた。

「相変わらず体育会系で荒々しいなあ」

晶を追つて目前に迫つた無数の龍尾を、瑛は龍眼を掲げて瞬時に完成させた強固な結界壁で防ぐ。まるでガラスが破損するような音を立てて碎けると、地に落ち消滅する龍尾のコピ。振り返つて、己の後方に着地し身を翻した晶の振るう龍角を、手にしていた飛竜で受け止めた。

「太刀筋はいい」

「…………！」

晶は驚愕に瞳を見開く。これまで龍角に切れぬものはなかつた。しかし、今兄の手にしている華奢な飛竜が、何故か斬れない。

「龍角は単純になんでも斬る。形のない物も斬る事が出来る。時空だろうが人の魂だろうが真つ一つだ。でもそれは逆に、なんにでも触れられると言つ事だ」

「ぶるぶると震える巨大な銀の刃が己の頭上数センチの所に迫つていても、瑛は表情を崩すことなく歌つよう語る。

「御子柴惣一は確かに消失する運命だった。消滅するはずだった魂

の行く末を斬つて留めたのは、実は晶なんだよ」

「……私はあの時、強烈な神力 恐らく竜玉の波動を感じてあの場に駆けつけた。だが、ここが現実であるのならば、仕組んだのは飯沼ではないはずだ」

「ああ。仕組んだのは私だ。晶の特殊な魂昇天手順を知っていたのは私だけだしね。それに神力を感知して他の竜駒巫覡も集まつてくれた。一石二鳥というわけだ。首尾よく竜玉、竜角、竜牙以外の竜駒を手に入れる事が出来たよ」

「どうしてミコシバを救つた？ 兄は……飯沼さえ助かればそれでよかつたはず……」

「たつた一日とは言え、そんなに彼の近くに居たのに気づかなかつたのかい？」晶

「勿体つけていいで」

晶の表情に、ふつと笑つて瑛はそれを口にした。

晶の表情が驚愕に歪む。

その隙を見逃すはずもなく、瑛は瞬時に手にした竜尾を正面に突き出す。

槍の刀身 炎塊が、晶の薄い腹を貫通した。

「…………つ！」

焼けるような痛みに晶の力が緩んだ。頭上の竜角の刀を受け流した瑛は数歩下がりながら竜牙を放つ。弧を描いて晶の後ろに回りこむと円形の刃は小さな身体を執拗に切り刻んだ。同時に、正面から飛ぶ飛竜の衝撃波。これを察知して、なんとか氣力を振り絞り竜角で打ち払う晶。完全には斬れず、軌道を逸らされた衝撃波は晶と、障壁の向こう側にいるもの以外のあらゆる物質を全て破壊した。室内の外 建物が無事だったのは瑛の張つていいる結界のおかげである。

室内を舞う大量の粉塵の中、瑛は困った表情で戻ってきた一輪の竜牙を掴んだ。

「炎上しなかつたね。身を任せていれば痛いのは一瞬だけだったのに。とにかく式守で身を守つたか」

後方に跳躍し距離をとると、着地と同時に片膝をつく晶。取り出した護符を傷口に押しつける。吸い込まれるように消えた護符が大量の出血を止めると同時に痛覚を麻痺させた。晶は素早く息を整える。

……咄嗟だつた。炎が自分を貫通する直前、水属性の体積の大きな式守をと考へて瞬時にイルカ守を出した。イルカ守は現存したその一瞬で自分に鋭利な痛みを遺して消失した。しかしその犠牲を超えて、竜尾は自分の身体を貫通した。

「傷は浅くはないといふのに竜角は手放さないのだね」

晶は未だ荒い息で体勢を整えながら、それでも瑛から片時も視線を外さなかつた。その瞳の色を慈しみの表情で眺める瑛。

「そうだね。手放せば、晶の意志は貫けない。……竜角を継いだけの事はあるようだ」

瑛の言葉に、晶の精神が大きく揺らぐ。

竜角は、兄が受け継ぐはずのものだつた。

でも、富司は選んだのは、何故か血の繋がりのない自分だつた。あの時の兄の表情が脳にこびり付いてしまつて、未だ竜角を手にする度に思い起こされる。

柄を握る度に、問われるのだ。

何故おまえが手にしている、と。

「だけど、まだまだだ」

静かに言葉を紡ぐ兄の浮かべる薄い笑み。しまったと思った時は遅かった。竜爪の先端が晶の体を縛っていた。

「せめて一瞬で終わらせよう。だから、今度こそ抵抗するんじゃないよ」

正面で、飛竜の光弦が限界まで引かれる。瑛は矢を手にしていかつたが、代わりに飛竜に集まる尋常ではない靈氣を感知して晶は戦慄した。なんという膨大な力だろう。あれが放たれれば自分は愚か、後ろの障壁も、この室内も人も壁も、その背後に在る景色も全て木つ端微塵に消し飛んでしまうだろう。ミコシバも

なんとかして竜爪の呪縛を解かねば。いや……解かずとも打ち消してしまえば。迷っている間はなかつた。一瞬で精神集中。手にしていた竜角に全ての靈力を注ぎこむ。刃に碧光が走る。その淡い発光が先端まで行き着くと、晶は叫んだ。

「……招雷！」

瞬間、天から落とされた轟光が、あらゆる障壁、呪縛を超えた晶を直撃した。

意識が消し飛ぶ寸前、風穴の開いた腹を押さえ付けてなんとか踏み留まつた晶、落雷の一瞬前に放たれた飛竜の力を、雷光の宿った竜角で叩き斬る。間一髪だった。耳をやられてしまつたのか無音の世界で、一刀両断された飛竜の衝撃は晶とその後方を残して全てを綺麗に吹き飛ばしてしまつた。忽一と一華、二人の背後の直線状にある壁や景色だけは破滅を免れ、何事もなかつたように残された。その光景は、まるで合成写真のようだった。

その少女は、既に虫の息だった。

腹部、背中の穴から流れた血で真っ赤に染まつたスカート。ぼろぼろになつてしまつた制服。その布地に守りの術が施されていた事に瑛はこの時初めて気づく。……富司の仕業か。

少女は、自分が龍眼で結界を修復する数十秒の間、立つたまま微塵も動く事はなかつた。……ひょっとしたら気絶しているのではないだらうか。

「たつた五分程なのに、満身創痍だね。苦しいだらう晶」

言つて放つた龍牙は抵抗しない小さな身体を容赦なく刻む。倒れない所を見るとまだ意識は残つてゐるようだ。

「……どうして。君はそんなに一途なんだい？」

下肢を斬られ、踏みとどまつてゐた晶が大きくよろめいた。しかし倒れる事を許さないのか、倒れようとする方向から飛んできた龍牙がさらに華奢な身体を刻んだ。その後も続く衝撃に、晶の身体は木の葉のよつに踊る。

「本当は弱くて小さな女の子なのに。修行なんて適当でよかつたんだ。元々晶は一守の人間ではなかつた。錘を唐突に託された時は恐れからあんなに責をめていたのに。断ればよかつたのに」

それでも、真つ黒に焼け焦げた小さな手は決して龍角を離さない。

「ここまで、昔の私を守らうとする」

既に答える気力がないのか、耳をやられて届いてもいなか。晶は成すがまま身体を弄ばれるだけだった。構わずに瑛は続ける。

「私がいいと言つたのに」

「…………だ」

漏れた音に注意深く見れば、晶はかすかに口元を動かしていた。意を汲んで手元に返つてきた竜牙を瑛は腕輪状に戻す。

「…………だつ…………ら」

倒れそうになるのをしかし踏みとどまつて、黒い煤と赤い血で覆われた顔を上げる。

晶の真つ直ぐな眼光が瑛を貫いた。

「…………私の目的は、ずっと、兄、だつたから」

か細い声に一瞬、驚いたように瞳を見開いた瑛。「本当に、君は…………」小さくそつそつと優しく苦笑する。

「折角の愛の告白が、過去形かい」

「…………あい、などでは…………」

いつもいつでも。困ったように表情を歪ませるJの少女が、本当にかわいくて仕方のなかつたあの頃。

自分はどこかで、この少女の想いに気づいていたかもしれない。けれど、自分は、選んでしまった。

望むものを手に入れるために。

少女を、たくさんの中を置き去りにして

「　いいよ。晶、君を解放しよう」

穏やかな表情で、瑛はゆっくりと飛竜を構えた。

「私を含めて、全てのものから」

瑛が飛竜を構えるのを見て、すぐに晶は竜角を構えようとした。が、力が入らない。黒い両手を震わせてなんとか刀身を上げようとするが半分も上がらない。

「理解しているだろ？。竜駒は力ではなく、靈力を持つて初めて揮う事が出来る。要するに、晶は今エインストしているんだ」

「えん……すと……だと？」

「晶」

顔を上げた晶が目にしたのは、あの頃慕っていた瑛の、優しい兄の表情だった。

「もつ、楽になつていいんだよ」

許されて、ふつと、肩の荷が下りたような気がした。全身の力が抜けていく。

その場に膝をついた晶。顔を上げると、限界まで引かれた飛竜が、放された所だった。

竜角を扱えない今、自分に防ぐ手立てはない。（すまない）脳裏に浮かんだ男に謝ると、観念して晶が目を瞑る。

が、衝撃はいつまで経つても訪れなかつた。

田前の大配に、畠が田を開ける。

「.....みじ、じば.....?」

田の前には、両手広げ畠を守つた惣一の背中があった。

// TO RETURN //

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4818t/>

Trigger Point

2011年11月27日21時54分発行